

史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇〇四年 第二八号
創立十周年記念号



伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵

伊能大図182号の部分「竹田」付近

第七次測量で五泊して計測された竹田の岡城周辺である。初め城の大手側を測り、あと嶋津の精兵に攻められても落ちなかつた堅塁を横目に眺める形で測量が進む。岡藩は九州の中小大名の触れ頭で、幕府の訓令はまず岡藩の江戸藩邸に伝達され、ここから廻状の形で、諸藩の江戸藩邸に伝えられた。各藩は急いで国許に飛脚を差し立てた。

伊能隊は陽暦の一八一一年一月一三日より五泊して周囲を測った。領界には代官と金奉行の倅(都合があつて父の代理だつたのだらう)が出迎え、宿に着いたあとで、郡奉行と町奉行が挨拶に出たという。

それにしても中規模の城下に五泊は長い滞在である。余程いこちがよかつたのであらう。

(渡辺)

(題字は伊能忠敬の筆跡)

研究会の十年を祝う

ターン人生

特集1 忠敬が地球図を描く

特集2 伊能忠敬研究会10年間の歩み

特集3 稲は伊能忠敬に勘当されたか

特集4 忠敬を楽しむ

堀田佐野藩資料展

忠敬さんの鼻メガネ

会員御縁で三つの話題

忠敬の歩いた道を高山に迎る

話題

伊能忠敬と北陸測量展が開催

忠敬の用いた瘡の治療薬

瘡の診療投薬を測量日記にみる

広島県三和町に伊能測量石碑建立

研究ノート

伊能古文書教室『旌門金鏡類録』(五)

大日本沿海輿地全図―出雲伯耆地方―

東蝦夷地の会所

伊能家文書紹介(三) 高橋三平重賢書簡

二つの家訓

忠敬を詠む(二)

芳名録より

地域史料紹介

伊能忠誨日記(七)

忠敬談話室だより 別海は鮭の季節

お知らせ

10周年記念集会のご案内

目次 38号 10周年記念号

中江 利忠	一
編集部	二
渡辺 一郎	四
佐久間達夫	一八
柏木 隆雄	五三
河島 悦子	五四
川上 清	五六
加藤 忠三	五七
忠敬記念館	六六
杉浦 守邦	六七
佐久間達夫	六八
中国 新聞	六九
小島 一仁	二八
鈴木 純子	三二
堀江 敏夫	三五
安藤由紀子	四二
伊藤 栄子	四八
伊能 洋	二六
伊能 陽子	二七
佐久間達夫	六〇
丹羽 菊乃	七〇
事務局	七二

伊能忠敬研究会の十年を祝う

ターン人生

中江 利忠

「私たちは、いわば、二回この世に生まれる。一回目は存在するために、二回目は生きるために」。フランスの思想家、ジャン・ジャック・ルソーはその教育論の著書『エミール』の中でこう述べている。

朝日新聞社の週刊誌『AERA』が「新しい大人の暮らし」と副題を掲げた臨時増刊号を出し、今年一〇月には「ハッピー・ターン人生」と銘打った特集にしている。東京のコンピューター会社の社員を三十年間勤めた五十歳の時に退職、長野の山村に工房兼自宅を作って四年、いま万華鏡作家として成功している例や、地方公務員から中国での日本語教師へ、主婦からリフォーム・ショップ経営へ、といういろいろな「第二の人生」への足取りが紹介されている。その多くが、定年やリストラ、子供の結婚など一般的な節目を待つことなく、四十代、五十代でも、またたとえ収入が大幅に減っても、転職やいろいろな「ターン人生」に挑戦していることに驚く。

「第二の人生」という言葉は古くから使われているが、本格的な高齢化社会が到来した二十一世紀の日本で、この言葉が初めて本当に現実味を帯びてきた、といえる。

そして、「生きるために」、もつといえは真の生き甲斐を全うして二回目の人生をやつてのけた人物が、二世紀も前の伊能忠敬さんだったことに、思い至るのである。

自らも都庁のお役人から作家に転じた童門冬二さんも、忠敬さんの人生は「起承転結」ではなくて「起承転々」だった、と評伝で書いておられる。最後まで転がりつぱなしで、「青春時代と円熟・老成時代とが逆転している」として、しかも五十五歳からの日本全国の測量という大事業が可能だったのはカネ（経済力）・ココロ（精神力）・健康（体力）という「三つのK」が第一の人生から周到に準備されていたからだ、と分析されている。

新聞の世界一本で七十五歳にもなってしまった私など及ぶべくもないが、せめて忠敬さんの持った体力だけでも見習って、老後の趣味にいそしむだけである。

（なかえ としただ・朝日新聞社顧問）

忠敬が地球図を描く
武蔵大学展で公開

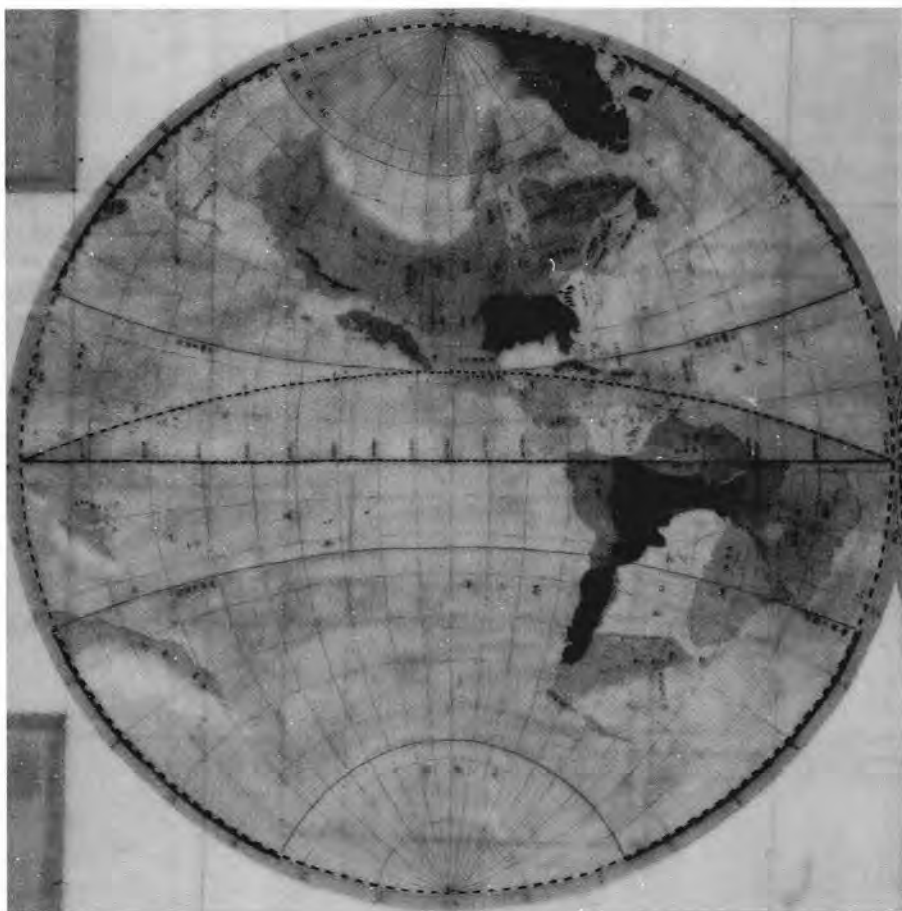


11月9日から武蔵大学で「大図フロア展と伊能家所蔵品特別展」が開催されるが、忠敬の描いた世界図がはじめて公開される。

この地図は伊能家で所蔵する紙本着色で、縦109^{センチ}横207^{センチ}ある。作られた時期は忠敬の全国測量開始以前と思われる。

「この世界図は伊能家に伝わる地球図で、図中に忠敬の筆跡が認められる。依拠した原図については、地理の先学である織田武雄、鮎沢信太郎両氏の論考があるが、確定していない。伊能家にも本図についての記録は見あたらない。忠敬が測量を始める少し前の18世紀末には、蘭学の盛行により新知識が流入し、林子平、司馬江漢を始め複数のルートで地球図が紹介されていた。忠敬の地球図は、林子平の図とも司馬江漢の図とも同じではないが、江漢図により補足したことが読み取れるという。

当時唯一の科学技術官庁だった天文方に出入りしていた忠敬は、遇々それらの中の一つを見る機会があり、自写したのではないかと思う。彩色など作業の一部は、画工の協力を得たかもしれないが、骨子は手写だったろう。知識欲旺盛な忠敬が珍しい地図を見て、すぐ写させて貰おうとするのは納得できることである。」と渡辺代表が解説をしている。



左は西半球、南北アメリカと太平洋。右は東半球、極東の日本からアジア大陸、ヨーロッパ、アフリカに南極まで。二つの図では、経度は左右へ10度刻みで90度まで描かれ、その幅は端の方へゆくほど広がる。上下は赤道から北極、南極まで9分割。緯度幅も経度と同様、極に近づくほど広がる。図は赤道が実線で、黄道は点線で表わされ、北半球に磨羯回帰線、南半球には巨蟹回帰線と描かれているのが見える。五色の彩色がなされ、海陸国々の区分に使われている。

右図ではインド洋にあたる應常亜海を中心に、北は北極、大北海から欧羅巴、地中海、亜細亜、黒海。アフリカ西方に大西洋、南は南海から大南海が読める。南極線の上には南極大陸のことが未審南地とある。右上に日本が赤で描かれている。本州は大日本と書かれ、九州、琉球と続きフィリピンは呂宋と見える。

左図の左上隅に蝦夷と読めるところは、今の樺太あたりにあたる。半島ではなく島になっている。左図では上に北亜米利加、下は南亜米利加、中には国々の名が漢字で記されている。グリーンランドだろうかカナでグルランドアと読める。海は北大海、西大海、大東洋など。

当時の最新の地理、科学知識を学んでいた忠敬さん。世界地図を視野に全国測量。新たな関心がこの地図から生まれてきた。(福田弘行)

特集 2

ドキュメント 伊能忠敬研究会 10 年の歩み

伊能大図 214 枚 史上初の全図公開まで

渡辺 一郎

伊能忠敬研究会はおかげさまで発足 10 周年を迎えました。会員のみなさまはじめ、たくさんのご支援に感謝し、厚く御礼申し上げます。

研究会がかかわったイベントは、95 年 11 月に佐原でおこなったフランスのイブ・ペイレ氏蔵伊能中図の三日間里帰り展が初めてでした。以後、伊能忠敬は全国区であると称して、東京発信に切り替えました。

「江戸博・伊能忠敬展」から「伊能ウオータ」「俳優座の演劇・映画」「NHK・お正月時代劇」「富岡八幡宮の伊能忠敬銅像建立」「アメリカ伊能大図発見」「東京国立博物館の伊能展」「ペイレ中図修復」から神戸市立博物館から幕張大図展まで 12 箇所の「アメリカ大図単独フロア展」と、ほんとうによく輪が広がりました。この間、テレビ放送、新聞雑誌の記事は数え切れないくらいです。

率直にいつて、これほどまでに忠敬人気が高まるとは夢にも思っておりませんでした。10 年の歳月とはまことに偉大なものです。多くの方々のお世話になって実現した 95 年から 10 年間の主な出来事を、メモをたどりながら振り返ってみました。

伊能忠敬研究会の発足から江戸東京博物館の忠敬展

1995 年（平成 7 年）3 月 27 日 フランスに伊能図があるのを知り（日経記事）渡辺夫妻が調査のためパリ郊外のイブ・ペイレ氏を訪問。最高級の伊能中図 8 枚の完全揃いを確認し、日本展示を打診する。

95・4・6 朝日新聞夕刊「ひと」欄で渡辺の渡仏調査が紹介される。パリ支局長・清水弟さん（当時）発の第一報であった。

95・5・上旬 朝日新聞を見た伊能陽子さんから渡辺に電話がかかる。運命の電話だった。世田谷伊能家との付き合いのはじまりで、この電話が無かったら伊能忠敬研究会は発足しなかったかも知れない。伊能さんのお宅に地図の断片が色々あるので見て欲しいということでした。

95・11・17・19 佐原市中央公民館でフランスの伊能中図里帰り展を開催（主催 佐原市・フランス中図展実行委員会）。佐原市の教育次長・香取禧良さん（当時）の尽力であった。市の予算は約 160 万円。朝日新聞の清水弟さんが「朝日新聞日曜版」編集長に戻って御協力をいただく。日本経済新聞は文化欄でフランス中図の里帰りを大きく報じた。NHK も取り上げていた。三日間に各地から 3300 人が佐原へ集まった。三好唯義、師橋辰夫（故人）、清水靖夫、鈴木純子さんから古地図専門家を集め検討会を開催。

いっぽう、安藤、伊能、渡辺の三人が中心になって伊能忠敬研究会を結成することとし、会場で参加を呼びかけた。会員目標 50 名。

95・11・96・3 伊能忠敬研究会会員募集の輪を広げる。全国から、歴史家、社会科教師、大学教員、主婦、測量技術者、忠敬ファン、土地家屋調査士など多彩な顔ぶれが入会。会報第一号（伊能図探求継承第 7 号）を 3 月 1 日に発行する。

96・5・22 「フランスの伊能図を江戸博あたりに持ってきたら」と朝日の清水弟さんと、朝日 OB の雪山さん（元ボン支局長、渡辺と同居

に近い。清水さんを紹介していただいた)にいわれる。

96・6・23 第一回伊能忠敬研究会例会を開く。会員74名中47名参加。富岡八幡宮から間宮林蔵墓まで歩測大会をおこなう。浅井京子さん(当時富岡美術館学芸課長、現在早稲田大学助教授)が歩測名人第一号に入賞。清澄庭園で懇親会。

96・8・15 江戸東京博物館に「伊能忠敬展」を提案する。役員の学習院女子部教頭・斉藤仁さん(当時)と同道。(忠敬は深川黒江町から、日本測量を始めたのだから、江戸博で忠敬展をやるのか相応しい、というのが提案理由である)

96・2・11 九十九里町は町制施行40周年、忠敬生誕250周年を記念して、徳富蘇峰筆生誕地記念碑の隣に記念公園を設け、伊能忠敬銅像(制作者 千葉大学 上野弘道氏)を建立する。郵政省、忠敬生誕250周年記念切手を発行。

96・11・10 佐原で第二回例会。鈴木市長挨拶。小島一仁、渡辺一郎両名が講演。世田谷伊能家の史料などを展示。初めての自前の展示と講演会だった。

96・11・20 江戸東京博物館の担当から伊能忠敬展内定の連絡を受ける。朝日新聞と組みたいとの事務方の意向があった。

96・12・4 国土地理院長の野々村さん(当時、現在日本地図センター理事長)に相談し、野々村さんも「朝日」に持ち込むことに賛成。話を

してくれることになる。

96・12・20 朝日新聞・清水建宇さん(当時出版局企画担当、現在論説委員)ほかが研究会事務所に来訪。「日本歩け歩け協会・木谷専務理事らと、日本一周する伊能ウオークを考えている。朝日新聞120周年記念事業として提案したい」とのお話。もちろん賛成。

96・12・21 日本テレビで「人生50才の旅だち・伊能忠敬」放映される。(千葉県提供の45分番組。忠敬役は渡辺一郎。解説・案内は江守徹。企画段階から協力した)

97・上期 江戸博「伊能忠敬展」実現のため、佐原市の伊能忠敬記念館学芸員に展示物の借用を打診、英国海軍水路部に伊能小図借用申し入れなど事前交渉をおこなう。フランスのペイレさんにも了解をいたしていた。江戸博の「伊能忠敬展」内定をうけて、俳優座の古賀さん「俺も前から演劇と映画を考えていた」と仲間に入る。

97・9・29 「渡辺一郎著・伊能測量隊まかりとおる」出版。この本は日経文化欄の「フランスで伊能中図発見」の記事を受けて、NTT出版から申し出があったもの。古巣の人脈とは無関係で、あくまで出版企画ベースの話だった。この本は評判が良くて二ヶ月で再版がかかり、六刷りを重ねることになった。

97・10・13 日歩協・木谷専務の発案で、江戸博「伊能忠敬展」、伊能ウオーク、俳優座の企画など、グループ内の氣勢を揚げるため、「伊能測量隊まかりとおる」の出版パーティを日比谷のプレスセンターで開

く。関係者約150人集まる。伊能研から40名が出席。

97・10・26 「気象庁で最終本伊能大図写本43枚発見、国会図書館に移管」と全国紙各紙一斉に報道。発見者は研究会員で国会図書館特別資料課長（当時）の鈴木純子さん。渡辺は伊能忠敬記念館青木学芸員と調査を委嘱され、事前チェックをおこなった。

会員でもあった朝日・堀田記者が報道面で尽力。のちに本図は、国会図書館と江戸東京博物館で同時公開し「伊能忠敬展」を盛り上げた。

98・初 江戸博の忠敬展、伊能ウォーク、俳優座舞台劇「伊能忠敬物語」は共同プロジェクトに決定し定期的に連絡会が開かれるようになる。のちに、土地家屋調査士会、国土地理院からも、代表が出席されるようになった。

98・4・10 ①伊能ウォークの計画が朝日新聞紙上で発表される。

②高輪プリンスホテルで3プロジェクトのオープニングパーティが開催された。研究会員90名が出席。九州、関西など遠路をいとわない方々の熱意に感激する。

③同日付けで読売新聞「江東版」は、江戸博「伊能忠敬展」併催の歩測大会（主催・日歩協、伊能研）を大きく報道。江東支局に元氣な記者がいて、渡辺に取材してやったことだが、朝日のパーティで大きな話題となった。

98・4・16 江戸博の「伊能忠敬展」開幕直前であるが、北海道の研究会員・高木崇世さんから、日本にも伊能小図の本州東部があるよとの連絡を受ける。渡辺が急遽東京都立中央図書館を調査した結果、日

本には無いとされていた伊能小図本州東部が見つかり、日本経済新聞に連絡して記事にしてみよう。

98・5・15 都立中央図書館の伊能小図について他紙の追従はなかったで、図書館から記者発表に値するかどうかについて意見を求められる。日本にないと言われていた地図の発見なので勿論発表に賛成。東京都教育庁は記者発表し各紙報道。大ニュースとなる。朝日、日経以外は全国版。朝日は東京版。日経は見送ったが、のちに詳しい解説記事を書いて追随した。本図もあとで江戸博の「伊能忠敬展」に展示された。



98・4・21・5・6・21 ①江戸博「伊能忠敬展」開催 過去5年間で2番目の入場者があった。（入場者数111,399名を記録）

②期間中に併催事業として、忠敬隠宅から浅草吾妻橋を結ぶ約10kmのウォーキング&歩測大会を4回開催（日歩協との共催）。ウォーキングコース上に3箇所の歩測区間を設けた。調査票提出者509名、歩測名人6名、歩測達人18名が誕生。

③井上ひさし氏の講演会も開催。江戸博の講堂は満席。多数の方が床

に座って聴講した。

④「伊能忠敬展」図録を研究会で作成した。学芸員にとって大変つらいという図録を引き受け、会員で分担執筆。制作はアワプランニング。目下、伊能忠敬を調べる人にとって必須の参考書となっている。

⑤国土地理院を中心とする測量グループの御尽力で「ミュージックショール・伊能測量と近代測量」を上演。忠敬役は渡辺。近代測量の解説は野々村院長。伊能測量と近代測量を舞台上で演じて好評だった。

98・6・16 NHK歴史番組「堂々日本史」で伊能忠敬を放映。渡辺は伊能測量場面の指導に出演。

98・9・10・12 伊能ウオークブレウオーク（忠敬青春の道ウオーク）開催。会員で忠敬の父・貞恒の実家の当主・神保誠さん、九十九里から佐原まで名誉隊長として先頭を歩く。

98・10・31・11・3 埼玉県東松山の国際スリーデーマーチ会場で、伊能ウオーク本部隊員選考。渡辺が伊能ウオーク総隊長に指名される。

98・12 学芸員兼資材輸送担当として新沢会員の伊能ウオーク参加が決まる。

また、随伴車運転要員として大庭さんが車両持ち込みで参加になる。



全国を二年間で歩く「伊能ウオーク」が立

朝日新聞 99・2・21

ブームを起こした
伊能忠敬研究会の代表

ひと

渡辺 一郎さん



「考えれば、伊能は、一般に出るような人になったのは一八七〇年代で、明治もまだ、実年が若く、用意的でないから、公刊しても、売れなかったのでは」と、村々の位置や地形、主社作り、開港、三角測量した寺を記した「論図」が、伊能の「伊能測量」の完成は、一八七〇年、五・一八八年が十七か、十九年、伊能は百回以上、作った地図は、時代を五十年は先取りした。忠敬に因る持ったのは、死の三年後、伊能は、旧電報公社で全国を結ぶ「伊能ウオーク」は、年間一万人、歩く、今は茨城県を北上中、その見聞で、総隊長でもある。

「二百年の忠敬の仕事から何を学ぶか、参加者が、自分の足で歩き、故郷や日本の姿を見直し、時間と空間を、何を向かへるに取って、これは、面白い」

文 清水 邦
写真 森田 善雄

「私の歩幅は69センチで、偶然にも忠敬さんと同じなんです」。69歳。

99・1・25 伊能ウオーク進発。各地の会員は地図説明員、ウオーク参加、イベントの設定に微力ながらよく健闘した。遠隔地の会員には、ただ一人で孤軍奮闘してくれた方が多かった。渡辺は、主催者代表の一員として、また総隊長として講演、ウオーク参加のため二年間にちやうど40回出かけた。伊能陽子さんは研究会の役員でもあるが、伊能家の広報担当のような役割もあつて、20回も出かけていただいた。会員でウオーク参加回数が多かったのは、土肥さん52回、川上さんは65回、福田さん25回でした。会員で本部隊員の中山さんは、時々参加する勝手がわからない研究会会員をよくサポートしてくれた。

99・5・23 テレビ東京テレビタ刊「目指せ伊能忠敬」放映。

99・9・15 テレビ朝日ニューステーション「伊能ウオーク」放映。

99・9 忠敬が青春を過ごした横芝町で3本の記念碑を建立。忠敬父の実家・神保誠氏宅前に「伊能忠敬成長の処」碑。父の分家を継ぐ神保弘之氏宅前に「伊能忠敬の父貞恒生活の処」碑。伊能隊が天測をした宿舎・海保兵右衛門宅跡に「伊能忠敬宿泊地観測地」碑である。

99・9・30 「最終上呈版 伊能図集成」渡辺一郎、鈴木純子編 柏書房を公刊。平成9年に気象庁で発見された伊能大図写本の全図を集録。

99・11・1 NHK歴史番組「そのとき歴史が動いた」で「伊能忠敬」を放映。渡辺、撮影指導と出演。

99・12・10、27 俳優座、新国立劇場で舞台劇「伊能忠敬物語」22回公演。はじめての舞台劇化。(主催 俳優座 朝日新聞社 後援 伊能忠敬研究会 日本ウオークキング協会 佐原市 ほか)

00・2・25 図説「伊能忠敬の地図を読む」渡辺一郎著 河出書房新社公刊。伊能図だけを説明したはじめての本。

00・5・26 伊能ウオーク福江大会にあわせて、測量中福江島で病没した坂部貞兵衛の墓所・宗念寺において、約190年ぶりの墓前祭が執行され、伊能家より坂部貞兵衛の忠敬宛書簡10通が福江市に寄贈された。

00・6・24 伊能ウオーク来島にあわせて、屋久島の上屋久町宮の浦に「伊能の碑」が建立された。伊能ご夫妻出席。

00・10・6、11・6 北九州歴史博物館で「伊能忠敬と九州展」開催。主催者 伊能忠敬と九州展実行委員会(北九州市 朝日新聞社 伊能忠敬研究会)・北九州歴史博物館。これまで未公開の九州第一次測量の大図、会員藤岡健夫氏蔵の伊能大図、書簡などが公開された。

01・1・1 伊能ウオークゴール、完歩式典。竹芝桟橋で隊列を整頓し、晴海通り一車線を使用して、踏破記念式場の日比谷公園野外音楽堂までパレード。出迎えウオーク参加者を含め全隊列は約四千人。

01・1・3 NHKお正月時代劇「四千万歩の男・伊能忠敬」を放映。主演は橋爪功、高島礼子。視聴率10・2%。まずまずの成績。渡辺が制作指導にあたり、測量、天測、製図場面を考証。

世紀の大図発見と銅像建立

01・3・31 アメリカ旅行中の渡辺が議会図書館で伊能大図模写本207枚を発見。抜き取りで精査し、伊能大図模写本と確認。帰国後、国土地理院星埜参事官、堀野測図部長と協議。学術調査を行うことに。

01・4・8 広島県神辺町に「箱田良助生誕之地」碑が建てられた。箱田良助は忠敬の内弟子で、大日本沿海輿地全図完成に尽力した。のちに榎本家に入夫して円兵衛と名乗る。榎本武揚の父。

01・6・18、22 米議会図書館で日本国際地図学会、伊能忠敬研究会、日本地図センター合同の調査。模写本207枚を全部開いて内容を確認。議会図書館地理地図部長エベール博士に「日本で展覧会をやりたい。全部貸してくれないか」と、最初のジャブを送る。エベール博士は目

をバチクリ。「コピーでよいのではないか」「日本には一部ではあるが本物が残っている。コピーだけでは話にならない。一部でもいいが、本物が借りられないか」「それなら可能かも知れない」「とにかく複製制作の検討をする。サンプルとして4枚分のデジタルデータをいただきたい」「了解した」というような経過だった。毎日朝から根気よく地図をめくっているメンバーを見て、エベール博士は「熱心だね」と感心していたが、それに免じて4枚分の謹呈となったのだろう。

01・7・5 国土地理院関東地方測量部の会議室を借りて、日本国際地図学会、伊能忠敬研究会、日本地図センターの合同記者発表をおこなう。朝日、毎日、日経、産経、東京の各紙一面の大ニュースとなる。朝日は一面トップ、産経は一面で上から下までぶち抜き扱いだった。読売は社会面の大部分を当てていた。地方紙も一面が多かった。アメリカにも新聞のコピーを送って状況を知らせる。

01・7・6以降 つぎのような動きとなる。

①サンプル画像4面入手、評価。②国土地理院、伊能忠敬研究会、日本地図センターの関係者間で、アメリカ大図を中心とする展覧会の構想を練り、次のような基本構想を定めた。

展覧会の基本構想

- ・博物館展とフロア展の二本立てとする。
- ・博物館展は新聞社等の事業部門に企画提案する。新聞社等のほか、地図・測量関係の団体にも声をかけ、実行委員会を結成する。
- ・国土地理院も委員会に参加する。
- ③全図のデジタルデータ入手について、議会図書館・エベール博士に見積もりを依頼する。

01・9・26 北九州市小倉の常盤橋際に、伊能測量隊の九州測量出発点を記念して、北九州市の一級測量基準点をかねたモニメントが建設された。北九州測量協会、地元商店街有志、伊能忠敬研究会九州支部などの募金によるものである。

01・10・10 釜石市大石出河岸に「伊能忠敬海上引縄測量之地」という記念碑が建てられた。この場所は伊能隊が第二次測量の際、湾口を船で縄を引いて測量したところである。

01・10・20 伊能隊が出発の際、必ず参拝した東京深川の富岡八幡宮に、伊能測量開始200年を記念して、伊能忠敬銅像建立実行委員会の提唱で銅像が建立され除幕式が挙行された。

建立資金は、銅像建立実行委員会に参加した日本測量協会、日本ウォーキング協会、全国測量設計業協会連合会、日本土地家屋調査士会連合会、朝日新聞社、伊能忠敬研究会、月星化成、日本地図センター、劇団俳優座および国土地理院有志の協力により、加盟団体員および一般か



ら公募した。富岡八幡宮、朝日新聞社、読売新聞社、佐原市、横芝町、九十九里町からもご拠出をいただき、募金総額は二千二百万円余に達した。制作は彫刻家 酒井道久氏（埼玉県立大学助教授）、監修は伊能洋氏にお願いした、

01・11・17 俳優座で製作の、映画「伊能忠敬―子午線の夢」を東映系136館で上映。

アメリカ大図の里帰りをめざして

01・12・13 日本テレビ番組「知ってるつもり」で、ワシントンの議会図書館へ伊能大図発見模様を渡辺が同行取材。当初は日テレからの撮影要請に対し、保存状態が悪いことを理由に了解が得られなかった。しかし地図借用の交渉もしたので、渡辺は単独でも渡米の意志を固めていたところ、日本テレビも現地解決を期待してロケを実行した。当日はエベール博士の判断で撮影が認められ、撮影終了後に、エベール博士より展覧会のために全図無償で貸与可能という図書館側の正式な回答が伝えられた。博物館展の前提が固まった瞬間である。

01・12 中日新聞社、共同通信社、日本地図センター、国土地理院、日本測量協会、全国測量設計業協会連合会、日本土地家屋調査士会連合会、日本ウオーキング協会の代表が集まっていたとき、関東地方測量部会議室で「アメリカ伊能大図展」の準備会合を開く。

展示構想について討議。フロア展、博物館展の併催は、これまでの展覧会のビジネスモデルには無いので難航したが、実行が決まった。

02・1・27 日本テレビ「知ってるつもり」でアメリカ・ロケの内容を

まとめた伊能忠敬を放映。視聴率12・1%だった。

02・2・27 佐倉の歴史民俗博物館の伊能大図写し34、35号を調査し、アメリカ伊能大図の欠本であることを確認。調査員は国土地理院堀野測図部長、根本課長、青山助教授、渡辺、鈴木純子さん。

02・3・11 右大図について記者発表、展示公開。本図は秋岡コレクションの一部として入庫したもの。

02・3・12 伊能大図展第一回実行委員会開催。会則をきめ、委員、幹事を決定。会長 日本地図センター大竹理事長、委員 国土地理院 星植院長、日本測量協会中川会長、全国測量設計業協会連合会 鈴木会長、日本土地家屋調査士会連合会 西本会長、日本ウオーキング協会 岡野会長、中日新聞社社長、共同通信社社長、委員事務局長 伊能忠敬研究会 渡辺代表理事。展示構想について種々討議。

02・3・27 博物館展についてNHKが名義主催者となり、報道協力いただけることになる。

小学館で渡辺一郎編『伊能忠敬測量隊』の発行を決め、執筆依頼される。原寸複製「伊能図」（編著者 清水靖夫、長岡正利、渡辺一郎、武揚堂編集部 発行 武揚堂）刊行。

02・4・19 中日新聞見部長に要請し、ヨーロッパ訪問の帰路、議会図書館に立ち寄って交渉をお願いした。① 地図は無償で貸与する。貸与先は国会図書館がいいと思う。貸与先を共同通信とすることに難色。新聞社等が展覧会事業をやるのが理解できなかったという。② デジタルデータ化作業は進めている。しわ伸ばし作業は100枚終っており、

スキヤニングを始める。10月には終るだろう。③輸送は、そのつどクーリエ便によりたい。03年秋からの開催は難しいだろう。

02・5・8 伊能洋・浅井京子、ふみさんのチームにより、無着色の大図サンプル(167号広島)に着色が完成、朝日東京版がカラーで紹介。

02・5・9 第二回実行委員会幹事会を国土地理院で開催。驚見報告を確認。借用責任者は国土地理院とし、実務は共同通信が扱うことにする。デジタル化費用は国土地理院が地図センターに委託して、実行委員会名義で支払う。10月までに二分の一以上の入手を期待する。

02・5・25 北海道の高木会員の通報で、伊能忠敬の重要書簡の大阪古書展への出品が判明。偶々来合わせた産経新聞が第二社会面で大きく取り上げ話題に。親戚一同に当てた娘・イネの勘当赦免状で、勘当が実際におこなわれたことを証明する書状発見であった。新聞効果で多くの応札があったが、最低希望額に達せず出品者に戻ったという。

02・6・8・9 富岡八幡宮で総会と銅像建立記念講演会、ウォーキング大会、歩測大会を催行。講演会120名、ウォーキング980名でまずまず。歩測大会は130名が挑戦した。

02・7・中旬 またまた伊能忠敬書状など22点250万円が古書市に出品されて驚く。伊能、伊藤、安藤氏に共同通信の記者と一緒に調べてもらったが、発見と云えるような史料はなかった。

02・8・5 地図借用は国土地理院とし、実務は共同通信が担当する。

料金は無償。送金は口座振込みとしたい。と確認を求めた。

東京国立博物館の佐々木室長よりの依頼で、同館で発見したという伊能小図三枚を実見調査する。伊能忠敬記念館の紺野学芸員も同席だった。高橋景保から昌平坂学問所に謹呈された三枚揃いで、ボロボロだったが、内容は全く問題なく、イギリス小図とよく似た図だった。針穴も鮮明だった。大発見なので別室で発表の段取りを打ち合わせ。

02・8・7 愛媛県立歴史文化博の安永学芸員、石野課長と来室。伊藤栄子氏立会い。東博伊能小図の事前取材あり、NHK今井、産経伊藤、共同通信山本のみなさん。

02・8・8 東京清瀬市・織本病院の織本先生、企画中の演劇「伊能忠敬」の打ち合わせに来室、秋に病院劇として上演される。終って東博の発表会場へ。星塾院長、原口課長、大竹理事長、前野部長見学に来室。記者発表。説明は佐々木室長と渡辺代表理事。取材参加は、東京、読売、朝日、毎日、道新、共同、時事の六社、朝日以外はカメラ付き。テレビはNHKとフジテレビ。NHKは7時のニュースで放送。

02・8・9 東博発表の各紙反応は次のとおりで、予想外の好評であった。産経Ⅱ題字下にカラー写真。第二社会面上段に大きく。日経Ⅱ第二社会面にモノで大きく扱っていた。記者は来なかったが、文化部の松岡編集委員から、こういう話はうちにも聞かせてよ、と意見があった。朝日Ⅱ第二社会面モノ。正確な記事だった。読売Ⅱ題字下に一面カラー。読売だけが学芸部扱いで、他は全部社会部扱い。学芸部出稿で題字下に載せるのは、出て来る前に、場所を決めていたのであろう。東京Ⅱ一面にカラー。実行委員会メンバーではあるが、よく頑張った

感じ。カメラは一番乗りだった。毎日一面にカラーで、第三社会面に引つ張り。署名原稿。

02・9・5 東京国立博物館宮島企画部長にアポを取り、伊能忠敬展の企画書を提出。東博では伊能小図の修復完了のお披露目をやる計画があるので、これとつなぐ可能性を探るため、共同通信が各博物館に渡している企画書をアレンジして持参した。国土地理院の小出部長と同行。東京会場の選定が行き詰まっております、星塾院長は東博実施にこだわっているの、一案を持って偵察に出かけたのである。東博は買取展示はやらない。新聞社等で自前でやっていただき、場所提供と指導料として入場料収入のX%を頂く方式であるとの説明で、場所は空いているとのことだった。図面等を受取り引き揚げる。

共同通信と中日新聞に連絡し検討を依頼する。新聞社側は売り渡し展で、自前ではやらないと決めていたのに、どうしたの、という話になる。東博展は仕込みが大変と新聞社側は及び腰である。

その後、収支を検討したらと、展示構成の詳細資料などを提供する。しかし、入場料収支を概算すると、少なくとも二千万円は足りないことが判る。それを聞いてウオーキング協会の木谷専務が、責任を持って二千万円募金しようと言うがうまくいかなかった。

02・10・8 共同通信橋田記者からお正月の地方紙向け配信用の「伊能忠敬双六」作成の資料提供を求められる。この双六は17紙で利用され、最近の新記録になった。

02・11・27 データの到着が遅いので、地図センターの前野部長に協力を金を持参して、交渉してもらうよう決定。28日にメールを送信する。

02・12・4 エベール博士よりメール。43枚すでに完了。年内に77枚予定。前野訪米歓迎と。この訪問でデータ入手はスムーズになる。

02・12・10 歴史民俗博物館の柏木家文書（表題は伊能茂左衛門家文書）調査。伊能、伊藤、佐久間、渡辺、柏木、参加。

02・12・末 東博から「伊能展はやらないのですね」という電話。新聞社側から返事がないので、こちらも動けずそのままにしていたので催促であった。残念だが成案に至らなかった旨を話して謝る。

03・2・28 「伊能忠敬銅像建立報告書保存版」を全国の主要公共図書館に295冊発送。銅像建立委員会の仕事を終わる。100通近い礼状が到着。

ペイレ中図の補修と大図公開へ

03・4・2 星塾地理院長と関東地測で打ち合せ。東博で伊能図展が出来るか、資金を負担して東博が秋にやる昨年発見の伊能小図展と合流の可能性がないか。という相談である。偶然であるが、同じ日に地理院の小出部長に対し、中日、共同から、東博では今年秋に平成館の半分を使って伊能図展をやる計画がある。そこにアメリカ大図を無償で貸してくれないかという相談があった。

03・4・22 実行委員会開催。東京国立博物館の「伊能図と伊能忠敬展」への協力を決め、関係先への折衝は国土地理院と共同通信社でおこなうことになった。アメリカ大図の実物を東博に貸すためには膨大な輸送費負担があること、議会図書館側は照度を30ルクスに指定しているが、東博側はそれでは展示にならないと、実物展の検討は難航した。

フロア展は、東京から大阪まで約60枚を平成館ロビーに展示することが決まり、伊能洋グループで急遽作業を進めることになった。

03・5・7・6・3 渡辺、仏のペイレさんの伊能中図借用依頼を兼ねて訪仏旅行。フランス中図借用は了解を得たが、大分傷んでいて展示に耐えないものがあり、新たな問題が起こった。

03・6・9 地理院長打ち合わせ。渡辺、小出、前野、畠山。状況を確認し今後の方針を協議した。フロア展が成り立つたので、東博はアメリカの実物を是非にとはいっていない。膨大な費用がかかるので実物展は断念したい。東博は館蔵の伊能図だけで展示が成り立つか。充分である。博物館展をすべて中止し、フロア展だけにしたら、との意見もあったが、院長、渡辺は反対。博物館展が無ければフロア展は盛り上がらない。神戸、仙台、名古屋、松山は博物館展を実現できるように努力することを確認した。フランス中図の修復については、名案がないので、マスコミを通じて呼びかけることにした。

03・6・11 共同通信の橋田記者から電話。「何か面白い話はないですか?」。感がいいねと、ビックリしたが、フランス中図がポロポロで展示が難しいことを話す。直ぐ伺いますと事務所に来室。話を聞いて、その場で原稿を書いて事務所から送信。

03・6・13 東京新聞、京都新聞、神戸新聞など地方紙の一面にカラーで大きく紹介。朝日新聞の清水記者より電話。これは何とかしなければならぬ。朝日でも書こうといってくる。お出でいただいて事情を説明、タイミングを狙うことになる。

03・6・15 伊能忠敬研究会03年度総会。富岡八幡宮。伊能隊に提供された料理のサンプルを一式展示、山盛りを一同で賞味した。

03・6・16 昨日の総会の記事が朝日新聞東京版に掲載された。京都の日本写真印刷㈱の岩村部長来室、ペイレ中図の無償修理を申し出られる。はじめ売り込みかと思ったが、改めて詳しくお話を聞く。

03・7・2・3 共同通信の坂本部長より電話。議会図書館の担当者は30ルックスを固執しているので、駄目なら断念と伝えたいので、幹事会を招集して欲しいとの要請を受ける。時間がないので、大竹会長を訪問、渡辺から各幹事の了承をとり持ち回り幹事会とすることを提案し了承される。旅費を実行委員会でも持ってもいいから押しかけて交渉すること。最後通告ではなく、「是非やりたいので、ルックス制限の緩和を了承して欲しい」という姿勢を貫くこと。先方もつづれては困る筈だ。勝率は半分以上ある、と担当者励ます。地理院長および各幹事の了解を得て、共同通信に指示する。

03・7・8 家内と日本写真印刷㈱を訪問。広大な敷地を持つ大規模な印刷会社。作業工程などの説明を受け、納得しお願いする。

03・7・10 共同通信社木村氏より、アメリカ側が50ルックスを了承し



2003年度研究会総会・富岡八幡宮

たと連絡がある。奇跡が起こった。これで博物館展は成立する。一館数枚宛でもいいから、枚数を削減してまとめるよう共同通信にアドバース。伊能イベントには、日写の件といい、朝日新聞の応援といい、こういうことが多い。

03・7・16 法政大学に歴史民俗博物館山本助教訪問。柏木家文書の調査報告会。渡辺、伊能、佐久間、伊藤、柏木、清水出席。柏木家は伊能家から養子を迎えて分家を作り、そこから内妻の妙諦が出ていることなどが明らかとなる。

03・7・29 渡辺一郎編著『伊能忠敬測量隊』刊行。

03・8・1 香取佐原支部長の案内で、元千葉県教育長だった岩崎佐原市長に挨拶。共同通信社坂本部長、木村氏同行。これまで、地図・測量関係の人たちと活動してきたが、学校教育、生涯学習の関係者の努力で輪を広げて欲しいとお願いした。

03・8・11 伊能大図着色の「色あわせ」を地図センターでおこなう。作業は画家が分担しておこなっているのですが、どうしてもバラツキが出る。並べてみて修正しようというのである。星塾院長、渡辺、伊能夫妻ら関係者出席し、朝日新聞、共同通信が報道した。

03・8・28 石川県那谷寺訪問。会員の河崎さんと所蔵する伊能図の沿海地図小図写本を実見調査する。出入りの造図業者が寄付したもので、業者の先祖は大聖寺藩の検地奉行だったという丁寧に作られた写本だった。共同通信と北国新聞が同行し報道した。

03・9・17 大阪研修旅行。東京発18名、大阪合流9名、合計27名。間観測所跡、間重富墓所参詣。御子孫の関西大学・間理事長からお出迎、案内、歓待を受ける。あと大阪市立科学館へ。学芸員の嘉数さんから「忠敬の天文学」の講話を聴く。また、「ラランデ暦書」、「仏国暦象編斥妄」、「暦象考成後編」の現物を見せてもらう。館内見学。素晴らしい理科教材の完備に西川会員（東大名誉教授）「もう一遍やりなしたいね。それにしても、こんなに揃っているのに理科の成績が悪いとは……」と慨嘆。宿舍の有馬温泉「兵衛向陽閣」はすばらしい宿。忠敬も測量の途中、この宿に泊まっているが、旅館の旧地は社員寮になっていた。

03・9・18 大阪市歴史博物館。巨大な施設で10階の展望室から見ると大阪城は目の下である。間さんの紹介で、相磯副館長から説明がある。館蔵の間重富の西国測量地図、書簡、望遠鏡、測量器具などを見学した。あと、適塾記念館へ。こんな狭い勉強部屋から明治の文化が開かれたと考えると感無量である。最後が司馬遼太郎記念館。独特の歴史解釈で、現代の大人たちを魅了する司馬文学の工房をかいま見た。

03・10・22 東博で伊能小図修復完了の記者発表。星塾院長と渡辺も出かける。翌日の朝刊では東京新聞が一面にカラー、朝日、読売が第二社会面だった。東博「伊能図展」の前宣伝としてはまずまずだった。

03・10・27 東博の伊能大図フロア展、大図60枚を展開する作業を記者公開。星塾院長、渡辺、伊能夫妻立会い。翌日朝刊では、日経が伊能夫妻を取り上げていた他は、共同の情報を地方紙が数紙乗せたのみで不発。このあと、読売が「顔」欄に伊能洋さんを取り上げた。

03・10・30 東博「伊能忠敬と日本地図」内覧会。大徳寺展と併催なのでものすごい人々々。セレモニ―終了後、渡辺はすぐ展示場に入り、NHK海老沢会長に挨拶。その場で、大河ドラマで伊能忠敬を取り上げるように要望する。「佐原の鈴木市長に頼まれてネー」と、お正月時代劇で忠敬をやった楽屋を話し出す。渡辺は「その劇の考証に20日間も付き合いましたよ」と応じる。話の様子では、伊能忠敬研究会のことは知っていたようだった。



03・10・31 東博「伊能忠敬と日本地図」展開幕。朝日だけが「ひと欄に星塾院長を紹介した。昨日は記者があんなに多数いたのに掲載紙なし。朝日新聞だけが掲載してくれた。清水記者の御高配である。感謝のほかはない。」

03・11・15 日経文化欄に「伊能忠敬未公開文書集」制作が掲載される。

03・11・17 家内同伴、関西空港に伊能図を持参、来日されたペイレ夫妻を出迎え。ゲート到着から読売テレビがフォローした。伊能中図

の破損状況を確認する。あと南禅寺の料亭で日本写真館主催の歓迎会。

03・11・18 ペイレさん記者会見。渡辺より出席者紹介のあと、ペイレ中図の発見経緯、伊能図の中の位置づけ、修理方法の説明、現物を報道公開した。テレビはNHK京都、京都放送、読売テレビ、NTV系列のドキュメントと四本であった。ドキュメントは4月4日放送された。新聞社は、朝日、毎日、京都新聞が地元版で詳細に報じ、日経、産経、東京が共同経由のニュースを全国版に掲載した。

03・11・26 アメリカ大図展実行委員会。各地のフロア展続々固まる。(東博の伊能展の最終入場者は博物館の目標10万人を上回り、132,558人となった)

03・12・2 イブさん夫妻を東博に案内。そのあと、上野東天紅に移って食事。その際、ペイレ中図を譲渡していただく場合の条件を覚書として整理した(残念ながら価格が入っていないもの。譲渡意志の確認を目的とした。覚書は後日清書し夫妻のサインを貰う。)

03・12・4 アメリカ伊能大図展「図録」の編集委員会。アメリカ伊能大図展実行委員会編、記念誌委員長 渡辺一郎、編集委員長 鈴木純子、発行人 野々村邦夫で決定する。

03・12・8 イブさん夫妻を国土地理院に案内。院長、参事官情報管理課長、広報室長ら出席して歓迎昼食会。あと院内見学と記念撮影。

04・2・5 ペイレ中図修復完了し検収。デジタル化のための撮影現場

を公開する。一枚を数億画素、撮影時間で20数分露出するスキャナータイプの装置である。日本写真では美術品複製のため導入を考えていたところ、偶々伊能図修復を募る報道があつて手を挙げた。渡辺が「これまで伊能図は近づいて見ることが出来なかったが、完全複製ができるようになって身近で研究ができるようになった」とテレビコメント。

04・2・24 実行委員会開催。博物館展の要綱がきまる。フロア展に、釧路、武蔵大学、日大文学部の追加を承認。

04・3・15 ペイレ中図修復完成披露とペイレ図の評価鑑定。渡辺、国際古地図コレクター協会日本代表の建築家・山下教授、会員の鈴木純子さんと全八枚の修復内容を最終確認。報道公開。

04・4・13 米国議会図書館エーベル博士、アジア部の大田さんが、日本地図センターの招待で来日。十四日国土地理院で記者会見。十五日はエーベル博士、東博、国会図書館見学。渡辺、鈴木出る。副館長応対、大図三枚、堀田小図、江戸府内図、シーボルト図などを見せる。学士会館で地図センター主催の歓迎会。参事官、小出部長、渡辺、鈴木、野々村理事長、星埜専務、新井常務、前野ら出席。

04・4・16 神戸市立博物館オープニング&内覧会。エーベル博士挨拶。日本写真の現物大複製も展示。夜、研究会関西支部集会を開く。

幻の欠図四枚を発見

04・5・11 鈴木純子さんと海上保安庁海洋情報部で伊能大図の調査。未発見の四枚が全部海洋情報部にあることを確認。国土地理院 矢口参

事官、日本地図センター野々村理事長に連絡、海洋情報部への働きかけをお願いする。矢口参事官は18日、関係官をつれて実物を見学し、発表の方針などを海洋情報部と取り決めていただく。

04・6・20 東京国立博物館蔵伊能中図は豊橋藩大河内家旧蔵といわれてきたが、大多喜藩大河内家旧蔵が正しいと判明。

04・7・1 最後の伊能大図四枚の記者発表。海洋情報部で主催 伊能忠敬研究会、説明は渡辺と鈴木さん。同席 海洋情報部 洲上専門官、国土地理院 関崎技術専門員。事実上の合同記者会見である。

全国紙の朝日、読売、毎日、日経、産経、共同、時事、東京のほか北海道新聞が参加。テレビはNHKのほか、民放五社が全部来て呉れた。今回はNHKも社会部（いつもは文化部）から出てきて地図、インタビューと丁寧に撮ってくれた。最初の全大図展示は釧路フロア展からとアナウンスする予定なので、北海道新聞にも声を掛けたら、二組も記者が出てきた。社会部的扱いと、文化部的扱いである。このときから、釧路の大図フロア展、ニシベツの記念柱建立の報道が始まっていた。翌朝紙面、朝日、読売は社会面ト真ん中の一等地だった。

釧路で夢の全日本図が公開に

04・7・13 伊能忠敬研究会10周年記念として、15日から三日間の釧路・ニシベツツアーを計画し25名の参加が決まっていたが、NHKから渡辺に、釧路の大図フロア展を「ニュース10」で取り上げたいので、早く釧路入りするよう要請が入り先発した。伊東市長、教育長に挨拶。

04・7・14 新聞社は、共同、時事、北海道新聞、朝日、読売、毎日、

日経、釧路。テレビはNHKの他に民放五社が参加。テレビがあまり丁寧で時間をかけたので、新聞のカメラは道新以外は怒って帰ってしまふという一幕もあった。地元釧路新聞は遅くなっても、ゆうゆうと撮影し、翌日一面中央に大きくカラーで掲載した。来場は22、739名だった。過去の文化イベントでは第一位とのこと。釧路市が手を挙げて、しかも大図全国展示とキマったとき、あとのフロア展のためにこれを応援し成功させなければと考えたが、関係者の多大な協力があって見事に成功した。幸運であった。

04・7・15 釧路プリンスホテルで東京からの一行と合流ニシベツへ。第一次測量記念柱の除幕式。釧路から八幡生涯教育部長、福島北海道地方測量部長、古谷実行副委員長出席。他に野々村理事長、石川氏。

丹羽期成会会長、渡辺が挨拶、神事、町長挨拶。あと別海温泉ホテルで祝宴。テレビはNHK、STV札幌テレビ。渡辺はSTVから郷土史家の吉川さんとコメントを求められ



会場には遅れて入ったが、焼肉料理で盛り上がっていた。釧路に帰り、釧路市長の招宴に臨む。

04・7・16 大図展オープニングの式典。市長、伊能洋氏挨拶。ツアーの一同は、フロア展見学のあと、厚岸、霧多府を廻って宿舎の釧路プリンスホテル帰着。夜の食事は釧路フィッシャーマンで魚づくし。

04・7・17 会員は屈斜路湖、摩周湖、阿寒湖へ。渡辺と伊能陽子さんは残留。午後、全日空ホテルでシンポジウム。渡辺、講演後、司会野々村氏、パネルメンバー 渡辺、伊能、津村、古谷（元助役）、伊東市長。

新しい十年に向けて

04・8・4 研究会事務所が日本地図センター二階に移転する。事務所開き。共同通信・橋田記者がビールを持って駆けつけてくれる。

* * * * *

この10年間、第二の人生の達人・伊能忠敬さんは、若い人たちには努力の積み上げの大切さを教え、壮年には第一歩を踏み出す勇気を与え、中高年にはまだまだこれからだ、という元気を与えました。いっぽうで、語らずして世の人々に、地図、測量の仕事の重要性を知らしめる役割も果たしております。

一步を踏み出す勇気と、たゆまぬ努力を続ける愚直さを持った忠敬さんを、益々多くの人々に知れ渡るよう努力しなければと考えてここまで来ました。一タ、これまでの大変幸運な経過を振り返ってみました。これからの新しい歩みに皆様のご支援をよろしくお願い致します。

「稲」は伊能忠敬に勘当されたか

佐久間 達夫

「伊能忠誨日記」の文政五年（一八二二）八月二四日の条に、伊能忠敬の長女・稲の死去のときの様子が詳細に記述されている（伊能忠敬研究会誌三七号「伊能忠誨日記（六）」参照）。

稲が、父伊能忠敬に勘当されたか否かについては、会誌第二九号にも掲載され、巷間の話題の一つとなった。そこで、稲に関係した資料について記してみたい。

稲に関係した資料には、伊能淳氏所蔵の「伊能家家牒」、大谷亮吉編著『伊能忠敬』（一九一七年）、古川力著『九十九里浦と伊能忠敬』（一九七九年）、千葉県史編纂審議会編『伊能忠敬書状』（昭和四八年）、平山守氏所蔵「平山氏家譜」「平山氏過去帳」などがある。

「伊能家家牒」（資料一）では、
一女稲。母ハ伊能氏出、達。伊能盛右衛門景明ニ嫁ス。
後、薙髪シテ妙薫ト云フ。と記してある。

また、長く伊能忠敬研究の原典となった大谷亮吉編著『伊能忠敬』（忠敬の人格と其家庭）（資料二）では、

忠敬の長女稲女は、忠敬の最も鍾愛せし所に係り、其長ずるに及びて、上総国山辺郡片貝村布留川氏（忠敬の実家神保氏の姻戚なり）の男盛

右衛門を迎えてこれに配し、江戸に於て米穀商を営ましめしが、（或は曰く初め伊能茂左衛門の嗣たらしめんとししが、議、偕はざりしなりと）盛右衛門大に忠敬の意を損ずる行為を取てし（或は曰く盛右衛門投機を試み大失敗をなしたるに起因すと）為めに家庭に大波瀾を生じ、忠敬遂にこれを離別処分に附したり。然るに稲女は、忠敬の処分に服する能わず断乎として父に背き、夫に従い家を去りたるが故に、忠敬止むことを得ずして稲女をも勘当し、長く父子の縁を断つの悲劇を演出せり（平山家に存する過去帳、忠敬書簡及び伊能家に伝ふる口碑等による）。（中略）

文化七年長女稲女、薙髪して名を妙薫と改め、親戚故舊によりて忠敬に哀願し家に帰るや（盛右衛門は、伊能氏離別の後、名を稻生（加納屋）三郎兵衛、（又、三郎治）富家と改め、其郷里片貝村に帰り、稲女と苦楽を共にせしが、この年四月五十五才を以て病没したるを以て、稲女は、夫に対する義務終れりとなし、茲に赦免を九州に出張中なりし忠敬に求めたるなり。当時の文書伊能家に現存す。

嘗て自己の信念を遂げんが為めには、父に背くをも辞せざりし強固なる意志を以て翻然として不孝の罪を償はんことを誓い、一意専心忠敬老後の意を慰めれば、多年忠敬の心裡に深く刻まれたりし悲哀の情は、一時に煙散霧飛して和氣満々の状を呈したり（妙薫の孝心のこ

と高橋景保より忠敬に送りし書簡中に記せり）と、記述されている。

要約すると、稲は、布留川の男・盛右衛門を迎えたが、盛右衛門が江戸で米穀商を営むが、忠敬の意を損ずる行為をして、離別処分されたので、稲も夫に従い家を去ったので勘当された。このことは、平山家所蔵の過去帳、忠敬書簡、及び伊能家の口碑による、と。又、文化七年、稲は薙髪して名を妙薫と改め、親戚故旧を通じ、忠敬に哀願し

て許しを得て家に帰ったという文書が伊能家に現存している。とも記している。

なお、千葉県史編纂審議会編の『伊能忠敬書状』の解題で、小笠原長和氏は、大谷氏と同様に、

稲は、布留川盛右衛門を迎えて妻になったが、盛右衛門は、忠敬の意にそわない行動があつたため離別したので、稲は、父にそむいて夫に従い家を去つたので稲を勘当した。と、述べている。

次に伊能忠敬の出生地と同郷で、教職の傍ら郷土史の研究をなさつた古川力氏は、『九十九里浦と伊能忠敬』という著書のなかで、「飯高家文書」や、次のような「飯高惣兵衛尚寛より伊能勘解由宛の書翰」を依拠に、

稲が、江戸鎌倉河岸に住んでいた盛右衛門を慕つて出奔し、天明七年（一七八七）に勘当された、と記している。

飯高惣兵衛より伊能勘解由宛の書翰（資料三）

『九十九里浦と伊能忠敬』古川力著「盛右衛門・稲女一件」

盛右衛門江戸店不埒之一件之段疾相済候事と存候所、惣兵衛出府之節、勘解由翁より預り伝言驚入り候事。此段盛右衛門面談之上嚴敷申聞候所、一言申訳もこれなく甚恐入候体相見へ候事。勘解由翁憤之趣、尤に存候得共、夫婦の縁これあり、おい弥妊娠いたし候得ば、とても不埒相ゆるし以来は勘弁有たき事。

おい弥、産後には愚老出府いたし、盛右衛門江離縁之異見差加へ候様申越され候得共、産後迄相待べくにもあらじ一日も早く熟知之上目出度出産相待申度事。

右不埒之段、悪心を挟み謀計等いたし、又は酒色^{えき}奕に溺れ候と申にもこれなく商損^{たにえ}極度ため倍大損を致候事なれば是非なき事、縦^{たにえ}ば都下の財主、手代に大損かけられ候もこれあり候事。おい弥、殺害致すべくなど風聞申及ばれ相憤候段尤之事、并罪過当と心得候得ば、壮年之者却て怨を結候事俗人之常情にて候。夫婦之縁これある上は豈左様の事これあるべき也。畢きよう若氣の一旦おどしたにもこれあるべき事なれ共不屈之沙汰にて候事。廿余年父子の契りを結、姑見送候事は一通ならず仁慈の取扱これあり慶事。おい弥、産後出訴候而も離縁致すべきとの事、憎みの甚事と相聞候。子罪に状し候はば、親是を免じ度事。出訴致し候はば、其間心労もこれあり、其上、おい弥不慮の儀これあるは世間物笑とも老後の歎多かるべき事。出訴の上十分に盛右衛門相退け心に快るべきや否や、勿論、伊能氏積善と申所には決而これありまじき候事。父慈み子孝、誰も知る事也。なれども免ずまじき事を免は、禍の基なるべし。免ずべき事を許さるは不徳の最上なるべし。

朝寝する太郎も、朝前草刈始二郎も、叱廻して見捨ぬやうに世話やくは親の慈悲なるべし。理と情との事、彼翁などの知ふるしたる事ながら、当為は迷候事もこれあるものなれば、得と分別有りたき事。起怨以思と申事もこれあり候へば、仏者の道をも加へ取斗いありたき事。

盛右衛門儀、生質愚に相見へ候、され共愚に悪を兼たる性質とも相見え申さず候。幼年より見立教導不足と申入もこれあり間敷ものにもこれなき候事。愚老、右之趣申入度も、盛右衛門と骨肉故のみにあらず、勘解由翁とは、親々も莫逆の友にて相続き親友の由身を以、直言と存候へ共、却て怒を増候事もこれあるべきや斗り難く候へ共、いづれ盛右衛門身分に付、此上幾重にも異見相加へ申すべく候。此度は何分格別之仁慈所仰にて。以上。

このように「飯高書翰」では、惣兵衛が忠敬に、「子供の時から我が子として育てた盛右衛門の人間形成には、貴殿（忠敬）にも責任の一端があるのではないか、理と情とを十分にわきまえた貴殿なれば、分別がありがたいものだ」と、直言している。

飯高惣兵衛（資料三の二）

飯高惣兵衛とは、忠敬とは莫逆の友で、幼名を清三郎、字を尚寛、号を霸陵といった。忠敬の出生地・小関村の隣村粟生（現九十九里町粟生）で、享保十九年（一七三四）に出生。粟生村の名主や江戸北町奉行組与力給地上総地方代官を勤め、文化二年二月九日に死去した。

筆者も、伊能忠敬記念館に勤務して間もない平成元年に、「伊能忠敬測量日記」の解説をし、その手引書として「新説伊能忠敬」という私家本を作成した。そのとき、稲だけについては、子孫宅が見つからず古川氏と大谷氏の記述を参考にして、私家本に「稲は、盛右衛門を慕って江戸へ出奔したので、忠敬に勘当されてしまった」と記した。

その後、先学者から「稲は勘当されていないではないか」という助言をいただいたので、『伊能忠敬書状』や、伊能家の親族である千葉県多古町南中の平山藤右衛門家の「家譜、過去帳」、それに伊能三郎右衛門家（忠敬）で所蔵している「旌門金鏡類録」について調査してみた。

『伊能忠敬書状』（資料四）は、総数百六十通、そのうち稲（妙薫）宛の書状は百三通で、内訳は、

伊能勘解由（東河）より妙薫（稲）宛	八二通
勘解由より妙薫・リテ（忠敬の長男の妻）宛	一四通
勘解由より妙薫・景敬（忠敬の長男）宛	三通

勘解由より妙薫・盛右衛門宛

二通

勘解由より妙薫・盛右衛門とリテ宛

一通

勘解由より妙薫・盛右衛門と加納屋新兵衛夫婦宛 一通
である。

忠敬は、初名を三治郎、佐忠太、諡興。諱は忠敬、字は子斎、号を東河。三郎右衛門と称し、晩称は勘解由といった。

差出人である忠敬を「東河」と記し、宛名を「稲殿」と記したのは、寛政六年のものとと思われる書状六通で、いずれも後妻の「信」のことが書かれていて、そのなかの一通だけは、次のように「稲」の病状にふれている。

寛政六年七月二三日付の伊能忠敬書状（資料四の二）

お稲事、逗留中より食事納り兼候趣は承知致し候。今以て同様の由、服薬專一に存候。悪阻にても御座候得ば、懐胎とも存候へ共、夫も先月経後に有之候様に承候間、楽もなし煩損と存候。

六通以外の書状は、差出人が「勘解由」、或いは「東河」と記してある。従って、これらの書状は、忠敬が寛政六年一月に隠居して、名を「勘解由」と改めた以後に認めた書状であるといえる。

宛名を「妙薫」と単名で記したものは七六通、「妙薫」と他の人との連名で記したものが二一通ある。これは、平山守氏所蔵の家譜や過去帳（資料五・六）によると、夫・盛右衛門が文化七年（一八一〇）四月一三日に死去後、平山家の檀那寺である多古町北中の法性山浄妙寺（日蓮宗）で出家し、「妙薫」と名を改めたので、それ以後の書状では

ないかと推測される。

平山藤右衛門家の過去帳（平山宇右衛門宣輝識）資料五

菩提寺 多古町北中 法性山淨妙寺（日蓮宗）

伊能盛右衛門

文化七年四月廿五日村五十九歳
蓮克院景明日徳
伊能景敬姉婿片貝布留川富秀男

伊能 稲

文政四巳八月 加納三郎治室
妙薫
伊能盛右衛門景明之室

文化七年四月 於片貝村 五十五没

蓮克院景明日徳

伊能景敬姉婿 片貝布留川富秀 男

文政四巳八月 加納三郎治室

妙薫（華香院妙薫日明）

伊能盛右衛門景明之室

伊能盛右衛門・稲の墓石 資料六

多古町南中 平山藤右衛門家の墓地内

蓮克院景明日徳 布留川盛右衛門景明

華香院妙薫日明 布留川盛右衛門景明の妻

差出人が伊能勘解由と記した妙薫宛の書状で、年月の一番古いのは、文化八年（一八一二）一月一七日の第八次測量往路、興津宿（現静岡県清水市）で認めたもので、この書状の中には、佐原の本案の取締りの依頼が書かれている。

稲には、「楞嚴院躰常妙実大姉」（真言宗）と、華香院妙薫日明（日蓮宗）の二つの戒名があり、墓石も、伊能家の菩提寺である佐原市牧野の観福寺と、多古町南中の平山藤右衛門家の墓地内の二カ所にある。

なお、前掲『九十九里浦と伊能忠敬』には

稲の夫である盛右衛門の墓は、九十九里町の北増墓所にあつたが、何年か前に外戚稲生氏の手によつて千葉市に移転した。とも書かれている。

次に「旌門金鏡類録」によると、古川氏が「稲が忠敬に勘当された」という天明七年に、盛右衛門は、佐原村領主津田氏の江戸屋敷に伊能家の名代として年頭挨拶にあがつた。と記されている。この他、安永七年、天明元年、寛政元年、寛政三年、寛政七年にも伊能家の名代として年頭に罷り出ている。このことから、この期間は、勘当されなかったのではないか、と思われる。

旌門金鏡類録 資料七 伊能淳家所蔵

・安永七年六月一日

津田日向守御用人、佐原へ下向の時、伊能忠敬、奥州旅行で留守のため、賀養子盛右衛門罷り出で候。（盛右衛門二三歳 稲一六歳）
・天明元年一月上旬

津田氏より、三郎右衛門名代盛右衛門に御勝手御入用金御用達を仰せつけられる。(盛右衛門二六歳 稲一九歳)

・天明七年二月十五日

津田家若殿様御小納戸頭取上座奥勤め仰付けられたので、四月に地頭所へ伊能三郎右衛門名代として、盛右衛門が年頭に罷り出る。

(盛右衛門三三歳 稲二五歳)

・寛政元年一月と同三年一月の地頭所年頭に盛右衛門が、伊能三郎右衛門名代として御目見仰付けられる。

・寛政元年冬

地頭所より伊能三郎右衛門(忠敬)の奇特の儀を尋ねられ、賀養子盛右衛門が「書付の下書の写」を認める。(盛右衛門三四歳 稲二七歳)

・寛政六年閏一月

伊能三郎右衛門親子(忠敬・景敬)の奇特の儀について、「追願書」を小網町一丁目賀養子三郎治(盛右衛門)が差し出す。(盛右衛門三九歳 稲三三歳)

三郎治が、娘式人(三郎治妻、我等「景敬」妻・常州菅谷村横須賀勘兵衛長女)を連れて、佐原村に下向する。(盛右衛門三九歳 稲三三歳)

・寛政七年二月二二日

津田御役所に盛右衛門が、三郎右衛門名代として召し出され、伊能景敬への苗字、並びに道中帯刀其の身一代を仰渡される。(盛右衛門四〇歳 稲三三歳)

そこで、これらの記述内容から「伊能盛右衛門・稲夫妻と伊能忠敬との関係年表」資料(八)を作成してみた。

伊能盛右衛門が、伊能三郎右衛門の名代として領主に召し出された寛政七年(一七九五)二月二二日以前と、妙薫宛の書状のある文化八年(一八一二)二月一七日以後は、勘当された年月には該当しないことがわかる。

また、飯高惣兵衛から伊能勘解由宛の書翰(資料三)に、「盛右衛門不埒の件」が記述されていて、惣兵衛が文化二年(一八〇五)一月九日に死去しているので、もし稲が忠敬に勘当されたならば、寛政七年(一七九五)二月二三日から文化二年(一八〇五)一月九日迄の期間であるとも推察できる。

そこで、この期間の出来事を列記してみる。・印は参考記述

・「伊能家店卸目録帳」寛政六年一月、伊能忠敬認

稲分 支出 二四八両

加納三郎治(伊能盛右衛門)分

収入 五八六両 支出 一九両

・「伊能家庭門金鏡類録」

寛政六年二月 忠敬隠居し名を「勘解由」と改める。

○「伊能忠敬書状」東河より盛右衛門・稲宛。寛政六年か。

七月二三日 稲、悪阻にても御座候得ば、懐胎とも存候。

○「飯高惣兵衛書翰」惣兵衛より勘解由宛。古川氏は、天明六年と記しているが、寛政六年か。

盛右衛門、江戸店不埒の一件。……おい弥、妊娠いたし候得ばとでも、不埒相ゆるし以来は勘弁有たき事。

○「伊能忠敬測量日記」第一次測量(寛政十二年)〜第九次測量(文化十三年)

○伊能隊全国測量時の送迎

伊能盛右衛門 送迎しない

伊能 稲 出迎え 第七次測量（文化八年五月八日）

見送り 第八次測量（文化八年十一月二五日）

※参考 伊能家家族の送迎者

伊能景敬（忠敬長男） 見送り 第一次・二次・三次・五次・六次
七次測量

出迎え 第一次・五次・六次測量

伊能リテ（景敬の妻） 見送り 第八次測量

伊能秀藏（忠敬二男） 見送り 第七次測量 出迎え 第六次測量

伊能 琴（忠敬三女） 出迎え 第七次測量

伊能三治郎（忠敬孫） 見送り 第八次測量 出迎え 第七次測量

伊能鉄之助（忠敬孫） 出迎え 第七次測量

○「伊能忠敬隠居財産の謄金」文化八年十一月

妙薫（稲） 百五十両

○「飯高惣兵衛御用留」寛政八年記

四月一二日 十日夕、加納盛右衛門、新屋着（注 新屋は、盛右
衛門の生家）のよし。

四月一六日 盛右衛門参り候由、浜へ参り逢わず。

八月一六日 佐原、平右衛門（注、伊能平右衛門） 入来。晚、新屋
にて盛右衛門一件対談。

注釈 「晚、新屋にて盛右衛門一件対談」とは、盛右衛門

夫妻が江戸店を引き払って、片貝村に引き上げるこ
とになった一件である。『九十九里浦と伊能忠敬』

○『九十九里浦と伊能忠敬』古川力著

文化二年一月九日 飯高惣兵衛死去

○「平山藤右衛門家過去帳」

文化七年四月一三日 伊能盛右衛門死去

盛右衛門の戒名、蓮克院景明日徳

○「伊能稲より伊能勘解由宛の文書」大正六年に、大谷亮吉氏が『伊
能忠敬』の著書執筆時、伊能家所蔵

稲、薙髪して名を妙薫と改め、測量先の忠敬に赦免を求める。

○「平山藤右衛門家過去帳」平山宇右衛門宣輝識

稲の戒名、華香院妙薫日明

○「伊能勘解由より伊能平右衛門ら八人宛の書状」文化七年一月一
五日

勘当した稲が、夫を亡くし病身のうえ、髪を切つてわびてきたた
め許した。

○「伊能勘解由より伊能妙薫宛の書状」文化八年二月一七日興津宿

（現静岡県清水市）認

佐原の老家（伊能三郎右衛門家）の取り締まりの依頼。

伊能盛右衛門・稲夫妻に関係した資料の内容について記述したが、
ここで産経新聞の平成十四年（二〇〇二）五月二十五日に掲載された
「忠敬書簡の発見」の記事について紹介する。

それは、大阪市内の古書店で、伊能忠敬が九州測量中に、佐原村の
伊能平右衛門・永沢治郎右衛門（伊能家の親族）ら八人宛に書かれた
「勘当した長女稲が、夫を亡くし、病身のうえ、髪を切つてわびてき
たため許した」という書状（記述内容から文化七年十一月十五日付と
推測）の発見を報じる記事で、許し状が出てきたのだから、稲が勘当
されたのは確かなことである。

大谷亮吉編著の『伊能忠敬』の著書のなかにも、「伊能家に文化七

年に稲が薙髪して、名を妙薫と改め、九州へ出張中の忠敬に赦免を求めたことが記されている文書が現存する」と、記述されている。

この文書は大谷氏が『伊能忠敬』を執筆した大正六年（一九一七）に、伊能家で所蔵していたといえる。

また、「伊能忠敬測量日記」によると、伊能隊が全国測量に立出・帰府時、伊能盛右衛門は、一度も送迎をしていないし、妙薫（稲）の送迎も、盛右衛門死去後の第七次測量の出迎え（文化八年五月八日）と、第八次測量の送別時（文化八年十一月二日）だけである。

これから、伊能盛右衛門は、江戸鎌倉河岸の伊能店で米穀商を営んでいた寛政七年後半（盛右衛門四〇歳、稲三三歳）から寛政八年初期の間に、経営上の手落ちで伊能忠敬に離縁され、稲は夫に従い家を去ったので、忠敬はやむを得ず稲も勘当（久離）したのであろう。

稲は、文化七年四月一三日、夫・盛右衛門死去後、親戚故旧を通じて忠敬に哀願して勘当を解いて貰い、文化七年後半に佐原へ帰った。その後は、第七次第八次の九州測量で忠敬留守中、佐原本家の家政や経営に献身的に協力した。

古川力氏が『九十九里浦と伊能忠敬』のなかで、「天明七年に、稲が忠敬に勘当された」という記述は、（『忠敬書状』資料四の二）には、書状を認めた年代はなく、月日だけ記されていて、そのうえ、前半に「稲の懐胎」のことが記されている。後半に、忠敬と潮来村の窪谷庄右衛門との間に取り交わされた「庄右衛門伴政四郎の養子証文の取替申一札之事」が記され、その期日が天明七年八月と記述されているので、古川氏が、寛政七年を天明七年と勘違いをしたのであろう。

○伊能稲（忠敬の長女）と伊能鉄之助（忠敬の孫）の墓石
佐原市観福寺 右側・稲の戒名 楞嚴院牀常妙実大姉



○伊能盛右衛門・稲夫妻の墓石
多古町南中 平山藤右衛門家の墓地内



○伊能盛右衛門の墓所跡 九十九里町北増墓地
盛右衛門の墓地は、稲生家によって千葉市に移転している



『九十九里浦と伊能忠敬』より

資料8 伊能盛右衛門・稲夫妻と忠敬の関係年表

西暦	年号	(年齢) 盛 右 衛 門	(年齢) 稲	(年齢) 忠 敬
1755	宝暦 5	0 出生 [享保 19 年飯高惣兵衛(尚寛) 出生]		11 小堤の父の所へ
1756	6			
1757	7			13 「達」の先夫景茂没
1762	12			18 「達」と結婚
1763	13	8 伊能家の養子になる (九)	0 出生	
1978	安永 7	23 佐原村領主御用人佐原へ下向 忠敬に代って贅養子盛右衛門罷 り出る (旌)		34 「達」と奥州旅行
1781	天明元	26 領主より勝手入用金用達仰せ つけられ名代となる (旌)	25 盛右衛門と江戸で生 活を始める (九) 稲 勘当される (九)	37 本宿組名主
1782	2	27 鎌倉河岸で米穀商経営 (九)		
1783	3			39 妻「達」没
1786	6			42 二男秀蔵出生
1787	7	32 佐原村若殿様小納戸頭取上座 奥勤め仰付けられたので伊能家 名代として年頭に罷り出る (旌)		
1788	8			44 三男順治出生 篠没
1789	寛政元	34 佐原村領主へ伊能家名代とし て年頭に罷り出る (旌)		45 三女琴出生
1790	2			46 内妻妙諦没 信と結婚(家)
1792	4	37 忠敬から暦算書購入依頼を受 ける (伊能文書)		48 領主より三人扶持
1793	5			49 関西旅行
1794	6	39 伊能親子の奇特の儀について 「追願書」を差し出す 妻と景敬妻連れ下向 (旌)		50 三男順治没 隠居して 名を勘解由と改める 「稲」懐胎 (忠敬書状)
1795	7	40 三郎右衛門名代で佐原領主へ		51 妻信没
1796	8	41 片貝村新屋へ 稲と片貝村で米穀商開業 (九)		
1798	10			54 内縁妻栄同棲
1804	文化元	[文化 2 年 飯高惣兵衛 72 歳没]	48 許されて佐原へ(産経 新聞・忠敬書状) (伊能 家文書) 49 東河より妙薫御坊(忠 敬書状) 50 妙薫の隠居屋大分で きる (忠敬書状) 51 許されて佐原へ帰る (九) 52 妙薫・佐原より江戸宅 へ来る (忠敬先生日記)	60 小普請組登用
1810	7	55 4月13日 盛右衛門没 (平山家過去帳)		
1811	8			67 秀蔵・桜井家に贅養子
1812	9			
1813	10			69 長男景敬 48 歳没
1814	11			70 亀嶋町宅へ転居
1815	12			71 秀蔵勘当
1818	文政元			74 4月13日 忠敬没
1822	5		60 8月24日 稲没	

注釈 出典 「九」：九十九里浦と伊能忠敬 (古川 力著) 「旌」「家」：旌門金鏡類録 家牒 (伊能淳所蔵)
 「伊能文書」：伊能三郎右衛門家所蔵 「忠敬書状」：伊能忠敬書状 (千葉県史編纂審議会編)
 「過去帳」：平山宇右衛門宣輝識 「忠敬先生日記」：伊能忠敬記念館所蔵・佐久間解説

「忠敬を詠む」(二) 伊能 洋

母、多嘉子(俳号 三木つゆ子)は若い頃から和歌を学び、
宮終二の「コスモス」に入っていたが一九七三年に俳句に
転向、青柳志解樹に師事して「山暦」創刊と共に会員とな
った。一九八二年には傘寿を記念して句集「夕顔」を上梓
した。その翌年逝去した母と入れ替りに私が山暦に入れて
頂くことになった。

春光を手に掬ひみて傘寿かな つゆ子

「三木つゆ子句集」から

鳥かへる守りつぎきし遺品の数

忠敬百四十年祭

緑陰や碩学に肖ぬ孫許り

花万朶忠敬記念館今日開く

春光や庫の甕に並ぶ家紋

春愁や伝へ来しもの手離して

きしみつつ開く蔵の戸梅雨じめり

紙魚の跡も少なく保つ家伝の書

紅芙蓉手離せし家去り難く

重文の遺品に暗き春灯

蜘蛛の糸史蹟の軒の傾きて

陽子に

秋朗ら娘は古文書を読みつぐと

忠敬百六十年祭二句

青嵐古刹に集ふ人の数

百合香る偉業は今も讀へられ



より — 佐原伊能家を訪れた人々 —

自是以来一考

ちんちん育ち

思ふふ先生の偉業

稲毛

稲毛 金七

いなげ きんしち (一八八七—一九四六)

大正・昭和期の教育哲学者。山形県。号を祖風。早大。中島半次郎とともに、被教育者を人格によって人格にまで高めるといふ「人格的教育学」を主張した。また一九二三年に著した「創造教育論」は、八大教育思想の一つとして大正新教育運動に大きな影響を与えた。

(コンサイス人名辞典)

建部 遜吾

たけべ とんご (一八七—一九四五)

明治・大正期の社会学者。新潟県。東大。一八九八年東大社会学講座の初代担当教授となり、一九二二年退官までコントの社会学理論を基礎にした自説のほかは拒否しつづけた。また日本社会学院(学会)を設立し、主宰した。その後、衆院議員をへて、勅選貴院議員となった。

(コンサイス人名辞典)

既治家了復奉公
成養此乎不費之
於誠道業不二偉
弘一生

大正十四年九月
建部遜吾拜題

『旌門金鏡類録』 (五)

小島 一仁

箱訴願書

『旌門金鏡類録』第二冊は、最後に、佐原村の百姓らが、幕府評定所に提出した箱訴願所の写しを三通のせている。いずれも、「伊能三郎右衛門先祖より代々寄特の趣」を記した墨付紙七枚(四〇〇字原稿用紙十一、二枚)ほどのものである。

○寛政十一年十二月二十一日、箱訴願書「下書之写」

○同年同月同日、「御箱訴願書之写」

○寛政十二年正月二十一日、「御箱訴願書之写」

最初に記したものは、佐原村本宿組百姓幸左衛門(百姓代源兵衛の代理)と与左衛門が、江戸馬喰町の旅宿に滞留中、佐原から持参した下書について二人で相談して本紙に認めたという、その下書である。

次のものは、その本紙で提出者名は源兵衛と与左衛門の二人になっている。三番目のものは、提出者名が、佐原村百姓惣代藤左衛門、甚左衛門、幸右衛門(幸左衛門と改名)、伝右衛門、四郎兵衛、加藤洲村百

姓仁兵衛、津宮村百姓清兵衛の連名になっているが、「右七人代を兼、本宿組八日市場百姓^{當時は}幸左衛門、伊能三郎右衛門先祖より代々寄特^{新地位}取計候故、御評定所御箱訴仕候」と記されている。

右の三通は、大体、同じようなことを記しており、「寄特」の行為を整理すれば、次のようになる。

①九代以前、伊能壹岐というものが、天正のはじめに当村に居住し、当時、国分氏の領地で矢作領といわれた八四ヶ村の年貢とりたて等の「役儀」を相勤めた。

②徳川家関東入国以後は「権現様、台徳院殿様」(大御所家康、二代將軍秀忠)の「御業鮭御用」をつとめ、利根川の鮭を上納した。

③慶長一三年(一六〇八)、佐原村等が旗本知行所に引き渡されてからは、鮭御用は止めになったが、そのかわりに、佐原村塩役を下しおかれ、毎年、冥加永二百五十文を上納することになった。このとき伊能家は、佐原村市で塩を売る者から、九十九里塩五斗入一俵につき役塩一升を取り立てる権利を与えられたが、しばらくして、このことは「小前商人迷惑」になるとして、取立てをやめた。為に、村方も段々と繁昌した。

④伊能家は代々名主役をつとめて新田開発にたずさわり、その開発田は、数度にわたって、百姓たちに家別に割り渡したが、自分は、一切、割地を引き請けなかった。

⑤四代以前勘解由(景利)は、常に困窮の百姓を助け、年貢上納、村入用についても、村為第一としてつくした。とりわけ、宝暦二年(一七五二)、大水害の後、幕府によって大規模な「御救普請」が行われた

とき、新島並びに五ヶ村普請所を落札して工事を請け負い、百姓たちを普請にやとって生活を助けると共に、工事を立派に完成させた。

⑥三代以前三郎右衛門（昌雄）、二代以前三七郎（長由）も名主役をつとめ、凶作の節、度々米銭を合力して百姓たちを救った。

⑦寛保二年（一七四二）、三七郎が死去した後、約二〇年の間、三郎右衛門家は当主が定まらず親戚の管理にまかされていたが、その間にも、宝暦六年（一七五六）から八年にかけての凶作のとき、米麦の合力をして百姓たちを助けた。

⑧当三郎右衛門（景敬）の父勘解由（忠敬）も、明和三年（一七六六）の凶作に米銭を合力した。また、明和九年（一七七二）、幕府の利根川筋川岸調査が行われたとき、親戚の茂左衛門と共に佐原村の川岸間屋を引きうけ、他村の間屋とちがって、商人たちの荷物から口銭をとらず、ために、佐原川岸は繁栄した。

⑨つづいて、忠敬・景敬父子が、天明の飢饉に際して村のためにつくしたことがくわしく記されているが、それは、本誌第三六号に紹介したことに同様なので、それを参照していただきたい。

永沢・伊能の「両家」

さて、箱訴願書は、右のように、伊能三郎右衛門家の功績を長々と述べた後、最後に、「恐れ乍ら御吟味の上三郎右衛門召し出され、御褒美下し置かれ候はば一同有り難き仕合せに存じ奉り候」などと記している。「御褒美」とは、一体、何なのか。具体的には、何を願っているであろうか。

そのことは、簡単にいえば、伊能三郎右衛門家に対して、幕府から

直接に苗字・帯刀を許してもらいたいという願いであるということになる。しかし、それについての理解をたしかなものしていくためには、佐原村で並び立つ二つの名門、永沢治郎右衛門家と伊能三郎右衛門家のこの時期における状況を知っておく必要がある。それに関して、寛政十二年正月二十一日の「御箱訴願書之寫」には、次のように述べられている。

三郎右衛門家は、代々、地頭所から帯刀を許されており、元文四年（一七三八）、佐原村が幕府直轄領となった時には、一時、そのことは止めになったが、父勘解由（忠敬）代に当村が旗本津田家の知行所になると、また、「苗字」道中帯刀其身一代御免仰せ付けられ、村役人上座後見役仰せ付けられ三人扶持下し置かれ、寛政六年暮に隠居して当三郎右衛門が家督を相続したところ、地頭所から、父と同じ地位待遇を与えられた。一方、同村の治郎右衛門（俊順）は親の治郎右衛門（征俊）の代に、居村と近村が凶作の節、救助の手当をしたことが奇特であるとして、宝暦七年（一七五七）六月、同村の百姓平右衛門という者が箱訴した。それについて吟味が行われた上、同八年二月に勘定奉行大橋近江守様から奉行所に召出され、「御褒美銀拾枚下し置かれ、其身一代帯刀御免、苗字は永々名乗候様仰せ付けられ、また、当治郎右衛門も、明和三年（一七六六）凶作の節「手当致し相救候趣」によって代官遠藤兵右衛門様から「御褒美銀五枚」をいただき、天明三年（一七八三）と七年の凶作に米銭を合力して救ったため、地頭所津田家から「道中帯刀其身一代御免、村役人上座後見役仰せ付けられ、三人扶持を下し置かれた」

この後に続く記述は、原文で示す。

唱来、右治郎右衛門義ハ、
 御公儀様より苗字永々御免ニ付、御公辺迄苗字名乗候得共
 三郎右衛門儀は元来治郎右衛門よりハ代々長百姓ニは候得共当時地
 頭所ニ限り其身一代苗字御免ニ付御公辺江名乗候事
 不相成候ニ付、既ニ天明七年冬佐原村本宿百姓四郎兵衛甚右衛門
 藤左衛門藤藏治左衛門治郎兵衛庄左衛門伝右衛門源兵衛茂兵衛平左
 衛門ニ申もの為惣百姓代地頭所役人大嶋林右衛門殿佐原村廻村之節
 止宿罷出、右のもの仁心寄独之趣書附を以申立、先年治郎右衛門
 例も有之候ニ付、乍恐地頭所之思召を以
 御公儀様より苗字永々帯刀其身一代御免被為仰付被下置候様
 仕度趣願出候所勘解由及承驚入、右躰之願仕候ニハ余恐多
 儀ニ難相済旨申立願書達ニ貫下ケ候故、又候右百姓代共
 罷出天明六年より同七年ニ懸ケ甚奇独成趣旨ニ相認メ
 大嶋林右衛門殿止宿差出置差控罷在候処、当三郎右衛門義至
 仁心有之誠ニ代々ケ様之身躰成もの出来候義ハ村内百姓
 長久之基と小前百姓之儀は乍恐奉存候、依之大勢之小
 百姓水吞ニ被相頼兼々為惣代私共罷出右之趣奉申上候管ニ
 御座候得共困窮之身分故不任其意罷有候処於
 御公儀様ニ寄独成もの有之候ハ、可申立旨御沙汰も承知仕候
 ニ付右之段地頭所江申立御奉行所達、御聴候様仕度
 相談も仕候処、又候三郎右衛門父子及間達ニ差押候ニ是迄之存意
 相届不申
 相届不申

○解説文

右兩人義は御料所之節より村方ニ両家と申

唱来、右治郎右衛門義ハ

御公儀様より苗字永々御免ニ付、御公辺迄苗字名乗候得共

三郎右衛門儀は元来治郎右衛門よりハ代々長百姓ニは候得共当時地

頭所ニ限り其身一代苗字御免ニ付御公辺江名乗候事

不相成候ニ付、既ニ天明七年冬佐原村本宿百姓四郎兵衛甚右衛門

藤左衛門藤藏治左衛門治郎兵衛庄左衛門伝右衛門源兵衛茂兵衛平左

衛門ニ申もの為惣百姓代地頭所役人大嶋林右衛門殿佐原村廻村之節

止宿罷出、右のもの仁心寄独之趣書附を以申立、先年治郎右衛門

例も有之候ニ付、乍恐地頭所之思召を以

御公儀様より苗字永々帯刀其身一代御免被為仰付被下置候様

仕度趣願出候所勘解由及承驚入、右躰之願仕候ニハ余恐多

儀ニ難相済旨申立願書達ニ貫下ケ候故、又候右百姓代共

罷出天明六年より同七年ニ懸ケ甚奇独成趣旨ニ相認メ

大嶋林右衛門殿止宿差出置差控罷在候処、当三郎右衛門義至

仁心有之誠ニ代々ケ様之身躰成もの出来候義ハ村内百姓

長久之基と小前百姓之儀は乍恐奉存候、依之大勢之小

百姓水吞ニ被相頼兼々為惣代私共罷出右之趣奉申上候管ニ

御座候得共困窮之身分故不任其意罷有候処於

御公儀様ニ寄独成もの有之候ハ、可申立旨御沙汰も承知仕候

ニ付右之段地頭所江申立御奉行所達、御聴候様仕度

相談も仕候処、又候三郎右衛門父子及間達ニ差押候ニ是迄之存意

相届不申

右の記述によると、治郎右衛門（永沢）と三郎右衛門（伊能）は、
 佐原村では「両家」といわれ、並び立つ名門とされているのに、治郎

右衛門の方は、幕府から「苗字永々御免」を許されているので、「公辺」まで苗字を名乗ることができるのに、三郎右衛門の方は、地頭所限って「其身一代苗字御免」になっているだけなので、「公辺」へは苗字を名乗ることはできない。そこで、どうか三郎右衛門家へも、幕府から直接「苗字御免」にしていだきたい、というのが箱訴願いの主旨であろう。

箱訴のねらい

なお、この箱訴については、それが行われた時期についても考えてみなければなるまい。

永沢治郎右衛門家の功績について箱訴が行われたのは、前に説明したように、宝暦七年（一七五七）、治郎右衛門が佐原村と近村の凶作に際して村々を救った、その直後であり、翌年には、治郎右衛門に対して、幕府から苗字・帯刀が許可された。このとき、三郎右衛門家も救民のために合力を行ったようであるが、それに関しての箱訴は行われなかった。そのわけは、当時、三郎右衛門家は、忠敬が入夫する五年ほど前で当主も定まらぬ状態であり、合力をしても、治郎右衛門家と肩を並べるほどのことは、とてもできなかったからであると思われる。

三郎右衛門家に箱訴されそうな機会がめぐってきたのは、天明七年（一七八七）ごろであったと考えられる。忠敬が当主となって家産を増し、天明の飢饉で村のためにつくした功績は、宝暦期の治郎右衛門の功績を上まわるものだったからである。だが、このときに箱訴は行われなかった。前に原文で掲げた箱訴願書の中に、佐原村の百姓一〇名ほどの者が惣代となって、地頭所を通して幕府にはたらきかけよう

とする動きがあったことを記しているが、これを知った忠敬は「恐れ多き儀」であるとして、その願書を貰い下げてしまったという。そして実際に箱訴が行われたのは、寛政十一年（一七九九）十二月から、翌十二年の正月にかけてであった。この時期には、忠敬は隠居してすでに江戸に出ており、佐原村には凶作や変事もなく、三郎右衛門家の当主となった景敬が特に村政につくしたということもない。それなのに、どうして、この時期に箱訴が行われたのであろうか。

寛政十一年には、忠敬は、蝦夷地測量の決意をかため、この年の末ごろから、師の高橋至時は、その許可が早く下りるようにと、幕府に対して精力的にはたらきかけていた。しかし、その交渉は必ずしも順調ではなかった。忠敬の身分が武士でなかったことも、一つの障害になっていたらしい。こういう時に、箱訴が行われたのは、忠敬が立派な人物であることを幕府首脳部に印象づけ、測量許可が早く下りるようにと、至時のあとおしをする意味があったのではなからうか。この時の箱訴のほんとうのねらいは、そこにむけられていたのではないかと思われる。もしそうであるとすれば、この箱訴は、佐原村とその近村の百姓たちの名で行われているが、実は、そのうらで、佐原伊能家の主人となっていた景敬が深く関与していたのではないかと思われる。この箱訴のためにかかった諸費用「金六拾五兩二朱鐐四百七拾五文」を、景敬が後に全部支払っている（『金鏡類録』第三冊に記載）のも、そのためではないかと思われる。

忠敬・景敬の父子が、幕府から苗字・帯刀をゆるされたのは、蝦夷地測量がおわった後の享和元年（一八〇一）正月のことであったが、箱訴が行われたタイミングは、まことに適切だったといえるであろう。

伊能忠敬大日本沿海輿地全圖（大圖）

― 出雲伯耆地方 ―

鈴木 純子

本年各地で巡回開催中の「アメリカより里帰り伊能大図フロア展」にあわせて、「伊能忠敬大日本沿海輿地全図（大図）出雲伯耆地方」の写真版を紹介する。

明治四二年（一九〇九）の『歴史地理』第十三巻一号に、「伊能忠敬先生大日本沿海輿地全圖（大図）略説」という二ページの解説とともに掲載されているもので、原図は内閣記録課保管とある。解説は編集者によるものと見え、無記名である。いささか不鮮明な写真ではあるが、百年近くも前に撮影、印刷されたもので、いたしかたがないとしなければならないだろう。明治は遠くなりにはけりである。

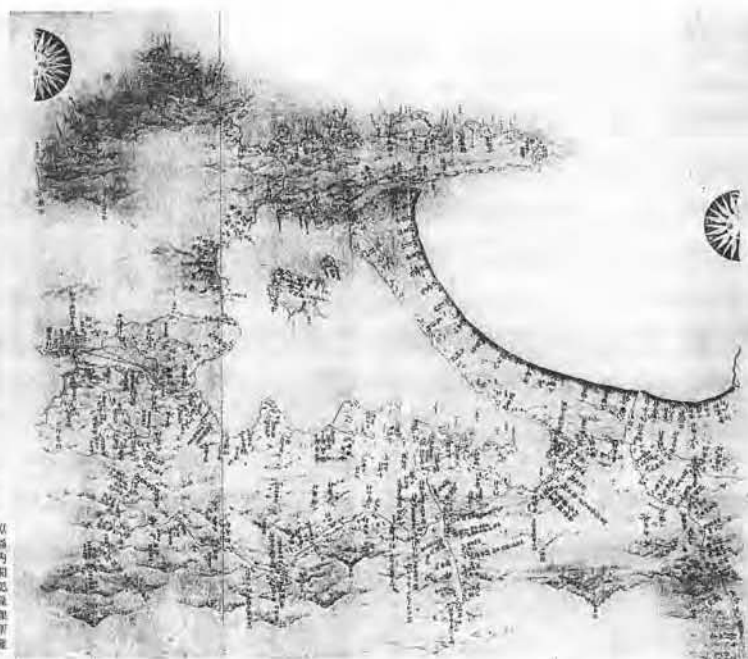
解説の一部を引用する。

「…その圖の精細にして正確なる、現今の測地家も猶及ばざるところ、今の數學家地理家も驚嘆措く能はざる所なり。然るにこの幕府に上りし圖は、王政復古と共に幕府より移りて太政官の所管となりしが明治六年五月五日皇城の炎上と共にこの圖も悉く災に罹り、全く烏有に歸し去りしは、實に遺憾の極というべし。然るに先生が郷里なる千葉縣佐原町の遺族の家、幸に該圖の副本を藏せしにより、遺族より再び之を太政官に献納し、爰に復政府の秘庫に該圖を藏せらるゝに至りたり。太政官廃止の後、内閣記録課の所管となりて、遂に今日に及べり。『改行』先生歿して爰に凡そ九十年、先生の偉業は世の擧て認むる

所なるも、その製作品の如何なるものなるかは、世多く之を知らず本會乃ち特に秘閣の許を得て、その一部を世に紹介せんとし、まづその大圖を撮影し、寫眞版として本誌に登載せり。『改行』先生が測量學に於ける造詣の深遠なるを見るは、寧ろ中圖に於て見らるる所なるも、普通の寫眞版の如きに於ては、到底その眞を傳へ難きを以て、これは更に後日に譲り、今はその大圖の一部をこゝに載せたり。…」

引用部分の前には、導入部として、内閣の秘庫に藏される圖が世に發表されていないこと、伊能忠敬の測量と地圖製作の經過が述べられ、後の部分には大圖の縮尺、それに応じた「海岸の出入と道路の屈曲との精密なる」ことにふれた上で、「…多少測量の精疎なきにあらねど、略ぼ同一調を以て描寫せられたれば、何處を選むも可なれども、最も沿海地形を見るに好都合なるを以て目的とし、特にこの出雲国美保湾及中海附近の圖を擇びたり…」と選択の所以を述べる。三保関、中海を含む図は、大圖二一四面のうちの第一五五号で、たしかに変化に富む地形である。解説はさらに続けて、掲載図の内容におよび、松江城、米子城の見事な描写、所どころに何某の領分という記入があり、領地の研究資料たりうること、神社（国分寺跡・安国寺・清水寺・勝田明神・須多神社を例示）等古跡の記入が少なからぬことなどをあげ、この圖が歴史地理の研究にも有益な地圖であるとしている。そして最後は、「されば我が歴史地理研究の資料としては、大圖を推す所なるも測量家の眼より見れば寧ろ中圖の勝れるものあるを見る。故に吾人はさらに近く中圖の標本をも示し、目下先生の事蹟につき詳細の研究をせられつつあるひとに請ひて、更に先生の偉業を一層詳細に世に紹介せんことを希望せる所なり。」と締めくくられている。

「目下先生の事蹟につき詳細の研究をせられつつあるひと」とはも



歴史地理 13 (1) 1909 (明治 42) 原版の大きさ 縦 204mm 横 222mm

ちろん、大谷亮吉氏であろう。彼の『伊能忠敬』(岩波一九一七)に長岡半太郎がよせた序言(大正六年三月付)には、長岡が帝國学士院総会で、伊能忠敬について、残存する材料を蒐集し、その事蹟を明確にして、世に伝えることを提言し、賛同を得たのが、明治四一年(一九〇八)六月で、以来、院の事業の一つとして、大谷によって新材料

の発見や綿密な考証が重ねられた、とある。雑誌『歴史地理』が刊行された明治四二年一月は、大谷の調査開始後間もなくの頃ということになる。官庫に収められた伊能図が、調査のために動き、撮影もおこなわれて、歴史地理学会(東京帝国大学内に本拠)の注目するところともなったであろう。長岡の序言には、三上参次氏らへの謝辞もあり、当然ながら歴史地理学会との協力関係には深いものがあつたことがわかる。

さて、この古い写真をここに紹介したわけであるが、すでにお気づきの方も多いと思うが、内閣記録課保管の伊能図というのは、冒頭の長い引用にもあるとおり、明治七年に伊能家から明治政府に献納された、文政四年上呈図副本そのもので、写真はそのうちの大図第一五五号の一部なのである。『伊能忠敬』には中図(畿内の一部)の写真版(もちろんモノクロ)があるが、大図の写真版はないので、大図副本の写真版としては、これが唯一のものではないかと考えられる。在りし日の大図副本の姿を伝える貴重な写真といえる。

内閣記録課保管ということをもつて伊能大図副本と断定できることについて、少しふれておこう。これまで伊能図副本の動きに関しては、内務省地理局、帝国大学図書館の保管が知られており、内閣記録課という名称は耳慣れないが、伊能家から献納された大・中・小図のセットと江戸府内図が、この時点で内閣記録課保管であつたことは、河田(一八九一)の「『即チ之ヲ献納ス』即今内閣記録課保管スルトコロの本是ナリ」(一八九一すなわち明治二十四年現在)とあることからほぼ推測できるが、東京大学史料編纂所に伝存する皇国地誌編纂事業関連の文書や地図の目録を検討した千葉(二〇〇四)によって、さらに

確認することができる。明治初期の政府機関の改変はめまぐるしく、地誌編纂事業の担当に関しても同様である。千葉（前掲）は、事業の移管にともなう引継資料の確認などのために作られた各種の地図目録を用いて、資料の管理状況の復元をおこなっている。

そこからいえることは、資料そのものの所在場所と、物品としての所管とは必ずしも一致していないことである。地誌編纂資料についていえば、事業の必要上資料は地誌課が保管し、利用しているが、物品としての所管は内務省図書局（内務省図書）であり、地誌課はそれらの資料を図書局から借用（常借）しているという形である。伊能図を含む内務省図書についていえば、明治一八年（一八八五）の内閣制度開始にともない、太政官文庫を引き継いだ内閣文庫が誕生し、各省庁にあつた維新前の資料がここに移管されることになったため、所管がそれまでの内務省図書局から内閣記録局へと変更される。しかし、地図そのものはあいかわらず、地誌課に「常借」として置かれたままであつたことを、上記の目録から読みとることができる。明治二三年（一八九〇）に地誌編纂業務が帝国大学史誌編纂掛に移管されると、「常借」資料もそのまま帝国大学に移された。この「常借」資料はその後、順次内閣文庫に返却されていく。明治二八年（一八九五）から明治四一年（一九〇八）の間の返却状況を記した目録が残っている。千葉（前掲）によれば、この目録の中で、「伊能忠敬大日本輿地実測図（大・中・小）」「大日本江戸実測図」については、明治四一年十月二十一日「大学図書館へ」となっているという（未見）。

大谷亮吉の調査の開始時期と一致しているので、そのための措置かもしれない。この写真の撮影も、時期的に見て、上記の調査や大学図書館への移管という一連の動きのなかでおこなわれたものであろう。

大学図書館に保管されていたこれらの地図が、『伊能忠敬』刊行から十年もたたずに、関東大震災によって焼失してしまったことは皮肉な運命ではある。もし内閣文庫に返却されていたら……。

天眼鏡の助けも借りて、写真を仔細に眺めると、ある程度原図の雰囲気がかかる。国立国会図書館所蔵の氣象庁旧蔵大図模写本四十三面は、この図とは地域を異にしているが、描き方はよく似ており、原図の忠実な写しであることが確認できる。また、アメリカ議会図書館所蔵の大図には、この図と同じ第一五五号がある。『アメリカにあつた伊能大図とフランスの伊能中図』（日本地図センター、二〇〇四）には、その松江、米子周辺の図版が収録されており（二一三頁）、両者の比較が可能である。議会図書館図版の場合は、山野に彩色がなく、家屋が黒抹であらわされるといった、簡略化があることは周知のとおりだが、両図を比べてみると、測線が忠実に写され、地名もほとんど脱落なく写しとられているように見える。

この写真のおかげで、大図副本そのものの姿が垣間見られるだけでなく、現存する模写本の信頼度についても、一定の判断の材料が与えられたことになる。

（すずき じゅんこ・相模女子大講師、元国立国会図書館）

・河田 照 （一八九一）「本邦地圖考 大日本実測図同実測録」

史学雑誌 六（七）

・千葉 真由美（二〇〇四）「皇国地誌編纂過程における地図目録と地

図主管の移動『内務省地理局における地図蓄積Ⅱ管理構造の復元的研究』二〇〇四、三（二〇〇二・二〇〇三科学研究費

補助金研究成果報告書 研究代表者：横山伊徳）

東蝦夷地の会所

堀江 敏夫

はし が き

江戸時代の会所は株仲間の事務所、米・金銀などの取引所、専売品の取扱所、町役人・村役人の事務所などで、平たくいうと人々が集会をするところの意味である。

蝦夷地の場合は人の集まる所には違いないが、少しその性格を異にする。蝦夷地での会所は、もともとは運上屋と呼ばれた施設で、松前藩や藩士がアイヌと交易をするところで、非常に粗末な施設であった。この交易権が場所請負人に移ると宿駅も兼ねるようになり、常駐する者もいて建物は立派になり、付属施設も整備されていった。

幕府は寛政一一年（一七九九）東蝦夷地直轄に当たり、場所請負制度を廃して直捌としたが、蝦夷地から送られる産物を処分し、各場所の必要な仕入物を取り扱うため、同年五月江戸霊巖島に蝦夷会所を設けた。会所には蝦夷地御用掛の吏員も詰めた。一方、東蝦夷地の各場所の運上屋は会所と改められ、幕吏が詰め合い、従来の運上屋としての機能のほかに、公務をも行う出張役所としての性格を持つようになった。建物の全部が立て替えられ、或は新設されて、旅宿所・倉庫・作事小屋・番屋・厩・堂社などの付属建物なども増加していった。

伊能忠敬の第一次測量時は、丁度会所などの建物の建て替えや整備が始まろうとしている時で、やや立派な運上屋はそのまま会所となり、粗末な建物は建て替えられ、番屋、仮屋をもって、何とか旅行の出来るように配慮されていたが、最低限度のものであった。

一、東蝦夷地の上知と幕吏の派遣

寛政年間に入り諸外国船がしきりに蝦夷地に来泊するようになり、幕府もこれを放置することは出来ず、同一〇年（一七九八）四月、目付渡辺久蔵、使番大河内善兵衛、勘定吟味役三橋藤右衛門、付属吏員、従者など一八〇人の大調査団を蝦夷地に派遣し、勘定奉行石川左近将監は江戸にあって事務をとった。一行は五月に松前に着き、渡辺はここにとどまり、大河内は東蝦夷地の様子まで、近藤重蔵は進んで厚岸から国後、択捉を探検し、三橋は西蝦夷地を宗谷まで巡視した。

一月江戸に戻った一行は、幕閣らに復命し、評議を重ねた結果、幕府は外国との境界取り締まりのため、東蝦夷地を直轄経営することに決定した。

幕府は寛政一一年（一七九九）二月東蝦夷地のうち浦河から知床岬及び付属諸島を仮上知した。ただ、浦河以東に行くには、松前藩領である箱館などの南側蝦夷地を通らなければならない不便があり、松前藩も通行事務上煩勞なため、同年六月には知内川以東三石の地も返上したい旨の申し出があり、八月に東蝦夷地を全部幕府の直轄地とした。松前氏にはその代地として武州埼玉郡久喜町に五千石と東蝦夷地収納金（寛政一一年千両、同一二年三千五百両等）が支給された。

幕府の打ち出した政策は、①東蝦夷地の直捌制の導入で、場所経営を幕吏が行うもの。場所請負による過酷なアイヌ支配をやめ、キリスト教化（ロシア側になびく）させない。②アイヌ風俗の改革で、月代を剃り、髪を結い、日本語の使用、耳輪・入墨を禁止し日本人だとみなすこと。交易の不正を正すため升目秤目等を厳しくし、官員を各交易場所に詰め合させ、五里ないし一〇里に官舎（会所・番屋）を設ける。③農業の振興で、蝦夷地で畑作を行い、稲作の試作を行うこと等であった。

寛政一〇年一二月幕府は、書院番頭松平信濃守を蝦夷地取締御用掛に、翌年正月には勘定奉行石川左近將監、目付羽太庄左衛門、使番大河内善兵衛、勘定吟味役三橋藤右衛門を取締御用掛に追加発令した。さらに二月一〇日には寄合村上三郎右衛門、西丸小姓組遠山金四郎、西丸書院番長坂中七郎を蝦夷地掛に、付属吏員として勘定組頭松山惣右衛門、御勘定太田十右衛門・高橋三平、吟味方改役並鈴木甚内・水越源兵衛・大嶋栄次郎、支配勘定佐藤茂兵衛・近藤重藏・松田伊左衛門・竹尾吉十郎・菊地惣内・木原半兵衛・田辺安藏、支配勘定格富山元十郎、岩間哲藏、御徒目付細見権十郎・村田兵左衛門・藤本徳三郎・湯浅三右衛門・堀越友左衛門・比企市郎右衛門・宮田次郎橘・比留半藏・小幡千次郎・正田周平・金指専八郎・岡田大五郎・和田兵太夫、御普請役総元格寺田忠右衛門・三浦千藏・山田鯉兵衛、吟味方下役野々山牧三郎、御普請役最上徳内・中村小市郎・戸田又太夫・渡辺大之助・河野権次郎・倉橋藤四郎・安藤三次郎・庵原久作・寺澤治郎左衛門、長嶋新左衛門・村上次郎左衛門・佐藤平八・屋代龍八郎、御中間目付深山宇太夫、御小人目付大橋善四郎・青柳貞市・小林卯十郎・井上辰之助・松田仁三郎・栗山政五郎・宮川勝助・内田平四郎・西村常藏・梯沼次郎・根津清・相川平作・根津清左衛門・柳田元吉・安藤巳之助・塚田富次郎・田口久次郎・岡田左市・古澤常吉・八田直四郎・高橋次太夫が命ぜられ、従者、家臣上下を入れると四〇〇余人であった（休明光記）。

蝦夷地の勤務には身体強健、意志堅固であることが必要であったから、御勘定以下すべて人選の上、あらかじめ家族、親戚と熟談させ、特に希望する者だけを採用した。その多くはかつて蝦夷地のことに携わった者、もしくはその子孫であった。

直ちに幕吏たちの部署を定め、場所受取兼蝦夷交易、道路開削、青

森・大畑・石巻・酒田での仕入物取扱、政徳丸の上乗、択捉島掛、江戸掛などに配分し、下役は寛政一一年（一七九九）二月中旬に陸路にて江戸を出立した。三月下旬から松平信濃守には岩間哲藏・内田兵四郎が従者、大河内善兵衛には堀越友左衛門・塚田富次郎が従者、三橋藤右衛門には木津半之丞・西村常藏が従者として、それぞれ蝦夷地に向けて出立した。石川左近將監、羽太庄左衛門は江戸にとどまって事務をとり、江戸掛として松山惣右衛門など一〇数名が残った。

江戸の町人栖原角兵衛ほか二名に用達を命じて需要品の購入、先発の幕吏は松前にある角兵衛の支店を通じて、この地で各場所請負人から場所にある建物・漁具などの購入を交渉し、進んで蝦夷地に入り、浦河で土地を松前藩から受け取った。アイヌには混乱のないよう場所を直捌とするが、支配人・通詞・番人などは引続き従前の者を採用し、幕吏が直接これを監督として交易を適切に営むことを伝えた。奥地各地にも仕入品を送った。上り下り物資運搬のため官船を造船し、雇船をいれたが、官船の試運転に新造の政徳丸を三月二四日に品川から直航させ、富山元十郎・寺澤治郎右衛門・松田仁三郎・高橋治太夫の幕吏も乗船した。しかし、順風が得られず、海霧に妨げられ、六月二九日によりやく厚岸に着いた。

また、この調査には幕府侍医兼薬園總管渋江長伯も薬草調査で参加しており、その絵師として谷元旦が随行し、薬草の草木のほか奇勝図、景色図、会所（運上屋）風景、人物、動植物など八五九枚の絵図を残している（蝦夷紀行）。

二、靈巖島に江戸会所開設

幕府は寛政一一年（一七九九）四月御用取扱の町人として江戸では栖原屋角兵衛、栖原屋久次郎、田中屋伊助の三名を用達に命じ、蝦夷

地より輸送の産物、江戸より仕入物等を取扱うため、江戸伊勢町に商家の家蔵を借りて、江戸会所とした。

その後、靈巖橋の辺に適地を見立て、町奉行へ掛け合いの上、伺いをたて、同年五月五〇〇坪の地所を得て、新しい会所を建設した。この会所は江戸掛の詰所でもあり、蝦夷地関係の御用取扱所となった。

この地は石屋勘兵衛の請負地で都合九〇〇坪あったが、年々御用が高み手狭となったことから、勘兵衛を他地に移し全部を取得したいと町奉行に相談したが、当初は二〇〇坪とし、残りは五年以内に渡すことになった。

蝦夷地御用江戸懸り之儀、追々御用向差添ひ、当時にては増御用地も有之、場所広大に相成り、来申年御仕入物も是迄之一倍程に相成、右に付き、場所々々への掛合、越年之者共より来申年之手繰其外共場所限申越候儀等、追々御用向相高、並御船廻着之節は出荷物取捌方に付日々会所へ相詰、誠に取扱共繁用之儀、巨細に者申上兼候程の儀に御座候。(「休明光記」(卷之二))

靈巖島の会所は官吏が詰合して、蝦夷地から輸送された産物を処分し、蝦夷地に送る仕入物を取り扱うとともに、江戸掛の役人の御用取扱所となった。また、寛政一二年(一八〇〇)四月には八王子千人同心の千人頭である石坂彦三郎・志村又左衛門の兩人が江戸会所の蝦夷地御用掛を命ぜられ、その配下には組頭の森田宇兵衛・川村勝五郎・山本良助・風祭三左衛門・松本六郎・小島文平の六人が任じられ、蝦夷地行役の事務や産物の取扱を行った。警備と開拓のため蝦夷地に渡った千人頭原半左衛門・弟新介や半左衛門手付の者一〇〇人(同心子弟)とは綿密な連絡を取り合い、死亡者・病人の帰還などの手助けを行っていた(八王子千人同心史)。

また、箱館にも伊達屋林右衛門等数名の用達を置き、全国の主要港

にも用達を置いて取り引きの円滑を図った。

伊能忠敬は蝦夷地測量に向かう際、度々江戸会所を訪れ、鈴木甚内・細見権十郎・坂本伝之丞・西山孫右衛門等と陸路測量、先触等の交渉を行っていた。特に、寛政一二年閏四月一三日には出立書付の交付につき、鈴木甚内の伝言を用達の栖原屋角兵衛・田中屋伊助の兩名より次の連絡を受けた。

明十四日四ツ時、築地松平信濃守様、御屋敷へ御呼出御座候間、同刻に御出被成候。右之段私共より相達可申様、鈴木甚内様より被仰渡候に付、此段得御意候。以上。

閏四月十三日

尚々麻上下御用畏に而、御出被成候方可然哉に奉存候。

靈巖島御会所

栖原屋角兵衛

田中屋 伊助

(「伊能忠敬測量日記 第一卷」 佐久間達夫編 大空社)

寛政一二年閏四月一四日同刻に信濃守屋敷にあがった忠敬は、御勘定吟味方改役並鈴木甚内、御徒目付細見権十郎から幕命による蝦夷地測量試みの指令書を受けた。

三、谷元旦の「蝦夷紀行」と松田仁三郎の「北夷談」

谷元旦は幕府の東蝦夷地直轄時に調査、在勤に派遣された幕吏等と共に蝦夷地を訪れた幕府侍医渋谷長伯に同行した絵師で、薬草となる植物図は無論のこと、奇勝図・会所風景図等八五九図を描き、紀行日誌も残していた。特に東蝦夷地会所図は当時の蝦夷地の建物を知る上で貴重なものであった。「蝦夷紀行」によれば、寛政一一年(一七九九)三月二四日に江戸を発ち、四月二二日に松前城下に到着した。

東蝦夷地には五月六日に砂原村から松前藩の走り船「福寿丸」で内浦（噴火）湾の東端を渡り、最短距離で絵鞆場所に上陸した。当時は三石場所までは松前藩の領地であり、場所の運上屋が存在し、宿駅も兼ねていたため、谷は「旅館」に泊まったと記述している。これは運上屋内の宿泊施設をさしたもので、駅舎、駅とも書いていて、旅館は運上屋であったと考えられる。その後、海岸に沿って陸路を通り、葉草図や風景図等を描きながら、運上屋や番屋に泊まり、六月七日に三石場所と浦河場所の境に達し、「沢の向う御用地入口の木戸高札あり、所之法禁の条目書付あり」とあり（蝦夷紀行）、この地から幕府直轄地になり、高札が立てられていた。

しかし、その後の文でも旅館、旅舎とあるが、会所とはどこにもなく、会所という名称はまだ一般化されていなかった。絵鞆以降の宿泊地をあげると、幌別（旅館）、ヲモンベツ（白老町虎杖浜・番屋）、白老（旅館）、小糸魚（苫小牧市糸井・昼食小屋）、勇払（旅館）、鵲川（小屋）、上アツベツ（門別町・アイヌ小屋）、静内（旅館）、三石（旅館）、浦河（旅館）、様似（旅館）、幌泉（旅館）、庶野（旅館）、猿留（旅館）、広尾（旅館）、塘沸（旅館）、大津内（旅館）、尺別（旅館）、白糠（旅館）、釧路（旅館）、昆布森（旅舎）、仙鳳跡（旅館）、厚岸（記載なし）であった。

幌別の旅館はむさくるしいところ、小糸魚の昼食小屋は土間の上に藁藁を敷き、筵に包まって寝たが、夜中風強く、浪音高く草枕にて一夜を明かすところあり、鵲川の小屋はアイヌの漁撈小屋、浦河の旅館は狭く、膝を折るところもなく、葉草の写生も出来がたいところであった。

釧路の旅館はアイヌ鮮魚の物置として仕切っていて、魚の臭いが耐え難いところと記述しており、谷元旦那が東蝦夷地に来た時には、宿泊施設はまだ整備されていなかったようである。

一方、松田仁三郎は蝦夷地御用掛が江戸へ蝦夷地間（厚岸）の直行航路を開こうと、官船政徳丸（一、四〇〇石）に御用掛の幕吏（支配勘定格富山元十郎・御普請役寺澤次部左衛門・御小人目付高橋次太夫・同松田仁三郎・船頭水主同心露木元右衛門）等が上乗して、谷元旦那と全く同じ、寛政二年三月二十四日に品川を出帆した。途中台風にあい、四月二十九日に宮古湊に入津した。しかし、出帆日和に恵まれず長期滞在となり、地元神社に願掛けをする始末。六月九日ようやく出帆となり、一日目に活火山に出合い、アイヌの漁船に尋ねてこれが蝦夷地の樽前山と知り、襟裳岬をまわり一九日に釧路湊に接岸した。蝦夷地取締御用掛の一人である使番大河内善兵衛が到着していることを知り、ここで一旦上陸して対面したいと申し出て許された。宮古出帆以来髭も剃らず、長髪となっていたので、仁三郎が自分を含め元十郎、次太夫の髪月代を整え（次部左衛門は船酔で上陸せず）、橋船で上陸し、釧路詰合支配勘定竹尾吉十郎、同菊地惣内（面会し、次いで善兵衛と対面した。この日は船に戻り二〇日に再び上陸して風呂に入れて貰った。

ただ、天候が悪く出帆出来ず、高波で停泊中の船が大揺れ、皆船酔となり、二二日上陸を願い、釧路会所役人の介抱を請け、回復を待つて陸路厚岸に向かいたいと申し出た。二三日には御小人目付八田直四郎が見舞いに乗船、御徒目付比金市郎右衛門・御小人頭和田兵太夫が他地から来着したので、気分直しに元十郎、仁三郎が上陸して対面する。二四日ようやく良き風を得て出帆、二九日に厚岸湊に着船し上陸して、会所に行き、詰合の御勘定太田十右衛門・御普請役戸田又太夫・同心木津半之丞に面会、政徳丸が厚岸に安着したことを江戸に届けた。

その後の東蝦夷地の官員の動きを「北夷談」で見ると、元十郎は政徳丸の御用済み次第箱館で越年、七月二日仁三郎は厚岸詰、次部左衛門は根室詰、次太夫は勇払で越年と決まった。

知内川以東三石までの幕府の追加上知は、寛政一一年六月より進められていて、八月一二日に正式に御用地となった。次太夫の勇払越年はこの追加上知に対する諸準備のためと考えられる。また、八月二五日には太田十右衛門・大嶋栄次郎・水越源兵衛が箱館詰となり、追加御用地の調査のため越年し、仁三郎は一〇月から虻田詰となり、この近辺の調査のため越年となった。追加御用地となった各場所の直捌は同一二年より開始されたのである（以上北夷談）。

四、蝦夷地各場所に会所設置

寛政一一年（一七九九）八月に知内川以東知床岬・挾捉に至るまでを幕府直轄地としたが、幕府は蝦夷地に鉄銭一万貫を送ってその通用を許し、アイヌからの産物の買い上げ、賃金支払い、アイヌの米・酒・生活用品の売り払いにも通用させ、その取り扱いを会所にて行うとした。寛政一一年一〇月蝦夷地取締御用掛は当年の越年者を申し付けたが、箱館は水越源兵衛・富山元十郎・寺田忠右衛門・三浦千蔵、様似には会所を新規普請し、村上三郎右衛門・長坂忠七郎・菊地惣内・近藤重蔵・比金市郎右衛門・中村小市郎・庵原久作、勇払に高橋次太夫・山田鯉兵衛、根室に井上辰之助、各場所に詰合の最上徳内・長嶋新左衛門・村上島之丞・その外三人は一〇月に帰府し、来春に赴任の者は太田十右衛門・大嶋栄次郎・佐藤茂兵衛・戸田又太夫・田口久次郎・西村常蔵・栗山政五郎で、寛政一一年、同一二年春までの蝦夷地御用掛役人は二七人であった（休明後記等）。

東蝦夷地の運上屋が会所と呼ばれるようになったのは、寛政一一年六月以降と考えられるが、当時奥地の運上屋、番屋が粗末なことから白糠・釧路に運上屋、庶野・昆布森・仙鳳跡・ノコリベツ・アン子ベツ・野付に番屋を建て、東蝦夷地一帯の宿泊に不便の無いようにし、

厚岸・様似に会所を取り建て、ササル等二カ所に宿泊小屋を新設した。蝦夷地会所の掟書に次のようにある。

蝦夷地会所掟書

斯而、東蝦夷地場所々において会所を造り建られて、蝦夷人と交易の場となし、又は旅人之宿所となりぬ。依て会所掟を定める。

一 御役人中様御通行被遊候節、不礼不仕候様、入念相慎可申候。惣而諸人応対共叮嚀二心掛、兼々会所居合之もの相互二可申合候事。

右之通、平生急度相守可申候。以上。

申三月

〔休明光記〕 羽太庄左衛門 新撰北海道史

会所には幕吏のほか、場所支配人・通詞・帳役・番人・アイヌ雇いが詰め、行政事務、役人・在住・雇人の俸禄、米・生活物資支給、産物買上・発送、宿駅、止宿所、鉄銭流通、兩替、小休所・渡船場運営、道案内、馬・人足（アイヌ）の手配、通信文の運送、昼所の昼食・小休所への茶配膳、難船・死亡人の処理などを行なった。

会所は場所の中心となる施設で、米・塩・味噌・網・産物等納める蔵・倉庫、大工・鍛冶等の作業小屋、通行屋・旅宿所、アイヌ小屋、漁舎、厩、堂社等に囲まれて一部落を形成していた。会所は小さくて五〇坪、大きいものは一〇〇坪以上の大建築で、床の間付の座敷もち、上級官吏の宿泊に備えた。文化四年のロシア来襲事件以後は周囲に土手を築き、柵をめぐらせた立派なものに建替えられた。

五、伊能忠敬の蝦夷地測量と会所

伊能忠敬は蝦夷地測量のため、寛政一二年（一八〇〇）閏四月一日に江戸を出立し、五月二日に箱館に到着、早速箱館の御役所を訪ね、詰合幕吏に挨拶し、亀田役所には蝦夷地での最高責任者である勘定吟味役三橋藤右衛門に文書で到着を届けた。

忠敬ら上下五人が箱館役所の御勘定水越源兵衛・支配勘定寺田右衛門連署の添触を貰って東蝦夷地の各場所を経て、根室会所支配の西別番屋まで（山越内く西別）往復測量の旅を行った。往路の宿泊地は二七カ所、復路の宿泊地は西別を除き二五カ所であった。

伊能忠敬が東蝦夷地山越内場所に到着したのは、寛政一二年六月五日であったが、追加上知となった山越内場所く三石場所もこの年から直捌が実施されており、各場所には幕吏の詰合があつて、運上屋の会所への変更と、宿泊施設の整備、屋所・小休所の新設・整備、番屋の宿泊施設の転用整備が進められていて、何とか旅行の出来る状態であった。

東蝦夷地は一カ場所（山越内・虻田・有珠・絵鞆・幌泉・白老・勇払・沙流・新冠・静内・三石・浦河・様似・幌泉・十勝・釧路・厚岸・根室・国後）に分けられたが、小さい場所、大きい場所があつて、一場所一駅というわけにはいかず、通過する場所もあり、二カ所から四カ所に宿泊する場所もあつた。

往路の宿泊場所は、会所九カ所、通行屋一カ所、旅宿所一カ所、番屋六カ所、仮屋九カ所、支配人別宅一カ所で、復路の宿泊地は、会所七カ所、通行屋一カ所、番屋四カ所、仮屋一〇カ所、官員新宅二カ所、支配人別宅一カ所で、有珠・静内は往復とも通過、帰路では絵鞆経由と仙鳳跡通過があつた。

各宿泊地をみると、山越内場所の運上屋は粗末な建物であつたとみえ、忠敬は支配人別宅に宿泊、長万部は松前藩時代には独立した場所

であつたが、幕府直轄後山越内場所に統合され、詰合は御徒目付湯浅三右衛門、往路は旧運上屋の会所に泊まり、帰路はこの会所が川の増水で流されており、仮屋に止まつたと測量日記にある。

札文華峠は難所で知られ、海上を利用することが多く、船着場としても栄えた。小屋等は建設中で、忠敬も仮小屋に止宿、虻田詰合の支配勘定田辺安蔵が主催する札文華のオムシヤ（アイヌに恩恵を施し、制令を伝える支配的な儀式）を見学した。虻田場所は、往路は旧運上屋の会所に止宿したが、往路は詰合により、新会所が普請中であり、仮屋に泊まつた。有珠場所を通過し、絵鞆場所に入つた。往路は室蘭（陸地）經由をとり、そのまま幌別に向かつた。詰合御小人目付松田仁三郎により取建てられた番屋（通行屋）に止宿、帰路は半島經由で絵鞆会所に泊まり、船で白鳥淵（室蘭湾）を渡つた。幌別場所、白老場所の詰合は御普請役長嶋新左衛門で、帰路の白老の会所が整備中なのか、仮屋止宿となつていた。

勇払場所は幕府直轄時に支笏一五場所を纏めて一場所にしたところ、支笏の産物は勇払に集めて海路輸送され、古くから運上屋や蔵があつた。江戸品川より海路により厚岸湊についた幕吏の一人、御小人目付高橋次太夫が寛政一一年七月勇払越年を申し付けられ、翌一二年からの直捌運用のため、旧運上屋の会所転用を進めていた。測量日誌には幕吏の外に八王子千人頭原半左衛門の弟、原新介等五〇人、町医師月輪安済・同大同馬伊織が詰めていた。忠敬は会所に止宿したと思う。

日高路に入り、沙流場所の詰合は御徒目付比企市郎右衛門で、旧運上屋の焼失で往復とも仮屋に止宿（東行漫筆）、新冠場所の詰合は御普請役大竹弥兵衛で、往路は旧運上屋の会所に、復路は新築中の建物に止宿、壁のない家で夜は寒かつたという。次の静内は通過して、三石

場所に到着、詰合は御普請役元締宮本源治郎で、往路は飯屋に止宿、復路は運上屋を継ぎ建てた会所に泊まった。浦河場所ではムクチに会所があり、詰合は三石に同じ、往路は旧運上屋の会所に止宿、復路は会所脇に建てられた官員新宅に泊まった。様似場所の詰合は御普請役中村小市郎で、往復とも旧運上屋の会所三〇坪、草屋根、半分は昆布入れ場に泊まった（東行漫筆）。

幌泉場所は直轄時に油駒場所を統合したが、詰合は支配勘定佐藤茂兵衛で、旧運上屋は一八坪の小さなもので、桎梏根に葺き替え飯旅宿所としていて、往復ともこの建物に止宿した。同場所のサルル番屋は、広尾まで距離があり、松前藩時代から飯泊所が設けられていた。人馬継立がないため、旅人も人足も馬も泊まった。この宿で忠敬は八王子千人同心子弟三人（千人頭原半左衛門手付の者）と同宿した。

十勝場所は広尾に旧運上屋の会所があり、詰合は支配勘定格三浦善藏・御小人目付田口久治郎で、往路は旧運上屋の会所に止宿、復路は会所改修のため、飯屋に泊まった。同所ドウブイの飯屋（番屋）、同所大津内の飯屋（番屋）に往復とも止宿、人馬の継ぎ立てなく通し。

白糠場所は享和二年（一八〇二）に釧路場所に統合され廃止となった。この場所は八王子千人同心隊の本拠地となったところで、忠敬は直参旗本である千人頭原半左衛門を表敬訪問し、同心子弟（二男・三男）が宿に訪れ、自製の天球を忠敬に見せて大いに天文談義をしたと測量日記にもある。場所内の宿泊地は尺別では飯屋（番屋）に止宿し、白糠では往路が飯屋、復路が旧運上屋を改修した会所に泊まった。

釧路場所は寛政一一年（一七九九）の幕府直轄時から直捌等の準備のため官員が派遣されたところで、同年六月には支配勘定竹尾吉十郎・同菊池惣内が詰めており、一九日に官船政徳丸が着岸した時は、蝦夷地取締御用掛の大河内善兵衛も陸路到着していた（北夷談）。忠敬

は八月二四日に着き、桎梏きの旧運上屋が会所（六〇坪）に、宿泊施設もあった。別に通行屋もあり、詰合は竹尾に代わって普請役庵原久作が詰め、当日勘定番頭村田鉄太郎が来ているので、忠敬は通行屋に泊まったと思われる。帰路は会所の客殿に止宿した。同場所昆布森には往復番所に止宿、仙鳳跡の番屋に一泊して厚岸行きの船を待った。

厚岸場所は釧路場所同様幕府直轄直後から御勘定太田十右衛門・御普請役戸田又太夫・同心木津半之丞が詰めていて、忠敬が到着した二九日も同詰合であった。厚岸会所は古く、寛政一二年に止宿所（三六坪）を普請中であり、往復とも官員の飯屋に止宿した。八月二日ノコリベツ、三日アン子ベツの番屋に止宿し、根室行きの迎舟を待ったが来ず、七日に西別に到着したが、鮭漁の最盛期であり、根室詰合の御勘定大嶋栄次郎・御普請役井上辰之助・同村上治郎右衛門がここに来ていて、網曳きの最中であった。番屋に止宿し、忠敬は根室行きを強く望んだが、大嶋から鮭漁に人手をとられ、根室に行くことは出来ないで、ここから引き返すよう相談があり、根室は遠測にとどめることにし、九日に西別を去ったのである。

あとがき

伊能忠敬は寛政一二年六月五日から九月八日まで東蝦夷地を測量旅行したが、宿泊所となる会所・番屋・飯屋は粗末なもので、幌泉の山中で難儀し、御用提灯を持った出迎え人に出会い、「地獄に仏とも言うべし」と測量日記に記すほど大変な旅であった。

享和・文化年間に入り、幕府によりほとんど全部の会所・番屋（宿泊所）が整備され、東蝦夷地の旅行も便利になっていった。

（ほりえ としお・苫小牧駒澤大学非常勤講師）

伊能忠敬宛 高橋三平重賢書簡

文化五年一月二日

B〇五六

安藤 由紀子

(前略)

敬啟者
上納沙多安宅家御重賢
同貴家御重賢御書
上納沙多安宅家御重賢
上納沙多安宅家御重賢

二陽二年

二月二日

重賢

伊能忠敬由紀子

上納沙多安宅家御重賢
同貴家御重賢御書
上納沙多安宅家御重賢
上納沙多安宅家御重賢

敬啟者
上納沙多安宅家御重賢
同貴家御重賢御書
上納沙多安宅家御重賢
上納沙多安宅家御重賢

〔釈文〕

(前略)

改年之御慶、休期不可有

申納候 弥御安全被成御重歳

目出度奉存候 年始御祝儀

申上度、呈愚札候 尚期永日之時候

恐惶謹言

高橋三平

正月二日

重賢(花押)

伊能勘解由様

参人々御中

二白 旧年も彼是仕候て、御無音

殊ニ出足前御出被成候ニ、御返礼ニも

罷越不申、実ニ絶本懐候儀

何分御用捨可被下候 過年は

異国船一件ニて、右を道中ニて

承知仕候て、差急キ罷下り候処、

追々ニ参政御始メ、御目付衆迄

下向ニて、夫々御指揮等も御座候て

夫々御手配も御座候へ共、右ニ付

奉行共之内ニも、御役御免も

有之、扨々恐入候儀ニ御座候 右

エト口ノ乱妨等之節、間宮

林蔵儀は大キ骨折、同所ニて

一人と相聞申候 此節は私方ニ

罷在、絵図など相認罷在候

然ル処、東都より之御下知ニて

同人義もカラフト見分之儀

蒙仰、無程出足仕候積に

相決申候 不相替大丈夫ニ

根強ニ相勤、いかにも一チ人物に

御座候

扱貴兄ニも、何卒近年之内

御下り、地形御十分ニ御仕立

後世之鑑ト仕度事ニ御座候

其節は、林蔵なども貴下へ

為属、為相勤申度、余り

御無音仕候間、御様察親

旁、詫不申尽候 口書を以申上候

此節眼病、別て老早御用捨

可被下候 尚追々可申上候 以上

〔口語文〕

(前略)

新年のお喜び、早速申し納め上げます。

いよいよご無事にて御歳お重ねのことと、御めでたく存じます。年始の御祝申上げたく、この書簡差上げます。また後の機会にお便りいたします。恐惶謹言

高橋三平

正月二日

伊能勘解由様

重賢（花押）

皆々様

追伸 旧年も多事にてお便りもせず、殊に私江戸出立前お出でくださいましたのに、ご返礼にも伺わず、実に残念、お許しください。

昨年は異国船の事件を道中で知り、大急ぎで蝦夷地へ下りましたところ、御若年寄はじめ、御目付け方まで次々に蝦夷地にお出でになり、それぞれ御指揮・御手配なさり、こちらの松前奉行のなかには、異国船事件の責任により御役御免となる者もあり、さてさて恐れ入った次第です。

右エトロフにおける異国船乱暴のとき、間宮林蔵は大いに骨折り、あの現場では彼一人だったとのことです。今は私の宅におり、絵図など認めておりましたが、江戸よりの御下知あり、カラフト見分の仰せを蒙り、ほどなく出立のことに決まりました。

相変らず堂々として、しかも根気よく勤めており、いかにもひとかどの人物と思います。

さてあなたも、近い内お下りになり、地図御立派にお仕立て、後世の鑑となられるよう期待しております。その節には林蔵などもあなたに属させ、働かせたいものです。

あまりご無沙汰ゆえ、御機嫌伺いかたがたお詫びのしるしにお便り申上げました。この節眼病、早老のご容赦ください。なお追々お便りいたします。

以上

高橋重賢とは何者か

この手紙を書いた高橋三平重賢は、蝦夷地管理の専門家で、群を抜く能吏でもあった。

宝暦八年（一七五八）江戸生まれ。五〇俵三人扶持の御家人高橋家の部屋住みであったのに、四〇歳のときには、「勘定（一五〇表）」となり、二年後の寛政一一年、北辺の急展開に驚いた幕府が、松平忠明（書院番頭 四〇〇〇石高）を「蝦夷地取締御用掛」に任命し現地へ派遣したとき、その随員として蝦夷地勤務となった。同年間宮林蔵も、初めて蝦夷の地を踏んでいるし、翌年忠敬の蝦夷地測量も行われた。「御用掛」の下で重賢は、主に交易関係の仕事をしていたらしい。享和二年（一八〇二）、東蝦夷地が幕府直轄になると、函館奉行が新設され、彼はその吟味役（役料三〇〇俵）に抜擢されて、文化一一年まで一二年間在職した。この手紙は、その間に書かれたものである。

その後西之丸納戸頭、佐渡奉行と昇進し、五年間蝦夷地を留守にしたが、文政三年松前奉行（二〇〇〇石高・役料一五〇〇俵・一〇〇人扶持）として蝦夷地へ帰り咲き、二年後幕府直轄が終わりを告げるまでその職にあった。つまり二〇年にわたる幕府の蝦夷地直轄行政の中心にいた人物である。

「シヤナ事件」前史・ロシアの南下

書簡中「エトロフ乱妨等之節」とは、前年文化四年（一八〇七）に起こった、有名な「シヤナ事件」のことを指す。北海道から数えて二番目の島エトロフ島の中央部、オホーツク海に面したシヤナには、幕府の会所があつて、この年四月二十九日、ロシアの軍艦がここを襲撃し焼き払った。

千島列島をめぐる日露の衝突には長い前史があつて、林蔵の「間宮海峡」発見も、忠敬の「蝦夷地測量」も、この世界史の流れの中に置いて見なければ、その重さが分らない。

日本人は、北海道のアイヌを通じて古くから千島列島の存在は知っていたらしい。また日本船が関西から北上するとき、黒潮の本流に捕まってしまうと、千島列島に漂着する。長い間帰還者は無かつたらしく、延宝元年（一六七三）漂流者が帰った記録が初見である。

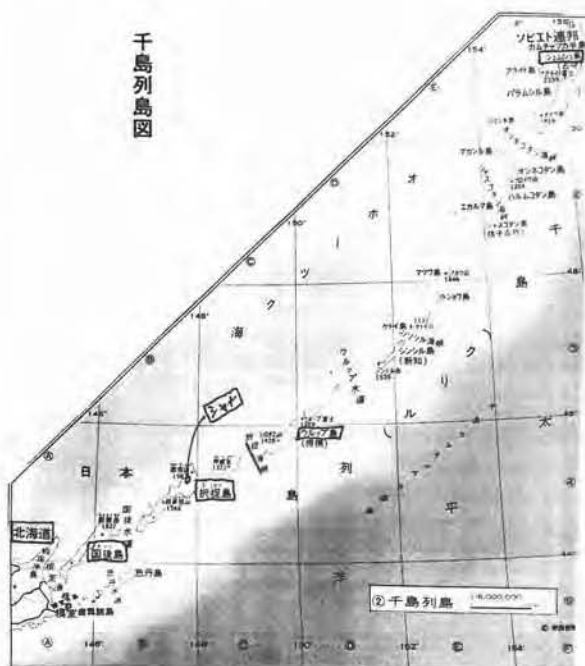
その割には千島への日本の関心は薄く、手を付けるのもロシアに比べて遅かつた。

一方不凍港を求めて南進をあせるロシアは、カムチャツカ半島から数えて第一島のシムシユ島を開拓したのが一七二一年、一七二〇年（享保五年）には、第五島シヤコタン島まで踏査している。一七三八年には待望の北海道に達し、さらに房総沖まで南下して日本列島の位置を確認している。

その後、エトロフまで南下してアイヌをロシア国籍にいたり、クナシリのアイヌを通じて北海道のキイタツプに來航して交易を求めたりして、積極的に進出を企てた。寛政四年（一七九二）には、ラクスマンがロシア政府の正式使節として北海道に來航し、貿易の開始を求めて断られ、後には全権大使レザノフも、長崎で半年待たされたあげく拒否されている。寛政六年（一七九四）、北海道から数えて三島めのウルツプ島に強固な植民地を建設し、領土を確定した。

日本の千島列島への進出は四十数年遅れ、第一島めのクナシリ島を確定したのみであつたから、第二島めのエトロフは両国領土権主張の紛争の島となり、寛政年間後半から文化年間には、暴力を伴う接触が

千島列島図



頻発するようになる。幕府は、追い詰められて、ようやく重い腰を上げた。

こうして、この書簡に関係する三人の人物が、蝦夷地に登場することになる。

重賢と林蔵と忠敬の接点

高橋重賢と間宮林蔵の最初の接点は、多分寛政一一年であろう。前に述べたように、三月、新任の「蝦夷地御用掛」松平忠明が蝦夷地へ出立したとき、その随行員の中に、下僚として重賢がおり、「普請役雇」の資格で参加した測量家村上島之允がいた。

さらに村上島之允の下にその従者として林蔵が付き従っていて、多分一行は、同じ船で渡海したと思われ、四月九日に松前に上陸している。

のちに蝦夷地行政の担い手となる重賢は、この書簡でも触れているように林蔵の「ひとかどの人物」ぶりに気付いたらしく、翌一二年に林蔵は「御用掛雇」に登用されている。彼は初め植林など開発の仕事を手がけ、その後測量を主務とするようになった。

同年伊能忠敬は、幕府から、はじめての測量として蝦夷地行きを許された（蝦夷地開発のためという幕府の思惑とはちがって、忠敬は、師高橋至時と諮って、なるべく遠くまで出向いて、緯度一度の距離を確定したかったのではあるが）。

林蔵は、函館で忠敬に出会って、より正確な測量術を教えられた。忠敬の「測量日記」は、このことに触れていないが、一年後に、蝦夷地測量の完成を期待して林蔵に与えた忠敬の送辞から、この出会いのとき、二人は師弟関係を結んだと考えられている。

同様に日記には記されていないが、忠敬は往路・復路とも函館御役所へ度々出向いているので、重賢とはこのとき知り合い、お互いの人柄を認め合ったことと思われる。七年後、この手紙が書かれた前年の文化四年、重賢は報告のため江戸滞在中で、四月一九日伊能忠敬は（「江戸日記」による）、高橋景保とともに重賢宅を訪れている。書簡中の「出足前御出被成候二、御返礼二も罷越不申、実二絶本懐候儀、何分御用捨可被下候」は、返礼訪問が出来なかった事に対する詫びである。

こうしてこの三人は、追い詰められた幕府のおかげで、寛政一一、一二年に最初の接点を持ったのである。忠敬五六歳、重賢四三歳、林

蔵二六歳であった。

シヤナ事件・林蔵の奮闘

七年後、有名なロシアのエトロフ島襲撃事件が起こった。この手紙では「旧年」と述べている文化四年の四月二十七日、シヤナの港に二隻のロシア軍艦が現れ、大筒を打ち掛けてきた。

日露貿易を急務とする露米会社に属する、現役の海軍大尉フヴォストフらは、今までの経緯から見ても、日本開国には武力による脅迫しか策が無いと考え、本国に無断でこの挙にでたのである。

会所の責任者、函館奉行下役の戸田又太夫らは恐怖に駆られ、南部・津軽両藩の警備兵二三〇名がいたにもかかわらず、打って出る事をせず、箴城の上、近付いたら反撃することを選んだ。

間宮林蔵は、測量御用でこの現場に居合わせ、雇医師久保田見達とともに最初から箴城に反対で「この儀、御老中に申上げる」と叫んで走りまわっていたという。

ロシアの軍力は格段に優勢だった。近付いたロシア兵に大筒を撃ち掛けようにも、弾が見つからぬありさまで、戸田らの判断で、会所を放棄し裏山へ逃げ、南のフウレベツまで退却する事になった。

ここに至っては切り死しようとも打って出るべしと主張する林蔵は、この決定に大いに憤激し「自分もこの相談にあずかって立ち退いたと知れば大事。相談に乗らなかつたという証文が欲しい」といきまいたという。書簡ではこの経過を「間宮林蔵儀は大キ骨折、同所二一人と相聞申候」と伝えている。

落ちのびて行く途中、会所の責任者戸田又太夫は、喉を突いて自害した。彼の墓は、今も現地にあるらしい。一行がフウレベツについた

のは、五月二日朝のことであった。そしてロシア兵は、会所の調度や蔵の物品を奪い、すべて焼き払って立ち去った。

幕府は事態の急迫に驚き、若年寄堀田正敦（天文方上司）が、直々に蝦夷地を巡視することになって、七月二六日蝦夷地についた。「追々ニ参政御始メ、御目付衆迄下向ニテ、夫々御指揮等も御座候て」とこの書簡は書いている。

当事者は、それぞれに処分を受けた。函館奉行羽太正養以下、会所役人の罷免はもとより、南部・津軽の藩兵も国元へ送られて処分された。林蔵一人、「証文」を欲しがったという証言のおかげで「お咎めなし」となった。彼は「いかにも一チ人物に御座候」と重賢に書かせるような意志堅固な、アクの強い人であった。

処分どころか、林蔵は、この書簡に書かれている通り「東都より之御下知ニテ、同人義もカラフト見分之儀 蒙仰、無程出足仕候積に相決」したのであった。

「間宮海峡」の発見につながる、このカラフト行きに林蔵を推薦したのは、書簡の書き手高橋重賢か、江戸の天文方主席高橋景保か、伊能忠敬か等の諸説があるが、重賢であるという説が最も妥当と思われる。

この書簡によれば、文化五年一月二日現在、林蔵は松前奉行吟味役高橋重賢の居宅にいて、絵図を製作中のようなのだが、この絵図は、エトロフ島のもであったことは確実で、今内閣文庫に所蔵されている「エトロフ島大概図」がそれに当たる。退却の途中も測量の資料は肌身はなさず持っていたものとみえる。

この書簡が書かれた文化五年一月には、重賢五一歳、林蔵三四歳、忠敬六四歳。忠敬はこの月二五日に第六次の四国測量に出立している。

出立直前にこの遠方からの手紙は、はたして届いていたであろうか。
(あんどろ うきこ・元国会図書館憲政史料室)

参考文献

- 洞富雄著 『間宮林蔵』 吉川弘文館
吉村昭著 『間宮林蔵』 講談社文庫
小川恭一編 『寛政譜以降旗本家百科事典』

アメリカ伊能大図里帰りフロア展入場者数一覧

	会 場	入場者	開催日	平均
1	神戸市立博物館	25,466	32	796
2	仙台市科学館	7,054	7	1,008
3	仙台市博物館	30,454	40	761
4	釧路市観光国際交流センター	22,739	4	5,685
5	札幌市中央体育館	4,581	3	1,560
6	帯広市十勝プラザ	3,223	3	1,074
7	熱海市MOA美術館	38,235	34	1,125
8	松山市コミュニティセンター	3,556	5	711
9	広島県立美術館	1,880	6	313
10	ナゴヤドーム		10/30～	31
11	徳川美術館		11/02～	07
12	武蔵大学		11/09～	15
13	新潟県立自然科学館		11/19～	23
14	福岡市立少年科学文化会館		11/26～	28
15	日本大学文理学部		12/04～	23
16	幕張メッセイベントホール		01/22～	23

二つの家訓

伊藤 栄子

伊能家には家訓といえるものが二つある。一つは寛政三年、忠敬が家業を息子の景敬に譲る時に書かれたもので、当主としての心構えを説き、人間関係を大切にしたい忠敬の心遣いが伝わってくる。その後、最近になって、世田谷の伊能家の資料の中から、もう一つの家訓ともわれる文書が見つかった。それは忠敬が文化八年十一月、九州第二次測量出立直前に記したものである。これには教訓と譲り金の配分について書かれている。

江戸時代商家の間で、家訓が一般化するようになったのは、享保期ころからで、大店の家訓は、家の存続のため、経営や管理等を、細かに規定したものも多いといわれる。その後一般の商家でも家訓に准ずるものが作られたらしい。元来これは、他人に見せるものではなく、その家に伝えられるもので、外部の人が目にすることは少ない。それどころか、中には他見を許さない定め書もあるという。

伊能家の家訓をこうして私共が知ることになったのは、忠敬が現代になって世の脚光を浴び、はからずも伊能家文書が公開されたからであり、普通の文書より更に忠敬の思考がよく分るのではなからうか。

この家訓では、日頃金融業、質屋等も手がけてきた忠敬が、子孫への教訓として、資産の運営にまで言及したものである。九州第二次測量出發時に、66才という年齢と、多難であろう前途を思い書かれたとすれば、この家訓からは、遺書の含みも感じ取ることができる。

才一 假令偽言に孝弟忠信とて
正直なるべし
才二 弟のふくむ海下の人
も教訓を自守し、名度
相用せしむるべし
才三 敬証を以て後を退せ
寛裕に治事し、敬を以て
争端を成べし
亥九月廿一日

第一の家訓 (解説文)

*読み易くするため濁点をつけた。

- 一、仮にも偽をせず、孝弟忠信ニして、正直たるべし。
 - 一、身の上の人ハ勿論、身下の人にてても教訓異見あらバ、急度
(屹度) 相用 (もちい) 堅く守るべし。
 - 一、篤敬、謙讓もて言語進退を寛裕ニ、諸事謙り (へりくだり)
敬ミ (つつしみ) 少も人と爭論など成べからず。
- (寛政三年) 亥九月廿一日

(口語文)

- 一、かりにも、人に対し嘘、いつわりをせず、親には孝行、兄弟仲よく、正直であること。
- 一、目上の人はいうまでもなく、目下の人意見もよく聞いて、納得のいく考えは、取り入れること。
- 一、篤く敬まう心、謙讓を以って、言葉や行いをつつしみ、決して人と争い等してはいけない。

ここでは、跡を継ぐ者の身の律し方、人に対する心がまえを主に説くという事に終始している。この時点では、まだ資産や商売については書かれていない。家の事業にかかわるまえに、自分がどう有るべきかを説いているのは、いかにも忠敬らしい。たしかにこの三ヶ条を守れば、人との関係はうまくいくに違いない。文言は、簡潔にして明瞭であり、伊能家に限らず世間一般にも通用する内容である。

第二の家訓 (解説文)

- 一、孝ハ仁義の根元ニ候 親の言ニ順 (したがひ) 家事を治、子孫長久を心がけ候儀
- 第一二候 兎角質素ニ行々商売を相休、貸金等も地頭、村貸ハ相止候様可被成候 此度妙薰、おりてへ申含置候間、我等と被心得諸事相談可有之候

*忠敬は自分のことを我等という。

- 一、我等方より其許へ年々ニ預ケ置候金子猶又此度も相渡し候金子共、年々ニ七月と極月ニ利足、妙薰、おりてへ相渡し立会封金ニ可致置候 尤儲成質地、借付方も候ハバ右兩人篤と承知の上、貸付元利返済次第封金ニ可致候

- 一、此迄本家へ預ケ置候金八百両の事、兼て其許取添被成置候屋敷地面、御配当被成候地所、猶又金高二十分相当候様相改、兩人へ承知為致、高帳も御仕分置可被成候 則当家長久の用意ニ候余ハ兩人へ申含置候

*読みやすくするため江はへ、かなは濁点をつけた。

文化八末年十一月

伊能勘解由 印

伊能三郎右衛門

第二の家訓 (口語文)

一、孝は人の道徳の元である。親の言葉に従い家を治め、子孫繁栄を第一に心がける事。生活は質素にして、将来は諸商売も休み、貸し金等は、地頭、村貸しは止めるように。この度は妙薫、おりてへ申し伝えて置いたから、私と思つて二人に相談すること。

一、私から、そちらへ毎年預けて置いたお金、また今度も渡したお金と共に、毎年七月と十二月には、利足を妙薫とおりてへ渡し、三人立会いの上で封印しておくこと。もつとも、確実な質地や、金の貸し付け方があつたら、妙薫、おりて二人共よく承知した上なら貸し付け、元利とも返済されたら、封金にすること。

一、これ迄本家へ預けておいた八百両のこと。又そちらで一緒に持つていた屋敷の地面、割り当てた地所、これらを金高に十分見合うよう改め、二人の了解を得て持高書き上げ帳に記入すること。これは、家の長い将来のための用意である。その他のことは、二人に十分伝えてある。

これを読んでみると、長男の三郎右衛門は忠敬にとつて、頼りなかつたのか、しっかり者の娘と嫁を、毎度立ち会わせている。この文に

は忠敬の本音が見え、家の内情がよくわかる。

以上の他に、別紙譲り金の内訳がこの表である。

譲 金

一、金五百両	伊能三治郎	(忠敬孫で長男)
一、金三百両	同鑑之助	(同 次男)
一、金五拾兩	再金百兩	(忠敬 長女)
其 二 余 も		
一、金三拾兩	桜井秀藏	(忠敬庶子で二男)
一、金三拾兩	おこと	(忠敬 三女)
一、金三拾兩	神保氏	(忠敬実家)
一、金三拾兩	飯高吉太郎	(粟生村名主、網元)
一、金拾兩	中村表	(平山家在所)
一、金拾兩	中村東	(忠敬の姑タミの実家)
一、金三拾兩	久保木太郎右衛門	(忠敬の漢学の師)
一、金五拾兩	大川治兵衛	(忠敬の財務顧問)
一、金五拾兩	牧野 観福寺	(伊能家菩提寺)
一、金拾五兩	本宿組由緒百姓	

右之通二候

文化八未十一月

伊能三郎右衛門

伊能勘解由 印

妙薫

おりて

江戸時代は原則として、土地の永代売買は禁止されていた。寛永二十年頃から質地として売られるようになった。これは土地を借金の抵当に入れることは禁止されていなかったもので、この抵当に入れられた土地が質地である。実際は質地が質流れになると、土地の売買につながるようになる。こうして江戸の後期には、次第に土地の売買が行われるようになった。伊能家は質屋業も営んでいた関係上、どのような質地を見究めねばならない。それが忠敬のことばとして、慥かなる質地と表現されている。質屋というのは、庶民が日常生活に必要な費用を、いつでも入手することが出来る手段で、便利なものとして利用された。それだけに、質物に対する目ききは必要である。江戸も後期から幕末にかけて、特に名主の地位にある者が質屋、金融業を営むことが多くなっていた。名主は村役人としての信用もある。余談であるが当時質屋は、泣く子もまだまるといわれた関東取締出役の管轄下にあった。質屋の質種が盗品や犯罪に関係することがあったため、文化二年にできたこの取締り出役は忠敬先生も当然ご存じだった筈である。

ここでは、第一の家訓をふまえた上で、第二の家訓を記したのである。お金のことについて細かに述べている。家業を守り資産を子孫へ伝えていくためには家訓は必要であった。もともとは大名、武家の家に伝わったという家訓も次第に商家の間にも広まっていた。

ここでは両替屋を営む鴻池家の家訓を参考に読んでいて、たまたま伊能家の家訓との共通点を見たので要点のみを抜き書きしてみた。この他鴻池家の家訓には奉公人に対する箇条等、かなりの項目があった。

- 一、本家を中心とした結束で、分家別家は協力する。
- 二、新規の大名貸し（忠敬の場合地頭、村貸）の禁止。

- 三、質素、儉約のすすめ。
- 四、重要なことは合議して決定する。

佐原の観福寺にある伊能家の墓所には、本家をはじめ伊能七家の墓がまとまって並んでいる。伊能家がこの地に根を下してから、これらの家々が協力して支えあってきたという印象をうけた。七家という歴史を辿ったかは別として、少くとも忠敬が未亡人ミチの夫として選ばれ、本家を囲む六家の眼鏡に叶ったことは、彼らの合議は評価されるべきものであった。何か問題があると一族が集って相談をする。西洋の諺に「一つの頭より三つの頭」という言葉がある。これは先祖からの知恵であろう。問題があれば、合議して解決されてきたのではなからうか。そこで家訓の中には明文化されていない合議が、しきたりとして生きているので敢えて入れた。

忠敬は伊能家の業務や資産の運用等は、最も信頼している大川治兵衛に相談していた。また家業として酒造、米穀も商っていた。米については先ず大坂の状況を見てみよう。

大坂がもともと上方の台所といわれた京都を越して、関西の台所となったのには海運の発達があった。西廻り海運の発達によって便利になり、各藩は競って大坂に蔵屋敷を建てた。蔵屋敷は物産の倉庫であり国元の諸産物が集められ、各藩の出張所としての機能もあった。諸藩は農民から取りたてた年貢米の多くを、ここで換金して貨幣支出に当てていたのである。

大名ばかりでなく、公家、官家、高禄の幕臣達も年貢米を売り捌くために、大坂に邸宅を置いた。こうした米の集散によって大坂は非常に賑わった。忠敬の文書の中にも大坂の米相場を気にかけている文が

ある。当時米相場は大坂を基準にして動いていた。米を商うにも大坂の米相場をにらみながら、仕入れ、出荷の時期をきめることが利潤につながる。米だけでなく諸国の物産は勿論、東北、蝦夷地の海産物までも集められ、大坂から各地へ送られた。商業が栄えれば、当然金融面も活発となる。これを担ったのが豪商の営む両替屋であった。

大坂では、「始末」「才覚」「算用」を重んずるような気風は享保以前からで、この考え方は西鶴の「日本永代蔵」にも度々出てくる。これは大坂に限らず、京都でもこうした風習はあった。いっぽう同時代の江戸では、宵越しの金を持たないのは職人達ばかりでなく、巨万の富を一代で築いた紀伊国屋文左衛門や富豪といわれた奈良屋茂左衛門のように、財産を使い果して消えてしまった商人達もいた。そのためか、関東では名家も三代続くのはむずかしいといわれてきた。従って江戸を中心とした関東では、家訓を作り守る家は少なかったといわれる。しかし私が各地の文書を見て、家訓とまでいかなかったも、遺書として家長が末期に残したものが、子孫への教訓として代々伝えられたものもあり、これらが家を守っていく柱となっていた例もある。

ここで関東の伊能家で上記の家訓が見られることは、忠敬の風習にとらわれず、良い事は取り入れるという合理性によるものである。

伊能忠敬は幼い時から苦勞して勉学に励んできた。しかも伊能家へ入夫してからは、先祖代々の残した書付けが蔵の中にあるのを読み、それに基づいて家業を取り仕切った。忠敬は幼少から逆境にあつても、利発で覚えも早く師に愛された人である。しかし孫は整った環境の中で勉強させようとしても、塾をとび出してしまふ。何とも世の中思う様にならないものである。

忠敬が第八次遠測量中、対馬国から長女の稲に出した手紙に「自分

は親の言う通り佐原へ養子に來たので、好きな文学も止め家業を第一にして、伊能家の先祖の格言を守り、遺命の通り救民をも助けた」と記されている。忠敬は先祖が今まで通ってきた道を知り歩んできたので、ひたすら家訓と家業を忠実に守ってきたことになる。

(いとう えいこ・古文書研究家)

参考文献

- * 江戸時代生活文化総覧 新人物往来社
- * 国史大辞典 吉川弘文館
- * 新説 伊能忠敬 佐久間達夫著
- * 歴史読本(商家の家訓と町人文化) 作道洋太郎 新人物往来社



名古屋ドームに

大図広がる

10月31日

つい二週間前には中日ドラゴンズが50年ぶりの日本一をめざして頑張ったのはここ名古屋ドーム。余韻漂うグラウンドには外野右中間に214枚の大図が並んだ。おおぜいのみなさんが人工芝の上に平成の大地図をのぞく。芝や地図に触れ、色彩、地名など十分に楽しんだ。(写真 伊能洋氏)

特集 4 忠敬を楽しむ

堀田佐野藩資料展

柏木 隆雄

八月下旬、三十五度を超える猛暑の中、栃木県佐野市を訪ね、郷土博物館で開催している「堀田佐野藩資料展」を観た。佐野藩主だった堀田正敦、堀田正衡の資料展である。

その前日、堀田攝津守正敦に関する資料調査で、佐野市立図書館に電話を入れたところ、遇々、この資料展が開催されていることを知った。目下、正敦に関心を寄せている私にとって希ってもない催しであり、直ちに佐野行となった。

伊能図の測量から完成まで、幕閣での統括責任者は堀田攝津守正敦。正敦は老中松平定信の寛政の改革にたずさわり、幕閣では、若年寄を四十二年間勤めた。毀誉褒貶の堀田一族に在って、人格高尚、謹厳実直。行政、文化等多岐に亘って才能を発揮し、再興後の堀田家を隆盛に導いた人物である。

私は、忠敬の生涯で、第一の幸運は、高橋至時の門に入り、この堀田攝津守正敦を知り、その庇護を受けたことだと思っている。

佐野市郷土博物館は「原始から近代へ」の展示テーマのごとく、旧石器時代の石器、遺物から、地元商業の織物の歴史、ひな人形や羽子板など、際物の匠の作品などが、広い館内に見易く展示されている。佐野の歴史に限らず、幕末から維新前後の、桜田門外の変図やペリー来航の図、横浜風景などの資料もあつてなかなかの内容である。

堀田家資料展は特別企画展で、別室では、足尾銅山の田中正造展が

開催されていた。

館内では、学芸員の青村氏の案内を得た。展示の流れに従ってその内容を記す。

一、堀田佐野藩の成立

堀田家は本姓を紀氏といい、紀氏の始祖は武内宿禰であるとする「家譜実記」とその武内宿禰の肖像軸

二、近江堅田へ

堀田系図（堀田佐野藩、天保十四年まで）

御法令（写）堀田大和守宣旨

堀田家領地目録（堅田藩一万石）

三、再び佐野へ

堀田正富御実名命名書

堀田正敦公画像

従五位下位記（天明七年）

寛政重修諸家譜

堀田家系譜（堀田攝津守・寛政十一年）

* 諸家譜編集のため、正敦が幕府に提出した堀田家系譜の控

四、幕末から維新へ

堀田家系譜（堀田攝津守正頌・慶応元年）

麻布広尾の江戸下屋敷図

戊辰戦争三国峠戦場図と佐野藩への感謝状

五、藩主の学芸

正敦公「年中行事歌合せ」

正敦・正衡筆「長歌並に短歌」

正敦筆「水月詠藻集」

千宗左作居跡地圖・宋旦書

「茶人系図」松嵐亭記

正高「茶杓」正敦「水月」正衡「御錢台」等の茶道具類

正敦作「花筒」千しま 水月銘で箱書き

*正敦は文化四年（一八〇六）蝦夷地にロシア船が来航したこと
から、幕府より松前に派遣され、その検分を、松前紀行（蝦夷
日記）に書き残している。その時に持ち帰った「ニキョウ」の
木を材料にしてこの花筒を作った。

以上、展示物とその内容の主なものを挙げた。

地元では「鳥の殿さま」と呼ばれて親しまれた堀田攝津守正敦。そ
の編著となる鳥類図鑑「禽譜」は、内容もさることながら描かれた鳥
禽類の色彩も見事なもので、正敦の自然科学分野での造詣の深さが察
しられる。

忠敬の日本図が、西へ向うほど色彩豊かに段々と美しさを増してい
ったことにも一脈通じているように思われる。

博物館を後にしようとしたとき、辺りを睥睨している大層な鬼瓦の
展示に気づいた。しっかりと抱かれていた家紋は、堀田家の「立木瓜」。
旧栃木県庁々舎の鬼瓦がそこに在った。

（かしわぎ たかお・柏木幸七子孫、作詞家）

忠敬さんの鼻メガネ 河島悦子

文化九年三月五日、鹿兒島より

妙薫 リテへ

十二月十七日、正月四日、十三日出御文、

一同に薩州鹿兒島相届、披見致候、弥御家内御揃機嫌能御暮被成目出
度存じ参らせ候。

我等一同無事に三月二日鹿兒島城下江着致候、御安意可給候、出立
ノ節失念取落候七寸の曲尺、鼻江かけ候メガネ、衣装目録等手紙御添、
浅草江御頼被遣候所、高橋氏より早速御勘定所江御差出、夫より東海
道大津御郡代江御頼之所、我等共甲州測量之節故測量先不明分候と而
御勘定所江相届し、又々御勘定所より大津御郡代江相渡り、正月二十
五日豊前国小倉城下宿繼二而相届申候、延引ながらも御威光二而無滞
相届致、御安意可給候。

鹿兒島県資料集 十卷より

※八年十一月二十五日江戸出立

三回分の出されたお手紙、一緒に鹿兒島で受け取りました。御家内
揃つてご機嫌よく暮らしていただける由、めでたく存じ上げます。

我等一同、無事に三月二日鹿兒島城下に着きました、ご安心くださ
い。出立の節失念、取り落とした七寸の曲尺、鼻にかけるメガネ（老
眼鏡）、衣装目録等、手紙を添え浅草へお頼みになったところ、早速、
御勘定所へ差し出され、それより東海道大津御郡代へ依頼、その頃我々
は甲州測量中ゆえ、測量先不明とて江戸御勘定所に送り返し、又々御

勘定所より大津郡代に差し戻され、正月二十五日豊前小倉城下へ宿継ぎにて届きました。日数はかかりましたが、幕府の御威光にて滞りなく受け取りました、どうぞご安心ください。

江戸を十一月二十五日に出発した九州第二次測量隊一行は二日後の二十七日藤沢宿を出ると、間もなく大山道にそれ、赤羽根より甲斐をめざし、身延山経由で東海道、興津宿に出たのは十二月十七日だった。

江戸を出て二十一日経っている、その間に、メガネは京都の三里手前の近江大津に行き、又、江戸を目指して東上中であつた。

京都、江戸間は一日十里歩いて、十二泊十三日、机上計算では、興津を十三、四日頃通過したと思われる。持ち主に合えなかつたメガネは江戸に戻り、二十二日付けの付箋をつけられ、また東海道を大津に向う。

*旧冬二十二日認めの御用状届く。測量日記九州二次。

一方、忠敬先生は十二月二十九日、草津を立ち伏見に行く途中で大津を通過、中国路を九州に向かう旨を郡代には告げたと思う。

宿継ぎ（リレー方式で一宿毎にバトンタッチ）で九州小倉まで三十三日かかっているが、正月をどこかで泊まっていたのではないかと思われる。筑前侯が参勤東上時の日数が、福岡―中国路―東海道で平均三十三日、幕府御用箱の宿継ぎは一晚過ごす土地で不寝番をつける定まりがあり、それを嫌って大急ぎで先宿にリレーする、だから思ったよりも早いという。東海道を上下三度走ったメガネは、十一月以来丁度二ヶ月目に持ち主に巡り合えた。ところが忠敬先生、受け取った知らせを小倉では出してない。豊前・筑前にも大阪まで、月三度の定期飛脚便はあつたのに、出し忘れたのだろうか。

妙薫、りてさんの手紙は、最終便一月十三日、差出し日より数えて

九十八日後に宛先人の手に渡っている。

三月五日発信した冒頭の手紙、鹿児島から江戸まで何日を要したか知りたいものだ。

まだその当時の日本は、刻がゆるやかに流れていたことを感じる。分秒刻みの現代で、あわただしく生きている我々ではあるが、最近私のオツムのみがゆつくりと刻をきざみ、忘れることも多くなった。辛く悲しいことを忘れるのは良いが、大切なことまで失念する始末。非常に優れた頭脳の持ち主でもあつた忠敬先生でも年齢には勝てないのかメガネ、重要書類を忘れることもあつたのだと、やゝ安心した。

（かわしま えつこ・歴史街道を歩く会代表）



会員御縁で二つの話題

川上 清

清水建宇さんの幅広いご活躍に期待！

私は朝日新聞夕刊の「憲 論説委員会から」には比較的良く目を通す方だと思ふ。8月5日「研究費」の題に興味を感じた。我が国の代表的な科学者が政府の研究補助費を受けながら基礎研究を進め、独創的な研究が支えられる。23年前の福井謙一さんがノーベル賞を受けたときの受賞理由がその30年前に交付研究リストとそのまま符合していたことを文部省の調査で確認されたエピソードまで触れ説明した。

その研究費が年度代わりに新年度の支給が6月に伸びて、その間の工面に苦勞しているという。大学や研究者自らが金融機関から借金でつなぐのを、政府がつなぎ融資すべきとのご意見にまとめられた。これは確かに使い勝手がよくないし、研究費総計が1380億円もの大額なのも原因であると思う。科学者への細かい心遣いがあつた。

署名に清水建宇とあり、我が清水さんだった。今は論説委員であることに初めて気がついた。念の為半月ほど手元の夕刊を遡ってみたら7月20日に「13才の美空ひばり」があつた、生きていれば67才と締められたが、丁度同年代の者には懐かしく育った時代を蘇らせた。清水さんの執筆に気づくのが遅かつたかも知れない。だがそれ以前は処分済みで探しようが無かつた。だがこれからの夕刊が楽しみでウォークの話題も出ようか。

西川治先生所蔵の貴重な地図類に新たな感動！

今年の7月に西川治先生からお手紙を受けた。西川先生とは研究会

の席でお話を伺うのを楽しみにしている一人であるが、書中には先生の近況と国土地理院で開かれる「世界の広がり」と日本の「かたち」―地図の開く世界像と日本観―の4頁パンフレットが封入されていた。展示資料一覧を見ると西川先生所蔵の品々のように見受けられた。諸事を整理し、期限一杯につくばの国土地理院を訪れ入館して驚いた。大きな展示室の大半が西川先生ご提供だった。空いた室に専門家らしい姿があるだけだったので二度回つてゆっくり鑑賞できた。マテオ・リツチの「坤輿万国地図」は大きな一枚だったが、ここを外したら見ることでできない品に興奮した。大きな絵皿や花瓶に江戸時代と思われる国名を色彩別に表現された焼き物にもびつくりした。世界の古図に我が国の赤水図、伊能図、泉石図、景保図等々が光彩を放っていたのである。入場無料には勿体ない逸品揃いだった。

おれに含めて感想を送つたところ先生からは一項目毎に丁寧な解説がされて二度目の驚きとなつた。地図皿は特別骨董市で取得とか、初展示の絶品だった。会場展示の中に見られた西川如見は血筋は違うようでも同じ学祖と言われた。今までも先生の学会抄録に接する機会を頂いていたが、今回も先年の日本ウオーキング学会での講演「歩く地誌、郷土を拓く愛地学」が同封されていた。人文地理学大家の先生が今もって学究とともにウオーキングを結びつけた解説をされ、歩いての若さを感じ、多くのお教えに感謝の念一杯である。

赤水のふるさとで赤浜音楽祭をたんのう！

我が国に「赤浜」の地名は他にあるのだろうか。私には長久保赤水と切り離せない独特の響きを持つ地名であり、それは茨城県高萩市地内に他ならない。今の集落も陸前浜街道上にある。先がすぐ海岸でそ

の赤浜海岸は北野武監督「HANABI」のラストシーンを撮った美しい砂浜である。ここに地理学者長久保赤水の菩提寺日蓮宗願成寺がある。

長久保本家に片雲さんという歴史家がおられ、水戸藩、長久保赤水、松村任三、野口雨情他の執筆には高い評価が寄せられている。そのご長男に徹氏がいる。学習塾を営む一方プロ的才能の音楽に情熱を注いでいる。地域と熟と音楽がドッキングして昨年真夏に潮騒が聞え松風を受け松ぼっくりの転がる願成寺の庭園で野外の第一回赤浜音楽祭が行われ、集まった聴衆を満足させた。

今年の8月1日はその第二回、規模も成長してプログラムは河と5時間連続という濃い内容に、観客も地元や隣の日立市、北茨城市に及びぐんと増えた。ロック、ジャズ、オカリナ演奏、N響団友の古典曲と、実に多彩。徹氏がかつて東京渋谷で音楽修行したときの、今は中央で我が国の代表的存在になった楽師が積極的に参加支援したのと、音響器を大事にしたことから、午後3時のオーブンから熟のこもった音楽祭となった。周囲の明るさが薄暮、漆黒と変わり、波頭が碎け続けてもムードを変えつつプログラムは進んだ。主催者はビールを飲みながらと声掛けるので、クラシック曲にも気楽なムードが漂い、遅くなるに従い観客は演じられる音の共演に酔った。圧巻は主題の徹氏作詩作曲の「故郷」(ふるさと)。一度耳にすると忘れられないリズム感が耳に残り、作意を感じながら歌える曲だった。蛍が放たれて8時過ぎに借しまれながら終演となった。見上げると赤浜の空に大きな月があった。

(平成16年8月11日)

(かわかみ きよし・水戸市、JWA役員)

忠敬の歩いた道を高山に辿る 加藤 忠三

伊能忠敬の下絵図

伊能忠敬が作成した伊能図といわれるものは大図とか小図とか言われる色の付いた完成図である。これ以外にもこの図面を作る元になった下絵図というのが残されている。これらは彼ら測量隊が測量したデータを基にそのつど現地で作成した図面がある。

インターネットを検索すると伊能忠敬の「測量日記」の紹介の中で、挿入図としてこの下絵図がいくつか見ることができる。この中に飛騨高山のものがあり、その一部が左の図である。



わかりやすいように一部原図をなぞってみた。各箇所にはひげのようなものが出ていますが、これが測量したポイントである。この図面は、はなはだ心許ないものだが現在の最先端の技術で作られた国土地理院の1/25000地形図に重ね合わせるとぴつたりと合うので、彼らの技術が非常に高かったことがわかる。

下絵図には代表的な公共の建物、神社仏閣、町村界、山の名などが記入されている。この図にも御郡代(③高山陣屋跡)国分寺(④)、堺・高山町、七日市村など様々な字が読みとれる。これから当時の役所の名前、村界の位置などを調べることが出来る。また現在の地図と照らしてその当時の道路がどのようなになっていたかを正確に知ることが出来る。

下絵図を片手に

一昨年の六月はじめ飛騨高山に観光旅行をした。このとき伊能忠敬の作った下絵図と、国土地理院発行の1/25000地形図を持って図面の①の高山別院から④の国分寺まで歩いてみた。

伊能忠敬一行がこの地の測量を行ったのは旧暦の文化十一年(一八一四)四月一六日である。これを現在の暦では私が訪れた六月のはじめ頃に当たる。この日は六月だというのに晴天で真夏日。かんかん照りの中、地図の①に当たる高山別院から歩き始めた。

伊能忠敬の測量方法を再現して見よう。まず高山別院山門で出発点となる基準点を定める。旗竿の先に目印の房をつけた梵天というものを次のポイントに立てる。下絵図で見ると山門の前の道を南に行つてT字路の突きあたりに梵天を立てる。そして山門の基準点から最初の梵天の方位と、そこまでの距離を測る。このデータを野帳と言う帳面

に「巳1000、245間」と記入する。これは方位160度、距離245間ということである。次に最初の梵天の位置まで移動して、ここを右に折れてここから現在、最初の信号機のある場所にある第二の梵天の方位、第一梵天と第二梵天間の距離を測り、野帳に記入する。このようにして、次に測量するポイントを定めそこに立てた梵天を測量して行くのである。

第三の梵天は信号機の四つ角から上一之町を通り高山駅に通ずる変則の四叉路となる場所になる。この道から左に折れる道は下絵図では直線道路なのに、梵天を幾つも立てて測量している。なぜだろうと考えながら行くと、そこは坂道であつた。地図は真上から見た長さを表すので、斜面では三角形の底辺を表示することになる。したがって坂道をそのまま地図上の長さにとすると、誤差が生じてしまう。このような時は、三角形の斜面の長さ(坂道の長さ)、角度、高さを求める。また長い斜面では一区間をいくつかに分けて測量をする。これらの値から三角関数表を使って底辺の長さを出しこれによって地図上の距離を算出したのである。

坂道を上つたところの四つ角から正面の山裾にお寺の屋根が見える。この四つ角を右に折れる。この道を行くと小さな山につき当たり、此を城山といい、高山城があつたところである。その麓に池に囲まれた護国神社がある。池に囲まれた門前は緑の木々に覆われ夏の風情を振りまいている。ここを左に折れて進むと江名川という川に当たる。ここにかかる橋を渡つてすぐに右手に折れ、下絵図にはない道を歩く。この辺までくると観光地高山の町ではなく、どこにでもある田舎道で、周囲の雰囲気は生活臭の漂う、落ち着いた家がある家がある。しばらく道を進むと右手にこんもりとした森が見えてくる。1/25000地

形図では鳥居の記号で表されている神社である。下絵図には荏名神社となっている。道を右に折れてしばらく進むと左側に小高い丘に向かって石段が延び、鳥居の向こうに神社が見える。案内板に荏名神社とある。鳥居のある中段からは江名川を挟んで向かい側の城山の尾根が見渡せる。見晴らしの良いこの場所から伊能忠敬一行は峰の方位を測ったのだろうか。

ここから下絵図にある道をたどりながら元の場所まで戻る。この道は江名川が浸食で切り取った谷の東側の斜面にそって水平に通っている。1/25000地形図を見ると川から離れた等高線の位置に沿って山の裾をぐねぐねした道が続いている。川が大水であふれても安全な高台の道は、古い道に見られる特徴であり、土木技術のお粗末であった時代の知恵をみることができる。下絵図では細かくいくつものポイントを採りながら描き出されている。途中看板に「あだち坂」とあった。しばらく進むと道の右手の山裾沿いにいくつものお寺が現れてくる。高山の盆地を囲む山の東側に位置する高台に大小のいくつものお寺が並ぶ。三番目の法華寺の前の道から見下ろすように一本の道が通っている。此が上一之町から左に折れた坂道の道に連なる。下から見たお寺の屋根はこの三番目の法華寺の屋根ということになる。

この道を下って上一之町にある「高山歴史資料館」に立ち寄った。ここには高山の資料が保存されている。その中に何点かの古い地図があった。この地図と下絵図と対照してみても、出発点の高山別院に当たるところの文字が「照蓮寺」であるとわかった。ここには円空の彫刻がたくさん展示されている。あの荒い彫りではあるがにこやかな顔は私たちの心をなごませてくれる。説明には彼は全国で二万体の仏を残し、それを円空仏と呼ぶとあった。

高山陣屋跡に向かう。この道に連なる上二之町、三之町には観光客が多い。下絵図に沿ってさらに進み赤い欄干で有名な宮川にかかる中橋を渡るとその向こうに陣屋跡が見える。手前に銅像が建っているのを確認し、陣屋跡の外観をカメラに納める。確認しただけで見過ごしたその像は後で調べて山岡鉄舟であるのがわかる。見てくればと悔やまれた。高山に行く少し前に「侍たちの茶摘み唄」と言う本を読んだ。これは江戸幕府が瓦解し、それに伴って江戸から流れてきた徳川家の幕臣が静岡の牧ノ原の開墾を行い、苦勞してお茶の生産を軌道に乗せる迄の物語である。この中で牧ノ原に入植した幕臣を勝海舟とともに陰になり日向になり助けるのが山岡鉄舟である。その本では鉄舟の若かりしころにはふれていないので、父親の勤めの関係でしばらく高山で生活していたことは知る由もなかった。彼の人情味ある考え方の一端はこの高山ではぐくまれたのであろうか。

ここから宮川に平行して下絵図に描かれた南側の本町通りを北に向かう。ここは近代的な店の間に土産物屋が並び、バランスのとれた商店街といった風情である。ここにも観光客が多く、日本人に混じって、外人の観光客が多い。彼らはセンスなどを取り上げ興味深そうに見ている。行き違ふとき目が合うと、ほほえみを返してくるのが印象的だった。右手に橋がかかる四つ角に出る。下絵図を頼りに左に道を探る。国分寺への道である。下絵図ではこの四つ角から国分寺までの間に五回梵天を立てて、一点ごとに右に曲がっていくようになっていて、ここを歩くと緩いカーブであることがわかる。通りの右手に国分寺がある。境内に入ると二本のオオイチョウがあり、説明書きには樹齢千二百年とある。伊能忠敬一行もこのイチョウの木陰でしばしの休息取ったのだろうか。

(かとう ちゅうぞう・静岡市、新入会員)

伊能忠誨日記

(七)

佐久間 達夫

文政五壬午年(一八二二) 伊能忠誨一七才

十一月 大

朔日 予出勤。伊勢曆一巻いただき帰る。今夜五半頃、神田より状来る。明二日五ツ半時、服紗小袖着用罷り出候様申来る。御礼に久兵衛を遣す。予、風邪の由にて高橋侯御役所へ書状を上る。右は予、御請に参り留守故、書状を上る。又、今夕、田口惣右衛門来る。榎本を出し酒を上る。但し、榎本に酒を上んとせし所故、直に出す。登り候節は参り候はず。尚又、修身改ハンカシブ二十冊の綴じ料四百文の由。

二日 予、帯刀同道、神田御屋敷へ行く。渡辺へ行き中安へ行き、渡辺宅にて待ち居る。御役所へ呼び云渡す。又、高橋作左衛門様手付、当分手伝い御免、帰村いたし、先達而申渡候通り、於在所、御用相勤め、折々出府御用相弁じ候様、直ちに高橋侯へ行く。御留守故奥へ出て鈴木様に逢え、只今地頭所より申渡候間罷出候。未だ御帰日も無い之候間、又出直し参上仕候間、宜しくと申し足立へ行く。帯刀、足立左内様へ御目通りの御話有り、予、帯刀帰宅。時に玄七参り家の相談出来候。先、内金拾両を取り、三拾六兩の直談にて証文なる。予中食す。又、高橋侯へ行く。待ち居り高橋侯御帰り故、出向い直に奥に参り申渡され候通り申上げる。引払い儀は勝手に引き候様、相分らず事は来り相談致せと御意。東儀と囲碁すみ帰宅。尤も引払いの儀は、高橋へ聞合わせ候様と中安云う。

三日 予、御屋敷、渡辺、中安へ行き、高橋侯へ行き、足立へ行き、

交食凌犯、スイ星等の案文を頼む。其れより東儀、市野、渋川侯、三宅へ暇乞いに行き、暮頃帰宅。

四日 荷物取調べ。

五日 予、佐藤、桑原へ行く。飯等出て八ツ時過帰宅。

六日 早朝、予、高橋侯へ御暇乞いに行く。先生曰く。御用絵図持参致す。又、在所玄關へ御用提灯立て候様、若し咎め候者有之候節は、高橋役所より貰い候由挨拶すべしと御意。其外色々御話有り、奥様にも暇乞いたし帰る。足立重太郎、下河辺政五郎入来。足立より餞別を下さる。高橋侯より御使いを以て酒と餞別を下さる。今夜、紙屋へ呼ばれ、予、治兵衛、七左衛門行き夕食を食す。

七日 朝五ツ半時頃、予、帯刀、治兵衛、久兵衛、又藏、江戸亀嶋出立。紙屋家内、川岸迄送る。庄兵衛行徳迄送り来る。中川御番所へ手形相渡し通り、八幡にて忠吉の出迎えに逢い、富田屋泊。早朝八幡富田屋出立。皆歩行にて白井カド屋中食。道中御用長持重くひまどり六半時頃木下に着。予、帯刀、治兵衛、久兵衛は、暮頃木下に着。問屋にて夜食。四時頃乗船、三船也。

八日 田宿町内中、本宿町内中、早朝川口迄出迎え、又、追々途中にて出迎えを。五ツ時前佐原宅へ着。所々より人来る。

九日 昼頃、加納屋治兵衛、津ノ宮へ帰る。昼頃、予、本宿、新宿、親類共十七軒へ行く。

一〇日 今朝、青山の四軒の者来たる。清見屋、金田、麴屋、近江屋、曰く、橋替の平左衛門云には、役人に掛合い候所、今五十俵くれ、五ヶ年に五十俵ずつ都合三百俵くれる様に申故、それにては一同不承知の由申候所、橋替、又曰く、初め五十俵工面し、今年百俵くれ、四ヶ年に二百俵くれよう云う。右四力年の間、山を質に取る積もり故。変候可二有間敷一存候得共、一応御相談

申すと云う。予云う。大川治兵衛とも相談致し、明日中御挨拶申すと云う。予觀福寺へ行く。墓参し院主に逢い帰る。留守に橋替来る由。子午線、象限儀立つ。

一二日 早朝青山四軒の者来たり、橋替セキ申候間、御挨拶伺う由。予、髪結い初めし故久兵衛を以て四軒の者御承知の上は、私も御同様にと挨拶させる。予、忠吉、儀八召連れ津ノ宮の先生へ行く。雑煮出る。又、加納屋へ行き酒飯出る。暮頃帰る。

一三日 予、墓参す。昼頃久兵衛江戸へ行く。予、高橋侯、御役所に着届けの状を上げる為、又、山田様へ行く御扶持米の切手を貰いに永井を頼む為。

一四日 今昼、永沢万兵衛、伊能七左衛門来たり測量始めする。甚七来たり手伝う。今夜七左衛門泊る。今昼頃、忠蔵、加納屋へ手伝いに行く。十六日、十三回忌^②故なり。

一五日 永沢半蔵来たる。但し元服して来たる。予、永沢万兵衛へ伺い、帯刀云う。明日小堤^③へ人を遣し、エン女相決めて申そうと云う。故に内々佐右衛門を津ノ宮へ遣す。今夜泊る。今夜呼ばれて永沢万兵衛同道、伊能半右衛門へ行く。故に七左衛門に留守を頼む。同人今夜泊る。今朝、佐原名主四ヶ村不^レ残帰村、永沢治助来たる。

一六日 万兵衛来たる。帯刀来たり茂兵衛を頼み、小堤へ饗節、寿留女、のし、扇子、年代紙、鮎、酒代百疋持たせ遣す。茂左衛門母来たる。藤左衛門来たる。今朝、佐右衛門を頼みて永沢仁兵衛へ遣す。今朝佐右衛門帰り、津ノ宮加納屋の挨拶に云う。長者の事なれば、平右衛門と相談の上、其意に従うべきと云う。今夜九ツ時頃、龍ヶ崎の琴女入来。

一七日 予、本屋に行く時、夕、渡辺様御着故、琴女仏参。中宿、横川岸へ行く。横川岸に泊る。

一八日 象限儀磨く。本宿町内の者来たり。質屋一件。今日先規通り無

事に相すみ候由云う。

一九日 今晩冬至後、晨測初める。新宿に寄合いあり。本屋給人名主退役に付。四時頃琴女龍ヶ崎へ帰る。

二〇日 今朝、組頭、古役、百姓代来たり。永沢仁兵衛名主退役之儀故、(以下省略)

二三日 晨測。今朝限り終わり。

二四日 予、平右衛門、又蔵、其外牧野へ行く。予、平右衛門、又蔵、觀福寺隠居、及び斎藤へ行く。平右衛門斎藤に残り、予先に帰る。今日伯母百か日取り越し、先達二人を呼び、觀福寺駕呼ぶ。昼時、帰りがけ加納屋へ人を遣す。

二五日 長嶋嘉兵衛来たる。昼後加納屋治兵衛来たり居る。

二六日 今朝店に呼ばれて行く。長嶋嘉兵衛帰る。

二七日 永沢仁兵衛来たる。筈島五右衛門来たる。帯刀来たる。

二八日 加納屋治兵衛帰る。明日来る積もり。今夜永沢万兵衛、七左衛門来たり話す。

二九日 加納屋治兵衛来たり居る。予仏参。

三〇日 今夜より忠吉垂揺球儀にかかる。

十二月 大

朔日 中安御下りに付、先に久兵衛を遣す。永沢半十郎来たる。

三日 予、本屋へ行き、中安へ御目にかかり帰る。象限儀柱、以^二新木^一立て替える。

四日 今朝、油屋四郎兵衛来たる。本宿組より名主退役の願書認めて印形の済み来たる故、予、印形を押す。

六日 七左衛門、算稽古初める。

八日 今昼永沢治郎右衛門同道、予、七左衛門宅へ呼ばれ行く。暮頃帰る。治郎右衛門、半円儀稽古初める。此御定は永沢、横川岸の内、午中は一人ずつ。

一二日 加納屋治兵衛、津ノ宮へ帰る。

一三日、一四日 煤掃きする。

一五日 今夜、田宿安次郎来たる。食前に山田采女、油屋、斉藤等、其外来たる。曇天故間もなく帰る。安次郎泊る。五ツ半時頃、西方より白雲出、次第に充滿し、四半時頃より黒雲出通う行く。

其折りに食測る。今夜手伝人、望遠鏡大川治兵衛、茂兵衛、垂揺球儀又蔵、忠吉。象限儀伊能七左衛門、同平右衛門。觀星鏡線付久保木源蔵。地平圭儀永沢治郎右衛門、久兵衛。久保木俊蔵来たる。今日、月食手伝い候者へ酒飯を出す。今夜加納屋津ノ宮へ帰る。

一七日 細測願認め状を付したる書簡を渡す。又蔵、駿河屋と共に江戸へ登る。其外に下河辺、足立へ書状、金子入りを頼む。足立には、左内に百疋、重太郎に五十疋。下河辺は、去年中に百疋遣し候所故、当年は貳百疋持たす。

一八日 仙助翁、スダへ帰る。加納屋治兵衛来たる。

二二日 今朝五ツ半時過、予、本屋に行き、中安の御前へ出る。永沢仁兵衛来たる。治助退役仕まして三郎右衛門方へ水帳等不殘相返し申候様、御云渡被成候而、可然と云う。尤、三郎右衛門、天文御用相勤候間、内々は私三郎右衛門代にて相勤候と云う。

治助、組頭二人、鍵屋等御前に出る。中安様仰渡し候は、治助儀病身に付退役仰付られ候。又、予には当時後役無之間、後役出来候迄、組内の事を頼む。又、組頭には三郎右衛門万事世話致し候得共、万端骨折及び呉候様。予直ちに帰宅、浄国寺へ行く。

二四日 今夜、永沢仁兵衛、組頭兩人、鍵屋、油屋、山川、小堀、百姓代等、魚酒持参、祝儀来たる。酒を出す。四ツ時過に帰る。予仏参歸り候節、横川岸より手紙来たる。今回、娘、田山勘三郎方へ遣す積もり取り極め申候故、永沢治郎右衛門参り取り持ち

申候。(中略)予、象限儀立替故、久兵衛を横川岸へ遣す。

二五日 加納屋治兵衛、津ノ宮へ帰る。今夜先遣二人来たり経を読み帰る。直ちに豆まき。

二六日 桑原より書状到来。時斗師弥三郎へ根付時計^{ねつけ}の儀、各々掛合候所、只今は伊能より御口被下候らば差止めように相成不申候と申談す。何とぞ御手紙にて桑原へ根付時計を遣す様御申越可被遣候と云う。

二七日 今朝餅を搗く。忠吉妻おサン、久兵衛妻、兩人来て手伝う。

二八日 今夜皆々夜明かし。予、九半時寝る。昼後下河辺、足立よりの書状到来。下河辺よりは先生の御用にて亡祖父碑文^い出来致し候間、佐藤氏へ五百疋、右認め候仁へ、貳百疋遣し候様申し来たる。足立重太郎よりの書状は、妻を二四日引取り申候由。

三〇日

文政六癸未年(一八二三) 伊能忠誨一八才

正月 大

朔日

伊能源四郎、永沢治助、同太兵衛、伊能七左衛門、永沢半十郎等来たる。夕方、加納屋治兵衛津ノ宮へ帰る。

二日

四時頃、永沢治郎右衛門、同半十郎、同忠右衛門、同太兵衛、天王様^う参詣。永沢忠四郎、伊能藤左衛門門札。伊藤藤蔵門札。伊能八郎兵衛門札。伊能八之丞門札。浄国寺、由兵衛、乙右衛門、庄左衛門、上三軒門札。永沢東次郎、橋本町不殘。但し久兵衛寄せ、予門札。永沢仁兵衛、同半右衛門、升屋喜右衛門門札。丸屋、山川門札。予歸り中食後、又、伊能茂左衛門、同彦幸左衛門、本谷新左衛門、清宮利右衛門、伊能平右衛門、同彦作、伊能七左衛門等へ行く。此処にて永沢治郎右衛門に逢う。

三日 観福寺同道の約束。予、帰り熨斗目上下にて七左衛門、治郎右衛門同道観福寺⁽¹⁰⁾へ行き、仏参し帰宅。此夜七左衛門来たる。書状認む。高橋様、足立様へは近日出府仕候間、不^レ上^二書状^一。下河辺へは年中仰せ被^レ越候趣承知仕、当飛脚を以て佐藤氏へ差上候趣。又、佐藤へは御札、且つ御肴代五百疋拝呈。右認候仁、岡啓次へ式百疋進上。又、桑原へは年中仰越候返事、近日出府仕候間、其節可^二申上^一趣。昼後七左衛門来たる。

四日 初飛脚駿河屋忠七。昼後、予、平右衛門、七左衛門、源四郎等、供人三人、諏訪明神⁽⁸⁾に参詣。尤、望遠鏡持参。加納屋治兵衛来たる。

五日 昼時御用初め。予、永沢治郎右衛門、伊能七左衛門、同平右衛門、加納屋治兵衛、列座にて酒飯を出す。御勘定御着。

六日 予、治郎右衛門、七左衛門、久兵衛、茂兵衛、忠吉、文蔵、儀八等、香取大明神⁽⁹⁾参詣。大宮寺に年始、及び一昨年中御祈禱を頼みし礼、役人出挨拶し後、大宮寺出挨拶、酒、及び吸物等出す。皆々直ちに津ノ宮久保木、及び加納屋へ行く。酒飯を出す。七半時後帰宅。今夜、又蔵鹿島へ行く。予、平右衛門同道丸屋へ行き、御勘定市野彦三郎様へ出る。尤、明日御出立故。

七日 伊能帯刀入来。夕方持宝院、清浄院、延寿寺来たる。永沢治郎右衛門、平右衛門、予相伴。日待⁽¹⁰⁾故。七左衛門、鑄木の甥孝十郎同道来たる。予、初めて逢う。

八日 今朝、先、延寿寺、持宝院来たり。其後観福寺、其外来たり雑煮を出す。永沢、横川岸来たりて挨拶に出る。都合十一人。大般若経⁽¹⁰⁾を読む。酒飯を出す。昼後皆々帰る。今夜七左衛門、孝十郎同道来たる。

一〇日 昼時七左衛門来たる。孝十郎同道。予、治郎右衛門同道七左衛門宅に呼ばれ行く。加納屋治兵衛来たる。今夜七左衛門、孝十郎同道来たる。又、円城寺、及び新宿の者五、六人遠鏡を見に

来たる。観星鏡にて月、及び木星を見せ帰す。

一二日 夕七時頃地震。帯刀、忠吉、喜八、又蔵、行きは駿河屋と共に登る。

一三日 八半時頃、予乗船。川口迄送る人々は、七左衛門、治郎右衛門、平右衛門、治兵衛、茂兵衛、吉右衛門、佐右衛門、酢屋のユキ等也。

一四日 五ツ半時過、木下へ上がる。皆々歩行にて大森森田屋着。又、白井富士屋へ八ツ時頃着。道悪く昼後又雨降り候故泊る。駿河屋に泊る。但し門屋。

一五日 六時頃皆々歩行にて出立。五半時頃釜ヶ谷江戸屋へ着。四時過八幡富田屋へ着。九時頃行徳大坂屋へ着。間もなく乗船。皆々江戸行徳川岸伊勢屋へ着。此所にて支度いたし紙屋新兵衛へ着。此所に泊る。帯刀は行徳川岸伊勢屋へ泊り居る。

一六日 帯刀、東次郎来たる。同道。及び忠吉、喜八を連れ、予、九時頃高橋侯へ行き、永井、下河辺、足立へ行く。此所にて酒、及び吸物等出る。帯刀は東次郎と借地間断(検断)を取り、三拾七坪半の積り、高橋侯へ申上げる。予、忠吉、喜八は源空寺へ参り、帰り永井へ寄り普請出来候迄、此所に居度由申候所、早速承知、直ちに帰宅。

一七日 予、帯刀同道、昼頃御屋敷渡辺、及び中安へ着届け。帯刀は直に帰る。予、忠吉、喜八は直ちに三百坂渋川侯へ行く。帰り水道橋にて忠吉と別れ、予、神田松枝町弥三郎方寄る。用事有^レ之故也。

一八日 五半時頃より神田御屋敷へ行く。渡辺宅にて皆々揃え、九時頃御目見え。永沢仁兵衛、予一緒に出る。御料理頂戴。例年の通り無尽有り。蓮沼村簗に当る。内十両渡辺取り、不^レ当分に致す様に御意。御長屋廻り、予、佐藤、桑原へ行き帰宅。豊後守

候に出候様、渡辺云う。

一九日

予、高橋侯へ行く。昨日、予に來たり候様御文被レ下候故、御留守故足立へ行く。足立様御意に在所より切日之來たりし家は、余りむね高く候故、此方の下屋とは表向き口之故に、六畳に三畳位に作事いたし候様。

二〇日

予、高橋侯へ行く。先生御意。昨日足立様御意と同じ。帶刀、東次郎も來たり図を渡す。足立左内、名目にて借地二四歩。予、帶刀、神田御屋敷へ行く。恐悦申上げる。但し松魚節二十祝い也。中安へ行き、直ちに榎本源三郎方へ行く。酒、蕎麦等で暮頃帰る。今夜、書狀認める。

二一日

予、荷物船にて忠吉、リキ乗り先へ遣す。予、喜八、九時頃足立左内宅へ着。普請出来候迄同居致す。忠吉帰国。リキ、石町半兵衛方へ帰る。柏木音右衛門來たる。真岡孫兵衛より白米四斗來たる。但し去年中の預け米四石余り有る故に。予江戸住居と云え取る也。

(以後忠誨は、永井宅より天文方御役所へ出勤。主な事項のみ記述)

三〇日

箔屋町宅普請立前。

二月 小

四日

八ツ時頃より崇禎曆會有り。今日初まり。石坂、大久保等、他より來たる人七人。惣て七人先生共に。

一七日

予、伯母等位牌を頼みに行く。久兵衛、音右衛門、半兵衛等來たる。

二六日

真岡屋より白米來たる。此迄、合式石三斗來たる(二三石六斗の処)。予、位牌を取りに行く。小位牌出來る。

三月 大

七日 予、家出來引き移る。久兵衛、半兵衛、音右衛門、リキ等來る。

四月 小

朔日

八時頃文藏來る。同人云う。今日佐右衛門書上、長持一棹持參。佐原出立仕候間、私明日、中川番所御手形を持ち、行徳迄參り佐右衛門に、右手形相渡し、無レ滞、中川御番所通り候様、右に付、予、下河辺に相談す。手形迄通左の通り。

覚

一、長持 但 測量書物 耆棹

右は、此度、下総国佐原村より江戸淺草天文方御用屋敷迄、船に而積送申候。尤、御法度之武器類一切無_レ御座_一候。御番所無_レ相違_一御通可_レ被_レ下候。以上。

文政六未年四月二日

御書物奉行

天文方兼

高橋作左衛門手付

伊能三郎右衛門 印

中川御番所

御番衆中 (尤、紙者、西之内に而認む。手形迄通)

八日

予出勤。両円図、耆図出來る。先達而出來候方図、及び円図、新役所へ預ける。尤、方図は正算筋引相成る。

一四日

予、佐右衛門買物に出る。七時頃荷物を船にて行徳川岸へ遣す。昼後、佐右衛門行徳川岸へ行く。予、源空寺へ行く。祖父(忠敬)石碑出來立つ故に、源空寺へ御布施を上げる。即ち回向料。

一五日後リキ女来たる。四時頃佐右衛門、江戸浅草出立。行徳川岸

注釈

来たる。

(つづく)

注1 伊勢暦

伊勢暦は、十五世紀後半から伊勢神宮の御師が大森(おふだ)とともに暦を諸国に頒布することがおこなわれるようになった。当初は丹生暦、又は京都暦を持参したのであったが、寛永八年に森若太夫が初め、これをついだ箕曲甚太夫が賦暦と売暦を板行することになった。伊勢暦は、伊勢参りのみやげとして全国的に普及する。

注2 加納屋十三回忌(大川治兵衛成定)

『歴史大全』佐藤政次編著 参照

注3 伊能忠敬の結婚

忠敬の妻・クニは、常陸国高浜村(現茨城県石岡市高浜)の笹目八郎兵衛の二女。文化六年十月十二日生まれ。文政五年十一月十六日、忠敬の父出生の家、小堤村(現横芝町小堤)の神保忠右衛門信敬に媒酌人を依頼し、翌年四月二十六日、クニが十五才のとき、忠敬と結婚をかわした。

注4 佐原村伊能家の庭で、天体(月食)観測

文政九年六月六日に長女「テイ」を出産したが、「テイ」は早死する。忠敬は、伯母妙薫死去後、江戸と佐原とで交互に生活するようになった。佐原の家でも天体観測をし、その資料を江戸の天文御用所へ送付した。

注5 根付時計

幕末頃、洋式の懐中時計が用いられ、渋川景佑の『時辰儀問答』などでは、これを「根付時計」と称した。根付とは、煙草入れや印籠

一六日 六半時過八幡出立。予、佐右衛門馬にて五半時過釜ヶ谷へ着。予、佐右衛門馬にて四時過白井へ着。予、帯刀、馬にて(但し半分は佐右衛門馬に乗る)九時頃大森着。皆々歩行にて九半時過木下へ着。佐原より迎えの船来り居る。中食すみ八時過乗船結佐にて夜食。朝七時頃佐原本宅へ着。

二二日 神保入来。帯刀来たる。加納屋妻チセ来たる。橋替ババ来たる。泊る。(二三日、橋替ババ帰る)

二六日 昼後、神保忠右衛門より浜宿永沢半右衛門方へ結納遣す。夕頃忠右衛門方より結納^③来たる。七左衛門来たる。今夜親類中を呼ぶ。忠右衛門正客にて、永沢半蔵、治助、吉郎兵衛、慶吉、東次郎、治郎右衛門、七左衛門、八郎兵衛等入来。尤、横川岸は中宿にて両夫婦を送り来たる。女中客は慶吉妻、半右衛門妻、帯刀妻、七左衛門妻、帯刀夫婦は引き合い。供廻り共に六十余人。

二七日 五時頃、皆々開き、半右衛門妻は、置付き故泊り居る。今夕、役人振舞う。

二八日 今夕、橋本町内、及び其外へ振舞う。三ツ目の祝儀に半十郎、半右衛門子息半蔵弟、慶吉娘入来。

五月 小

三日 七左衛門母来たる。おくニ^③同道、親類廻り供に久兵衛、おコマ、文蔵、中宿の女等、今夜、皆々横川岸へ呼ばれ行く。(尤、お琴、明日帰国故)酒飯馳走。四半時頃帰宅。加納屋治兵衛母

などを腰にはさむとき、帯から落ちないように紐の端に結びつけたものである。

注6 伊能忠敬の碑文

忠敬の遺体は遺言によって、五台山文珠院源空寺（現東京都台東区東上野六―十九―二）に葬られる。墓碑文は、文政五年十二月三十日、佐藤坦（号一斉）によって撰文され、翌年四月十四日に石碑が建立された。碑文は墓石の左右と背の三面に刻字された。碑の全文は、保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』や大谷亮吉編著『伊能忠敬』などに記述されている。又、墓碑銘の拓本は『伊能忠敬研究会誌三四号』の『源空寺の忠敬墓碑銘拓本』に掲載されている。

注7 天王様（八坂神社）

佐原村本宿（江戸時代は、本宿組、浜宿組、仁井宿組）の氏神様で、祭神は素戔鳴命（すさのおのみこと）。七月の三日間、祭礼が行なわれる。

注8 諏訪明神（諏訪神社）

佐原村新宿（江戸時代は下宿組、上宿組）の氏神様で、祭神は建御名方神（たけみなかたのかみ）。十月の三日間祭礼が行なわれる。

注9 香取大明神（香取神宮）

東国一の宮で、旧官幣大社。祭神は経津主命（ふつぬしのみこと）。本殿は、五代將軍徳川綱吉の造営によるもので、国宝、重要文化財などを所蔵している。現佐原市香取に鎮座。

注10 伊能家と佐原観福寺

妙光山観福寺は、佐原地方屈指の名刹で、近世になって佐原に居を構えた伊能氏一族と関係を深め、一族の菩提所として特別な寺檀関係結んだ。正月には、二日に観福寺へ年賀として白米（かます）を持参する。観福寺、及びに末寺からは僧侶が伊能家に参り、七日に日待、八日に大般若經の転読があり、雑煮餅、酒飯で接待する。このほか盂蘭盆などには、布施や盆供米などを進上した。

『続千代の古見知』伊能景利記 参照

*佳境の「忠誨日記」ですが次号が最終回になります。どうぞご期待下さい。

「伊能忠敬と北陸測量」展 伊能忠敬記念館特別展

10月5日から11月28日まで

17年間かけて行われた伊能忠敬の全国測量は、全部で10回に分けて行われた。その間のさまざまな出来事は、忠敬の日記や現地に残された当時の記録などから、うかがうことができる。

今回の特別展では、伊能測量隊にとって東日本の総仕上げともなった第4回目の測量のうち、北陸方面に光を当て、伊能測量隊を迎えた現地の対応や地方の測量家との交流を紹介している。

北陸には西村太沖、石黒信由、河野久太郎、小原一白といった数学者が活躍していた。今回は彼らの工夫された測量器具も展示されている。



忠敬の用いた瘧おこりの治療薬

杉浦 守邦

「伊能忠敬研究会会誌」第三五号に、筆者が「忠敬の持病と妙薫の卵」と題する文を寄せ、忠敬は晩年「痰咳」の症状に苦しんだが、これは現在の医学で慢性閉塞性肺疾患（COPD・慢性気管支炎）と呼ぶものに該当すること、彼の場合はそれが誘因となって老人性肺炎を併発し、この肺炎が直接の死因となったと推察されることを報告しました。そして彼の数ある書状のどこを見ても、どここの医師の診察を受けたとか、これこれの薬を飲んだといった記述が全く無く、もっぱら娘の妙薫に頼んで佐原から鶏卵を取り寄せ、玉子酒にして飲んですこしていた旨を、報じました。

そうしたら早速、佐久間達夫氏が会誌三六号で、これに追加して、「忠敬先生測量日記二十」（第六次四国・大和路測量日記）の巻末に「天瓜粉・桔梗を主剤とする六味の鎮咳剤」の処方が載っている旨教えて下さいました。感謝に堪えません。薬量まで入っているとところを見ると自ら薬種を購入、調合のうえ煎じて飲んでいたものと思われまします。これはただ文化五年の四国測量中痰咳症状のあったときだけに服用したと限定して考える必要はなく、文化十一年以後の病状の進行期にも引き続き服用していた可能性が大きいと見てよいのではないかと思われまします。もしも薬種の購入記録等が発見されたら確実と言えましよう。

なお佐久間氏の文章で、文化三年の中国地方測量中「瘧疾」にかかったときの薬物処方として、「行気香藿、加蒼葛」という記述がある旨を報告しておられます。

これについて追加してみたいと思います。

「行気香藿、加蒼葛」というのは、主剤は香藿であって、これに蒼葛を加えた薬剤と考えられます。

行気は氣をめぐらすという意味であって、漢方に行気寛中という語があります。これは「胃腸の蠕動を促進して上腹部の膨満感を除く」薬効をいいます。行気寛中の効能を持つ薬剤として、紫藿葉・枳殼（きこくに：蜜柑の実の乾燥物）などがあげられます。

香藿とは、香附子と紫藿葉の事であって、

香附子（こうぶし）：ハマスゲ（カヤツリグサ科）の球茎。

紫藿葉（しそよう）：シソの葉を乾燥したもの。薬理作用として、

行気寛中のほか、発汗解熱の効果がある。

香藿の組合せを主剤とした処方に香藿散（こうそさん）がある。

香藿散の処方：香附子六、紫藿葉六、甘草三、乾生姜九、

陳皮三、大棗五。

効能：解熱、発汗、頭痛除去作用、とくに胃腸虚弱で神経質のものの風邪の初期。感染症に適用される。

香藿散に蒼葛、すなわち蒼耳と葛根を加えると、発汗・解熱の作用が倍加する。

蒼耳（そうじ）：オナモミ（キク科の植物）の実、花、茎、葉、

根等を用いる。解熱、発汗、鎮痙の効果がある。

葛は葛根（かつこん）：葛の根。解熱、冠状動脈の拡張、脳血流量の増加の効果。

いずれも発汗、解熱を目的とするものであって、瘧（現在のマラリア）の場合一回の発熱を押さえる効果はあったでしょう。

日本には平安時代から各地に瘧、すなわちマラリアの流行地があり、貴族、庶民の間に普通に見られました。日本のマラリアは、多くは三

日熱・四日熱と呼ばれるもので、熱帯マラリアのような悪性のものはありませんでした。対症療法として主としてこれら発汗解熱剤が用いられて、一応の効果はありましたが、再発を繰り返すことが多く、完全治癒は望めませんでした。特効薬として南米アンデス山系原産のキナ樹の皮、いわゆるキナ皮（有効成分キニーネ）が用いられるようになって、初めて病原体（マラリア原虫）の消失が期待できるようになり、完全治癒が可能となりました。それも明治になってからのことです。（すぎうら もりくに・山形大学名誉教授、医学博士）

瘧の診察、投薬を測量日記にみる 佐久間 達夫

杉浦さんには「瘧」の治療薬の記述をしていただきありがとうございます。本文の六行目に、「彼の数ある書状のどこを見ても、どここの医師の診察を受けたとか、これこれの薬を飲んだといった記述は全く無く」と、記してあるが、医師の記述に関係したものとしては次のようなものがあります。（忠敬書状には記述はありません）

○文化七年（第七次測量日記）一月十二日の条に、

大里村（現・北九州市）の宿、重松彦之丞宅に、宮崎良助が医師服部貞卿の贈詩、並びに贈墨を持ち来る。

・二月四日の条に、

小原村（現・大分県国見町）の宿で、杵築差添医師岡尚綱に逢い談す。

・二月十日の条に、

この日、日出城下（現・大分県日出町）医師宇佐見純徳付添。

○文化八年二月四日の条に、佐々並村（現・山口県旭村）の宿木村源

太左衛門宅に、医師佐々木玄南出る。

○文化九年（第八次測量日記）三月十日の条に、

鹿児島城下より屋久島行きの船（船数八艘）の「八番宝寿丸」の乗船者に、医師小村順康の名がある。

○文化十年閏十一月十七日の条に、

倉吉町（現・鳥取県倉吉市）の宿に、医師巖操伯出る。

などが記してある。しかし、これらの医師が、忠敬の持病「痰咳」の診察や投薬にかかわったかについては、記されていない。

なお、第五次測量時に、山口県の秋穂村で発病した「瘧」の診察、投薬については、拙著『伊能忠敬の測量日記』第五次測量篇のなかで次のようなものがある。（編集部注Ⅱ以下日記の抄録）

文化三年（一八〇六）

四月晦日 一番二番は秋穂浦止宿。東河此日より瘧疾。

五月五日 前宿へ萩より医師栗山孝庵出る。埴生村へ医師中丸昌軒出る。

同 六日 医師中丸昌軒、萩医師栗山孝庵出る。

同 十一日 東河病氣に付当町医師穂坂元禎診脉。（診脉は診脈のこと）

同 十二日 長府医師村田雄載、診脉。

同 十三日 村田雄載、診脉。

同 十六日 長州肥中浦医本多玄眠、診脉。

同 十八日 東河病氣。医師黒和田村、川村見龍、診脉。

同 二十日 東河病氣。医師綾部玄益出る。

六月十七日 松江城下へ至る。医師佐々木万柳、鍼医吉見鎌徳出る。

同 二十三日 隠州渡海乗船。予瘧疾頗快或截或発せし所、乗船不宣。

此日より、日瘡と成。

同二十六日 予日瘡と成、大疲労す。赤崎村医師草野玄林、鍼医池本玄仲来る。

同二十八日 荒尾近江侍医野村章作、鍼医泉文好等なり。

同二十九日 医師佐々木万柳、町医小林瑞泰、町鍼医坂本養民出る。

七月 朔日 佐々木万柳の截瘡の薬を用、鍼医吉見鎌徳、坂本養民、佐々木万柳、日々診脉。午後発瘡。夕方、佐々木万柳、吉見鎌徳来る。

同 二日 佐々木万柳、吉見鎌徳、小林瑞泰出る。

同 三日 此日未明に吉見鎌徳截瘡鍼用。吉見来る。午後発瘡。

同 四日 此日松江、佐々木万柳、吉見鎌徳、小林瑞泰、坂本養民出る。

同 五日 此日松江、未明に吉見鎌徳用截瘡鍼。午後発瘡。佐々木万柳、坂本養民、小林瑞泰診脉。

同 六日 永沢瘡疾に成。松江、是迄医師四人診脉に来る。

同 七日 此日松江にて自製用截瘡の薬。医師佐々木、坂本来診。

同 八日 松江の医師、佐々木、小林、坂本等診脉に来る。

同 十日 佐々木万柳、小林瑞泰診脉に来る。

(さくま たつお・元伊能忠敬記念館館長)

伊能忠敬の測量地に石碑

中国新聞 04・10・02〜03

江戸時代に全国を測量して歩き、国内初の実測日本地図作成に取り組んだ伊能忠敬が、神石郡内で調査に当たったルートを示す記念の石碑

が、三和町の住民グループの手で郡内四ヶ所に建立された。同町時安で一日、除幕式があり関係者が完成を祝った。

石碑は高さ二・五メートル、幅一・五メートルの花こう岩製。忠敬らの一行は年一八一一年二月に同郡にいら測量をした記録があり、石碑には前面に「伊能忠敬測量之地」の文字を刻み、側面や背面にたどったコース、功績や建立の趣旨を記している。

測量隊が泊ったとされる三和町井関、油木町油木、豊松村中平にも小型の石碑を設置した。事業費は約二百万円で、町の補助や個人の寄付などで賄った。

忠敬が残した「測量日記」によれば、忠敬の本隊は福山から北上して三和町入りし、同町井関に宿泊。翌日は油木町に泊り東城町へ抜けた。別動隊はその前に東城から油木を経て豊松村で宿泊。備中へ抜けて新見で本隊と合流した、とある。同町では昨年から住民の間で忠敬の足跡を確かめる機運が高まり、三月には町観光協会を中心に建設に向けた実行委員会を組織。史実の確認作業を進めてきた。

平田行雄委員長は「石碑の建立により、偉大な人物が地元にも来ていることを知ってもらい、身近に感じてほしい。困難を乗り越え、大仕事をなし遂げた忠敬から学ぶところは多い」と話している。

(記事、写真は十一月に合併で誕生した神石高原町の平田行雄氏提供)



伊能忠敬測量隊宿泊跡

文化八年(一八一〇)二月十日 三和町
文化八年(一八一〇)二月十五日 油木町 夜更谷横瀬
応属七郎左衛門 御宿施
神石高原町合併記念
平成十六年(二〇〇四)十一月五日
伊能忠敬測量の道徳建設委員会

忠敬談話室だより

別海は鮭の季節

丹羽 菊乃

中標津在住の友人花山さんからの是非にどのお誘いで、九月二十四日から二十八日まで道東に行く機会に恵まれました。花山さんは、釧路の「伊能大図フロア展」にも足を運ばれ素晴しかったと喜んで下さいました。私が一本松に行くことを希望していたので、近所に住む姪のご主人で、別海町で長く教鞭をとられ、その後教育委員会にいらした神代愛彦先生に頼んで下さいました。先生にはこころよく引き受けて頂き、翌朝、晴天に恵まれ一本松に向いました。途中「建設期成会の七名の方は全員を知っている。丹羽会長の別海温泉ホテルには隣に展示館があり、いろいろな面白いものが展示してあること。展示館や教育委員会に一寸寄って来ればよかった。帰りに寄りましょうか」など話が出ました。



「あの松ですよ」河川敷に車を止め、草を分けて近づくと、永く厳しい風雪に耐え、どっしりと根も張って、場にふさわしい風格のある松でした。松の近くには大関美枝子さんの見事な筆跡の記念柱が堂々と建っていました。私達四人、鳥と蟬の鳴き声、河の流れの音だけの静寂の中で、この松が植えられるより七

十年も前、二〇四年前の九月二十五日忠敬がこの地ニシベツでも、舟と徒歩の測量で超人的な偉業を残されたこと、翌日にあたる九月二十六日、私がここに立っていられる偶然。記念柱をなでて感激ひとしおでした。

その後「浜コタンに行ってみましょう」と河口に向って車を走らせましたが、途中西別川の河川敷にはたくさんさんの車とテントがあり、川岸は鮭を獲る釣竿がびっしりと立っていました。忠敬が測量を諦めるしかなかった鮭の季節でした。(にわ きくの・東京都世田谷区)

別海町通信

先般、別海町記念碑建設期成会から、写真のCDと記念柱除幕式関係のDVDが送られました。これには前号で報告した記念柱除幕式と別海ウオークの映像ビデオ版。話題では釧路大図展の「NHKニュース10」夕方の地元ローカルニュース「NHKたんちようワイド」STVニュース番組「どさんこワイド」が収録されています。



別海温泉ホテルのあるじ丹羽勝夫さんのコレクションは「なつかし館」に収められ、「新自然塾」として紹介されています。しらいみちよ「西別川」「想春」の歌声を聞きながら楽しめる一枚です。事務所に置きますのでどうぞご覧下さい。大地みらいのかおりと味が！ホームページ坂本さんの資料室で除幕式の写真が見られます。

日々の話題から

□北海道に優勝旗 8・23 駒大付属苫小牧高校



会員の堀江先生のお宅の前には駒大苫小牧校の野球部長さんがお住まいだそうです。北海道初の全国制覇で地元、学校でも町内会でも誇りを感じ、大きな力を与えてくれたそうです。

□出版社長 芳賀さん

戦中極秘の「多摩地形図」を編さん 8・23

朝日新聞東京武蔵野版によれば、会員で前柏書房社長だった芳賀さんが独立、新会社を起こした。地図への情熱が「多摩地形図」の刊行になった。戦前の多摩地域が鮮明に甦る。次は「帝都地形図」を予定している。

☎042・328・1503 之潮（これじお）

□新事務所で懇談会 8・28

この日も残暑がかんかんでしたが、26名のみなさんにお集まりいただき盛大にオープンを祝いました。たくさんのご好意に感謝します。

□島原の松尾卓次さん「新島原街道を行く」刊行 9・9
インターネット川上賢一 新刊ガイドで紹介されている。「オウカンで遊

戦中の極秘地図編さん



多摩地形図 軍部も鮮明
戦中の極秘地図編さん
多摩地形図 軍部も鮮明
戦中の極秘地図編さん

んだらあぶなろうが：母の叱る声を思い出す」から始まる。この街道を坂本龍馬が長崎へ足を急いだし、吉田松陰は原城址に立って歴史を思考している。伊能忠敬が島原半島を測量した時は高齢で、おまけに歯痛で苦しんでいたと、出した手紙は語っている：とはま

えがきから。島原の道を歩いて書いたもの。島原へ行く時は必携書。
出島文庫 ☎095・825・2960 ￥1500



□安藤由紀子記念書棚 9・22

安藤由紀子さんから新事務所に幅31高さ1・8の書棚を寄贈して頂きました。書棚には「佐原市史」「糸魚川市史」「井上ひさし、四千歩の男」「房総通史」「九十九里町史」など貴重な史料も提供されています。事務所に有形資産が生まれました。棚の充実を目指します。

□月刊地図中心で「特集 伊能大図」発行

10・1

伊能大図里帰り

よみがえる200年前の日本

伊能図のあらまし

伊能図発見物語

釧路市民を感動させた伊能図

伊能大図里帰り展追っかけ記

伊能測量隊最東端到達記念柱の建立

*地図センターや大図展会場で販売されています。400円。



□研究会に表彰状 10・16

日本ウオーキング協会創立四十周年記念式典で「ウオーキング運動振興団体感謝表彰」を受け、事務所に掲出いたしました。

□長崎街道シンポジウム「伊能忠敬と長崎街道」 11・2 北九州市

長崎街道は忠敬も九州測量のために歩き、「曲里の松並木」の松の木陰でしばし旅の疲れを癒したのではないかと思われる。伊能忠敬の足跡と長崎街道という角度から、まちの魅力を考えるシンポジウムを開催する。パネリストとして会員の河島悦子さんが出演。

□新入会員のみなさんです。どうぞよろしく。

今村 恵二さん 千葉県白井市 富士ゼロックスOB
井口 利夫さん 北海道室蘭市 室蘭地方研究会、アイヌ語地名研究会、松浦武四郎研究会
星 由尚さん 茨城県つくば市 前国土地理院長、日本地図センター専務理事
湯尾 弘司さん 兵庫県明石市 忠敬探求
加藤 忠三さん 静岡県静岡市 デジタル忠敬図研究
巻 晃 さん 東京都中央区 八丁堀在住

お知らせ

□総会と10周年記念集会のご案内

○平成16年12月12日(日)

日本大学文理学部百周年記念会館「伊能展会場」他
東京都世田谷区桜上水・新宿から京王線「桜上水駅」下車

○スケジュール

① 10・00～11・30 日大「伊能大図フロア展」

伊能大図、その他の展示を参観。研究会有志による説明員を配置。一般の参加も歓迎。 説明員(予定・敬称略)

(地図) 鈴木、清水、星埜、斉藤、長岡、土肥：記念会館

(史料) 渡辺、伊能、安藤、伊藤、佐久間 …… 図書館

② 11・30～12・00 昼食、学内食堂、出店などを各自利用

③ 12・00～12・30 研究会総会「百周年会館会議室」

予定議題―役員改選と会則変更

④ 13・00～15・00 日本大学主催記念講演会「国際会議場」

公開講演 自由に聴講

講師 佐々木利和(文化庁、前東博研究室長)

紺野 弘幸(伊能忠敬記念館学芸員)

⑤ 15・10～17・00 10周年記念講演会「国際会議場」

公開講演 日本国際地図学会と共催

講演1 新発見の伊能測量隊員日記について

安永純子(愛媛歴史文化博学会員)

講演2 伊能忠敬研究会10年間の歩み 渡辺一郎 45分

⑥ 17・30～19・30 記念パーティ「学内食堂」 会費制三千元

会員とアメリカ大図展実行委員会関係者、国土地理院関係、地元佐原をはじめお世話になった来賓招待者、合計100名を予定。

■万障繰り合わせのうえ、是非ご出席をお待ちいたしております。なお、総会議案採決と会場準備の都合で出欠を同封ハガキでご一報下さいますようお願い申し上げます。欠席の方は委任状のご提出をお願いいたします。また、近況報告や同封のボランティアアンケートにもご協力くださいますようお願いいたします。

□渡辺さん「三六日で世界一周」は順延させていただきました。

□「伊能忠敬未公開書簡集」は別途配布を予定しています。

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

ー予定ー

第39号 締切 12月末 発行 2月

②例会・見学会の開催

第40号 締切 3月末 発行 5月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第41号 締切 6月末 発行 8月

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号を明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

② (04年8月に事務所は新宿区下宮比町から移転いたしました)

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax

03-3466-9752

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、パソコンなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用しています。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。

伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。最新情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www2.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

編集後記

おかげさまで10周年。会員並びにお世話になった大勢の皆様にお礼を申し上げます。本号は普段より8頁増の記念号になりました。ご執筆頂きました各位には感謝にたえません。東京・渋谷は駅を挟んで事務所と反対側に塙保己一記念文化史料館があります。保己一さんは忠敬さんより一年後輩で二年長命でした。桜の木に彫られた群書類従の版木一万七千余枚はまだまだ息づいています。版木を透かして見れば、二百年前の日差し、気温、語らいなど人々のいとなみが映つていそうな感じでした。◇台風が来そうな予報の津軽はお岩木やま山麓の高照神社。江戸後期の国絵図、領内図、城絵図が二百枚以上残っていました。北は松前城から薩摩、対馬まで。図の多くは貴田元親の作だという。詳しい調査を待っているようでした。忠敬さんと同時代の人、遺物に関心が広がります。◇初めの一步が10年の雄大な広い路に。もし勲章を贈れるならば「忠敬ワールド特別大賞」でしょうか。渡辺一郎代表ご夫妻に深甚なる感謝をこめて◇近未来、来年の字。「喜」になーれ(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.38 2004



Congratulations on the 10th Anniversary of Inoh Society

Life with a Turning Point

Nakae Toshitada 1

FEATURE STORY 1

Tadataka Represent World Maps

Editorial Department 2

FEATURE STORY 2

10years History of the Inoh Tadataka Society

Watanabe Ichiro 4

FEATURE STORY 3

Was "Ine" Cut off by her father Tadataka Inoh?

Sakuma Tastuo 18

FEATURE STORY 4 Enjoying the "Tadataka"

Exhibition of Materials about Hotta-Sano Fief

Kashiwagi Takao 53

Tadataka's Pince-Nez Glasses

Kawashima Estuko 54

Three Topics in Membership of our Society

Kawakami Kiyeshi 56

Following Tadataka's Route in Takayama

Kato Chuzou 57

TOPICS

Exhibition of Opened

"Tadataka Inoh and the Survey of Hokuriku"

Memorial Museum 66

Medicine for Maralia Tadataka having Taken

Sugiura Morikuni 67

Medical Examinations and Medicines for Maralia

in "Survey Diary"

Sakuma Tastuo 68

Inoh Survey Memorial Statue set up In Sanwa-cho, Hiroshima

Chugoku Shimbun 69

MATERIALS

Reading Documents in "Seimonkinkyoruiroku" (5)

Kojima Kazuhito 28

The Coastal Map of Whole Land of Grate Japan -Izumo and Houki-

Suzuki Junko 32

General Office in East Ezo

Horie Toshio 35

Inoh's Family Documents(3) Takahashi Sanpei's Letters

Ando Yukiko 42

Two Family Precepts

Itoh Eiko 48

COMPOSE A POEM ABOUT TADATAKA (2)

Inoh Hiroshi 26

PROM VISITORS' RESISTERS

Inoh Yoko 27

REGIONAL MATERIAL

Inoh Tadanori Diary (7)

Sakuma Tastuo 60

DAIRY TOPICS Salmon Season in Bestukai

Niwa Kikuno 70

MEETING ROOM

Editorial Department 72

Edited and Published
by

THE INOH TADATAKA SOCIETY